
魔王幼女 宮之ゆず

遍駆羽御

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王幼女 宮之ゆず

【Nコード】

N1325X

【作者名】

遍駆羽御

【あらすじ】

平凡な？ いや、平凡以下の男子？ いやおにやのこにしか見えません——衣螺^{いらあや}絢はバイト帰りに小学生の声を聞き、ベビーシッターというバイトの性質上、無視できずにその声の元へ。

そこで出会ったのは黒い修道服を着た可哀想に痩せ細った宮之^{くの}ゆずでした。

そのゆずは子猫達と一緒に肉屋 しゅーぺると♪ の生ゴミ箱から食べ物勝手に失敬していました。

ですが……それを人間が食するとお腹が痛い、痛いになる可能性が……。

絢はそれを阻止した。

ゆず「ゆつちゃんの食事を邪魔するとはお前、何様？」

絢「先読み高校に入学予定のしがない衣螺絢ですよ」

食物をいっぱい食べさせてあげると、まるでPTAに怒られる変態みたいな台詞でゆずをバイト先の託児所 友達100人できるかな？ を切り盛りする古瀬津波こせつなみの所へと連れて行きました。

津波の作った御飯を食べながら、宮之ゆずは自分は魔界から来た魔王だ！ と告げました。

ですが、もう、自分の世界の人々は勇者が指揮する軍勢に滅ぼされ、自分は独りだと語ります。そして、誰もこの異世界にはやって来れないと。

そんなゆずと暮らすことにした衣螺絢。

こうして魔王な少女と、おんにゃのこな高校生が一つ屋根の下で暮らすことになりました、とき。

だが……世界は彼女に試練を与える。

天涯孤独の少年と少女が出逢った瞬間、定められた運命は静かに動き出す……。

—— 思い出が人を強くする。

シナリオ？ プロローグ（前書き）

この小説はようじょ萌え第一しゅぎで連載していきたいと思います。
全国のお兄様方、お姉様方。

シナリオ？ プロローグ

僕は早歩きで家路をたどる。ふと、思う。そこには僕の望むモノはもう、何一つないということ。

「何を今更、感傷に浸るのですか……衣螺^{いろう}絢^{あや}」

夕暮れ時の空は何処か、物悲しい。終わりを連想させるからだろうか？ それとも……僕の遠い過去にあったはずの風景を思い出すから……かな。

何も不安なことがなく、泥だらけの野球ユニフォームの少年は同じ恰好の少年達と一緒に、なけなしのお小遣いで買ったであろうチユウチュウを口に加えつつ、歩いている。その後ろを小さな三つ編みの少女が、

「おにいたん、待って」

と危なげな足取りで追いかけてゆく。

その後ろにはビニール袋を両手いっぱいに提げた母親の姿があり、子ども達を優しい笑顔で見守っていた。

そんな光景がそこら中に広がっている。だから、茜色の空が僕には終わりを連想させるのだろう。

ああ、少し涙が溢れてきた。

だから、感傷的な少女みたいな少年なるレッテルが貼られているのだろう、主に同じ学校に通う友人達から。

シヨ・ウインドーに映る自分の姿は女の子でもないのに腰の括れがはつきりしていた。おまけにお尻まで突き出ている。鎖骨に触れるさらさらお髪は深窓のご令嬢の如き神秘なる黒、宝石のような蒼い瞳。

言われるのも当然だが……僕にだって一つ、言い訳がある。

「筋肉が僕を拒絶してるんですから、仕方ないじゃないですか……はあ。早く、家に帰って、ちくわとレタスのみのサラダを食べます

か……。貧乏、贅沢なし」

バイト先である 託児所 友達百人できるかな？ で朝から働いていた疲れを回復するアイテムがちくわとレタスというのは悲しい限りだ。

肉屋 しゅーぺると、の前を通った時のコロッケの香ばしい香りが何とも……。

「ん？ あれは……。最近、そういうの多いなあ。ちょっと、声を掛けてみますか。見られない子だし……」

肉屋 しゅーぺると、とと本屋 異野國屋の間、やっと一人分のスペースに見なれない少女の姿がある。

眼の良さに感謝した。見た処、ボロボロの服を纏っている。黒い修道服？ だろうか。だが、その黒は相当、汚れており、色んな色が混ざってしまっている。所々、布が切れていて、長い、長い年月を感じさせる。

五歳くらい？ の女の子に近寄るにつれて、獣臭い匂いがする。女の子からも発せられているが、食事をしている女の子を守るように寄り添う猫たちもその匂いの発生源のようだ。

女の子の食べているものは肉屋 しゅーぺると、の生ゴミのようだ。とはいっても、比較的ショウガ焼きの原型を留めている。まだ、捨てられて間もないようで湯気が立っていた。

美味しそうに食べているところ、悪いのだが僕は少女の骨と皮しかない手を握った。

「駄目ですよ。そんなの食べたらお腹、壊します」

「ゆっちゃんのお食事を邪魔するとはお前、何様？」

「先読み高校に入学予定のしがない衣螺絢ですよ」

「ほう、ただの自由民。ゆっちゃんのお食事を邪魔できる立場にいないって判断するよ。ゆっちゃんは魔王様だから、え〜と、絢ちゃんより偉いんだぞ」

それを証明するかのように一斉に猫が甲高い鳴き声で僕を威嚇する。普段の可愛い顔がまるでモンスターのように邪悪だ。

この猫軍団、本当に猫だろうか？ モンスターってことはないよね……と、一応、リュックサックの中に護身用のリボルバーが入っていた事を思い起こす。いざとなったら、後方に下がって素早く、弾丸を猫に放つイメージを脳にたたき込む。

モンスターはそれくらい脅威だ。何せ、ほとんどの個体が既存の動物に似通っている。

人間を騙し、その人間の肉を喰らい、生きるのがモンスターという個体だ。

だが、それを僕の早とちりだったようだ。僕がヘタレだと猫達が解釈したのだろう。猫達は小さな魔王様の顔色を窺い始める。

一匹の白猫が小さな魔王様に話しかける。

「にゃあー、にゃあーにゃん、にゃー」

「そうか……、ゆっちゃんもシロの意見に賛同する。んむう、ヘタレか……。平和な世界だからこそ、見られる個体だな。こんなに保存状況の良い肉も無料で手に入るからな」

「にゃーにゃーにゃああああ」

凄いバカにされているような笑顔でこちらを見ている猫のシロと、自称魔王な幼女様。

ここは我慢だ。幼女にバカにされるのは初めての経験ではない。託児所にいる幼女達に……。ようじよたちに……。好かれている思い出しかない。猫には……。バカにされたことはない。いつも、餌くれにゃん！ と媚びる表情しか見たことがない。

ふん、と相当、苛立っている片方ドリルツインテール、片方ツインテールの魔王様は僕には解らない言語（外国の方？）を呟く。

そうすると、魔王様の足下……。正確には魔王様の履いている木靴の踵が淡く輝く。

離すまいと力を込めているはずなのに……。いとも簡単に魔王様は指を一指ずつ、ゆっくりと自分の腕から外していく。

まるで……。お前はこの空間には場違いだと言うように……。

拘束から逃れた魔王様は自分の足下を見つめたまま、固まる。突

然……頬から涙が零れた。

僕のトレーナーの生地を掴むと、僕の足下は地面から離れた。ものの凄いい力……だ！

紅茶色の瞳がゆらゆらと揺れている。

「完全同位体……。ゆっちゃんが……いくら探してもその存在を示す情報すら……」

「おい、君？ 大丈夫。とりあえず、落ち着こ——」

「落ち着く……。そんなのできない相談だ。ゆっちゃんの友達……」

パパ、ママ、部下、国民……みんな、みんな……」

「……………」

僕は知りたくなかった……。冗談を言うのはもう、止めなよ……と言いたかった。だけど、この少女はきつと、僕以上の痛みや空虚感を知っている。それこそ、自分の存在が霞むくらいに。どうしてこの子はまだ、壊れないのだろう？ と肌で感じるほどの怒りという意志が小さな身体を揺らしている。

数秒が数時間に引きのばされた感覚をじわじわと味わっている僕の心に唐突に言葉の刃が突き刺さる。何の予告も無しに。

「殺された……。いや、虐殺だ……。死体は山になったんだ。それで……忘れ……」

「……………誰に？」

言ってしまった瞬間、僕は何て無神経なんだろうと激しい後悔の海に放り投げ出された。

「魔王の敵なんて……勇者に決まっているだろう……絢ちゃん」

モンスターなんて存在がここ、数年……出現し始めたのだから確かにそういう異世界があるのかもしれない……僕はそう、大声で泣く少女を抱きしめながら思ってしまった。

だって、真剣に泣く子どもは決して嘘なんて吐かないのだから。

シナリオ？ プロローグ（後書き）

はじめての【小説家になろう】にての、投稿で四苦八苦。これから
も宜しくね♪

シナリオ？

復讐には血を、血には復讐を……。

人には誰しも裏の顔がある。その顔は決して他者には見せてはならぬものであることはあまりない。そうではない場合、それは酷く重要な事を意味する。

この場合は物語を神の視点から見下ろす者としての立場だろう。少なくとも今は。

その裏の顔を持つ人間——古瀬津波は居残り組の子どもを見送った後、開かずの間に急いだ。

扉に触れると、扉の内側から声が聞こえた。

「今、鍵を開けます。津波様」

「うん、お願いするよ、カナア・イリ」

扉をロックする。ノブを何度か、回して本当に鍵が掛かっているか、確認する。そして、やっとそこで一息吐く。

足のない黒い人影と、オールバックで後ろ髪を左右に結んだ三十歳託児所の経営者は共に神妙な表情を浮かべる。勿論、黒い人影の表情は津波には伝わらない。

「私の鳥たちが大魔王様を護衛していたところ、魔王様と遭遇しました。私は魔王様の友人でしたから間違いありません。あれほど、マインドエラーの許容値の高い人物は大魔王様と魔王様以外にはいません」

開いていたカーテンから無数の鳥たちの声が聞こえる。まるで、自分達を褒めて褒めてとねだっているようだ。その鳥たちの種はカラス、インコ、すずめ、つばめなど、随分と世相がない。これが召喚魔法を得意とするカナアの兵隊だ。

兵隊に新しい指令をカナアは与える。

「可愛い兵隊達。勇者の動向を調べている同僚の兵隊と交代しなさ

い。そろそろ、彼らにも休養が必要でしょう。私はブラック企業の経営者ではありませんので。さあ、お行き」

カナアの顎をしゃくする動作に合わせて、鳥たちは一羽残らず、漆黒の海へと繰り出す。

何事もなかったようにカナアは津波へと視線を合わせる。

数秒の間……そこで気付く。今の自分には相手に姿が影しか認識されていない事実を。

「すいません、話を続けましょう」

「となるとよ……。完全同位体で、異性……。エラーマスター達の企てが逆に彼らすらも殺せる力と呼び寄せるなんて彼らからしたら、嫌なオチでしょう」

「いいえ、エラーマスターに言いように使われている愚鈍な勇者が金意市に数日前、入っている事から考えますと、今の大魔王様と魔王様では残念ながら対処不可です」

「一つだけ、方法はある——」

「かなあ。本人達次第の相性でもあるけど、異性同士の結びつきは結構、運任せだったりもするけど……。結びつくと強力よ」

「完全同調率の向上ですか。それにより、魔王様……。ゆず様の記憶きおく呼応魔法の練達度の一時的なランクアップを呼び起こす。ですが……

…私としてはゆずには……。恋をして欲しいんです。空論の打算抜きで」

「待つてくれないのよ、私達の敵は。すでに調整世界のバランスは崩れた。勇者と前魔王を闘わせることによって……」

「着ましたね……。魔王様」

「あなたは出迎えないの？ カナア」

「まさか、私はもう、すでにこの世にいない人間です。大いなる革命の剣によって生かされている操り人形ですから」

寂しそうにカナアはそう、呟いた。

「だけど、津波は思う。大魔王様は誰よりも優しい子だ。カナアはきつと、ゆずが死ぬまで生かされるだろう、と。」

告げたかったが、カナアの心中を探れない。せめて、表情もコミニケーションのツールとして使用可能だったのならば……だいたいのあたりはつけられたのだが。

まあ、良いか……魔王様が生きている間は何度か、チャンスがあるのだから。生きている間は……ね。

シナリオ？ 人生、山在り、ようじょ在り！

やはり、僕はヘタレなのかもしれない。何度も、何度も、託児所友達百人できるかな？ の玄関先で地団駄を踏んでいる。端から見れば、ボロ絹を纏った幼女を連れているものすごく怪しいお兄さんだ。

図的にはここの託児所から幼女を一人、不正にゲットだぜ！ したようにしか見えない。

このままでは、警察が来るのを待つばかりだ。

「なんて、説明すれば……良いんだあ。この子、先から言ってくること、電波だし……」

きっと、モンスターにご両親や友人らが殺害された……と最終的には自称 魔王様の心理状態から察した僕だけど…… 本当にそうなのか、解らない。

僕は嘘をつくのが大の苦手なのだ。

「うわあ！ お兄ちゃんだああああ！ やっぱり、お兄ちゃんはこなみんの未来のお婿さんなんだね。嬉しいよ、わたすい！」

と、文字通り、天使の声が空（二階の住居スペース、古瀬小波^{こせこなみ}の部屋）から聞こえた。

「えーと、何処から訂正すれば……良いんだろうか、この子の発言は」

苦笑している僕なんかを無視して、魔王様と古瀬小波の視線の間に見えないスパークが生じているような？ 気がした。それくらい、二者はきつい眼をしている。

「うむむうむう。誰、その女」

「無礼者！ ゆっちゃん^{ゆっちゃん}は魔王様に決まっているだろう。どいつもこいつも、ゆっちゃんを自称魔王にしたがるんだ。お前もそんな輩

か」

「えーと、どう見ても小汚い幼女にしか見えないよ」

同感だ。危うく、乳房や局部が見えそうな箇所に白い肌が見える仕様と中々、一部のマニアには大受けの衣装になっている。ソーイングセットが手元にあったのならば、僕が自分の着ているシャツを脱いで、魔王様の纏っているお召し物を繕ってあげたいくらいだ。

「お前が子どもだから、解らないんだ！」

それにも同感だ。風呂上がりだろうパジャマ姿はピンク色の実に子どもっぽい優しい色合いだ。これで動物のアプリケ（手作りの）なんて縫いつけてあつたら……さらに年齢が一回り下がるだろう。

ただでさえ、急いで二階から一階へと降りて玄関を開けた肩を怒らせる小波はショートカットの目元のぱっちりした少女なのだから。

「そんなことないよお、わたすいは大人な少女なんだよ！」

「意味わからぬよ、お前！」

「お前の方が意味不明だよ」

「うわ、お前ら、喧嘩するなあ！」

相性最悪の二人が取っ組み合いの喧嘩になる前に二人の肩を押さえて、阻止した。それでも少女達は互いに気に入らぬ相手に一矢報いたいらしく、抵抗する力を両手に感じる。

「本当に小学生さんですか？ あんた達？」

僕ではこのちびっこ戦争は止められないと思ったその時、ゆっくりとした速度で小波の頭にゲンコツが落ちた。

「痛い。うあああああ、くう、これで天才級の頭がああ」

頭を抑えて玄関先に転がろうとした小波を抱っこするゲンコツを降らせた張本人は小波の母にして、この託児所の経営者である古瀬津波だ。

まだ、自称 魔王様に罵詈雑言を吐こうとする小波の口をストロベリーキャンディーが襲う。自称 魔王様の口にもストロベリーキャンディーが襲った。

「こらこら、二人ともだーめだぞお。飴舐めて気分を落ち着けなさ

い

シナリオ？

新生活！ の予感

親愛なる姉にして、親愛なる親友であるイル。突然だが、ゆっちゃんは勇者を倒す手だてを発見した。ゆっちゃんと同じソファに腰掛けている絢なる人物がゆっちゃんの完全同位体。

完全同位体。この世のバランスを保つ為にある一定の能力にある存在の力を二分した片割れの方呼ぶ。感情や思い出を共有することによって、共鳴現象が起きて、その力はこの世のバランスを打ち壊すと言われている。

言われているのは過去の事例からだ。医学で新しい治療法を発見したものもいる。数学で新しい公式を打ち立てた者もいる。勿論、武勲に優れたものもいた。

魔王となれば、想像するだけで……笑いが止まらなくなる。

勝てる！ 勝てる！ 勝てるぞ、憎き勇者まじきゆうじ 兆詩音おとに。

ゆっちゃんは这个世界に来て初めて、光明を手にした。そのお蔭なのか、日向ぼっこしているみたいに心地よい睡魔が訪れる。

ゆっちゃんの頭を支えている大きな肩はまるで鉄のように硬い。その頑丈さが何よりも安心できた。その加護に触れていれば、もう恐れるものはないとまで思える。

こくん、と首が自分の意志とは関係無しに下がる。

周りを観察した。対面して座っている女性と女の子には気付かれない。

良かったあ、と安堵の溜息を吐く。

魔王として、一般人に舐められるわけにはいかない。魔王たるものの、絶大な威圧感を常に周囲に張っているものだ。

「くすっ」

「うえ？」

ゆっちゃんの半寝顔を見ていたに違いない絢ちゃん。見守ってま

すよつてな柔和な表情がそれを証明している。

恥ずかしくて思わず、眼が合った瞬間、ゆっちゃんは目線を逸らした。

「くすっすっすっす、魔王様は百面相ですね。弱々しかったり、凛々しかったり、とお忙しい」

「うっ、それよりもバスルーム？　といったか、大変快適だったぞ。お礼を述べよう、え」と

「古瀬津波。ここ、託児所　友達百人できるかな？　の経営者よ」

「おっ、これは丁寧に。ゆっちゃんは魔王　宮之ゆず。津波、気に入った。以後、ゆっちゃんに仕えるがいい」

「ははあゝ」

急に立ち上がり、恭しく一礼する津波の様子を見るからにゆっちゃんの言葉を高貴な者のほんのお戯れ程度にしか解釈していかないらしい。それはそうだ。魔王のお気に入りになるということは、今後一切の成功が約束されているようなものだ。

見ず知らずの人間にあんなにありがたい湯を与えてくれる人柄は満点なのだが、ゆっちゃんに用意してくれたひらひらの服はいただけない……。

だって、これは給仕の服ではないか。

「だが、しかし、この服は従者が着る服……」

「違っよん、魔王様。それは東京の一部で人気のメイドさんが着用しているメイド服だよ。これで気になるあいつもイチコロよ！」

「気になる？　あいつ？」

「いるんですか？　魔王様」

またしても、絢ちゃんと眼が合った。やや不自然かもしれないが、在らぬ方向を向く。

完全同位体と、恋人同士になれば、それは必然的に同調率も上昇し、肌と肌の触れ合いをする間柄なんてことになれば……。

考えるな、それはとてつもなく、いけないこと。何故ならば――

「……そ、そ、ういいうのは、立派なれでいーになってから、と母様

から言われておる。ノーコメント」

「おませな子ね。で、この子は――」

「古瀬小波……お兄ちゃんの婚約者よ」

津波の隣に座っている女の子がそう自己紹介する。

「え？ 有り得ぬな。ゆっちゃんの完全同位体はゆっちゃんのモノと、法律で決まっておる」

「法律？ 何処のお。また、夢小説じゃあないでしょうね」

「またって、またって？」

「決まってるでしょう？ ゆずが魔王だっていう設定のことよ。普通、魔王様ってのは肌が不健康で、やたらにマッチョで、マント付きの中年おじ様に決まってるでしょ！」

「何処のゲーム内の魔王様設定だよ、それ」と、絢ちゃんが訳の解らぬ発言。

「そ、それにお兄ちゃんに妙に馴れ馴れしい――」

「いや、僕は大丈夫ですよ。気軽に接してくれて」

「お兄ちゃんは黙ってて！」

「そう、これはゆっちゃんと小波だけの戦争だ！」

「はいはい、戦争はまた、今度ねん」

と、ゆっちゃんと小波の闘いの間に入る津波。仕方がない。ここは津波の領土のようだから従うのが礼儀というもの。ゆっちゃんは暴君になるつもりはない。

「落ち着いたところで話を聞きましょうか、絢くん？」

「はい、何でも聞いちゃって下さい。その方がこつちとしては説明しやすいですから」

「この子は何処で拾ってきたの？ 見たところ、毛並みの良さそうなツインテール子猫さんね」

「ああ、しゅべる♪ のゴミ箱を漁っているところを保護しました」

「お腹が空いていたのだな。あそこで食事をしておった」

「ええ！ ゆず、汚いね」

と、ゆっちゃんを侮辱する小波。まるで言った本人が侮辱とは認

識していないようだ。辺りを見回すとなるほどな、と納得する。

なんだか、構造はよく知らないが、人間の発明したものでわずかな動作で水や、光を操ることのできる環境。実に恵まれている。

部屋には埃一つしかない清潔さ。下手すれば、魔王城よりも清潔かもしれない。尤も、この家と魔王城では決定的な差がある。

ここは血の臭いがしない。

そう、結論づけた時、羨ましさよりも激しい嫉妬の感情がゆっちやんの身体を包み込んだ。

「汚くない！ 実に保存状態の良い食料だった。ここは恵まれているんだ」

「んん、そんな酷い場所に住んでたんだあ。ひょっとして、旧首都 東京？ あそこ、一年前、世界で初めてモンスターが出現して酷い有様なんですよ……」

「モンスター？」

モンスター？ それは何なのだ？ ゆっちゃんの世界で言うところの邪悪な魂を持った殺戮だけを尽くす存在——悪魔の事だろうか？ それと似たような存在であることは確かだあんなに明るかった小波の顔がその東京とやらに住む民を思ってか、険しくなっている。ここの世界にも悪魔がいる事は道中、遭遇して確認済みだ。幸い、記憶呼応魔法のみで退けるレベルだ。だが、大丈夫なのか？ とゆっちゃんは少し、平和ボケしている金意市の民達の姿を思い浮かべた。

「ゆずは知らないんですか？ それに見たところ、武器を携帯していないようですし、世の中、物騒なんだから携帯していないと駄目ですよ」

「うむ、武器なんぞ、いらぬ。ゆっちゃんには記憶呼応魔法がある！」

「へへ便利なんですね、魔王様」

「おい、また、バカにしてるな、小波！」

「いいえ、魔王様。実は私も——」

横から津波の手が伸びて、小波の口をがっちりと塞ぐ。小波は藻掻くが、その拘束は強固だ。

「ん、ん、ごほお、ごほおん（わざとらしい咳）。質問第二弾！ぶぶつ、ぱちぱち（津波しか拍手をしていない。正直、テンションについていけない）。絢くんは動物さんは大好きですか？」

「待つて下さい！　なんか問一と問二の共通性が解りません！」

「あら？　鋭いツツコミ。成長したね。さあ、とりあえず、イエスカ、ノーか？　答えて」

「そりゃあ、好きですよ。特に猫が大好きです。可愛いですよ。人類皆、猫好きなら、戦争なんて起きないでしょうね、あの癒しパワーの効果で」

「でしたら、その癒しパワーを日頃から摂取してみたいと思わない。具体的にいうと、生後……ん」

「な、津波、何故、ゆっちゃんをナメクジの如く、観察するのだ？　野心に満ちた双眸はきつと、ゆっちゃん自身をどうにか、してやろうと策謀を巡らしているはずだ。ゆっちゃんは産まれてからずっと、そんな人間達を幾度となく、遭遇した。だが、この世界ではそんな眼に晒されたことは皆無だった。

……そんな眼で視ないで欲しい。できれば、イル達のようなゆっちゃんの信頼できる人間であって欲しい。

両膝に添えていた両手が自然と拳を作る。汗がじわりと拳内に伝う。

「ふっふっ。ん、生後五年くらいの子猫。血統は確かな魔王子猫ちゃん」

「魔王子猫つてもしや……僕はそれも含めて津波さんに協力を……」
ゆっちゃんも気付いた。

生後五年〓それくらい、幼い。

魔王子猫ちゃん〓魔王な子猫はいない。しかし、魔王な人間はこの場にいる。

その二点の条件に合う対象物は、魔王幼女　宮之ゆず。ゆっちゃん

んしかないない。完全同調率のことを考えれば、これは好ましい提案だが、心の準備がつかない。

こ、こ、この胸の高鳴りは初恋だろうか、いや、初恋に違いない。一ミリ程度に膨らんだ胸に手を充てて、早鐘を打つ心臓に確認を取る。

心臓曰く、うん！ 魔王様、これは初恋れしゅ！ とカーニバル仕様。

「絢くん、これはチャンスよ。今年の三月に、モンスターに殺害され、人口が減少した我が愛国 日本は結婚まで試しに一緒に暮らしてみたら？ 年齢制限無しよ宣言だしたよね。その法律なんていつたっけ……えーと」

「ああ、あの憎き悪法ですか……はあ」と、やや津波の身を乗り出したハイテンションについて行けず、絢ちゃんは溜息を吐く。「少子化特別対策法 第三条 婚約に関してだったような気がしますね。役所に婚約書を提出して、夫婦同様の権利を国が保証するだったような……。えーと、年齢は問わないっていう悪法。戸籍も新規に作成できるようになったんですよね、第一条でしたっけ？」

「ええ、それを利用しない手はないわ、手続きは全部、知り合いに丸投げしておいてあげる」

「どう、感謝しなさいって顔されても、僕はイエス……とは。倫理観にそもそも、問題が」

「ママ、うちの子にするのもありだと思ふなあ」

と、絢ちゃんと津波さんの会話に割って入る小波。

小波は絢ちゃんの事が好きだっていうから、ゆっちゃんのライバルということになるのだろうか。

これが戦争だったら、絢ちゃんがイエスと言ってくれるならば……小波にしてみれば、砲弾を城壁にしこたま、撃たれているようなもの。

そんな理屈では解っている。気持ちは落ち着かない……。明らかに矛盾している。

「小波ちゃん、子どもを育てるのにはこれがかかるの」

津波は輪っかを指で作り、小波に自分の考えをアピールした。あの輪っかは何なのだろうか？

「これですか……ママ。うちの弱点かぁ……うー、ヒットポイントゼロな気分」

これっと言った時、小波は同じく輪っかを指で作っていた。

「うちも、これないんですけど……」

また、輪っかだ。何だ、あれ……。

「若い頃は苦労は買ってでもしろ！ って言葉があるじゃない」

「津波さんは若く……あっ」

「あっ」

「かちん……、私の堪忍袋がキレる音」

「え？ あ……これは解る」

ヤカンのように顔を真っ赤にしている津波以外、みんな、凍りついていた。

ゆっちゃん、これだけは解りたくなかった。気まずい……。

シナリオ？ もしも、明日、世界がなくなったら……。

魔王が金意市にある某託児所にて魔王の完全同位体と一緒に生活する——すなわち、戦力の増強に成功した午後七時頃。旧首都東京から五キロ、離れた同じ金意市の金意港付近 臨海公園にて、勇者一行をカナアの使役する鳥たちが街灯の天辺から監視していた。

海沿いに面したベンチに座る男——兆詩桜魔^{きんし おうま}はギターケースからギターを取り出し、構える。

指を何度か、開き、まだ、自分の指が動くことを確認する。そして、ピックを握る。もう、握力と呼べる力には自分にはなく、強風が吹けば、途端にピックは飛ばされてしまう。その為、ギターケース内に予備のピックを用意してある。戦闘準備は万全だ。

ただし……

「俺の体力はゼロだけだな。ちくしょう……癌のやろうめ……。俺の夢すら、叶えさせてくれないのかよ！」

叫ぶ声は弱々しく、目の前にたゆたう暗黒の海にすら届かない。泣こうと思った。だけど、いつも、相棒は泣かせてくれない。

「ふん、これで魔王は油断するに決まってるわ。あたし、自分の頭の良さにちびりそうだわ」

金髪の姬カットに、長身の少女はそう、不気味に微笑む。その微笑みは歡喜に満ちている。彼女のには魔王を卑怯な手で倒すためのウェポン作成に成功したようだ。

だが……彼女の手のひらの上に乗っかっているのはただの折り鶴だ。これでどうやって魔王を倒すのだろうか。桜魔には理解しかねた。

ああ、ちよっぴり世を儚むカッコイイスキンヘッド ナルシズム

が台無しだ。仕方なく、いつものようにツツコミを入れるか、麗しい相方に。

「俺は正義の象徴　勇者様のアホぶりにゲボリそうだわ、マジで…」

…」

「はあ、あんたの眼は節穴？」

「はあ、あんたの頭脳はバナナ？」

桜魔は相方——兆詩音きざしおとをやんわりとからかう。口調もかれすいの話をするのが大好き十代女の子仕様だ。はっきり言って低い声でそんな声真似なので気持ちが悪い。

自分に大ダメージだが、音も大ダメージを受けているようで……整った女優顔が怒りに歪んでいる。

「おい、バナナをバカにするな。あいつはミネラルが多く含まれているし、ダイエツトにだって良いんだぞ」

そう言えば、この勇者様はバナナ好きだった。バナナ＋牛乳だとさらに好きらしい。ただし、牛乳単体では胃が拒否するう！　と本人がいつだか、のたうち回っていた。

「お前、どんだけ、バナナにぞっこん、なんだよ。で？　今回はどんな勇者にあるまじき、魔王たんイジメを企画中なんだ。ネタが増えてくれただろうに」

正直、音の芸人魂を彷彿とさせる魔王に対する罠に桜魔は良い感情を持つてはいない。なにせ、音の打倒すべき魔王様——宮之ゆずは八歳の百二十五センチ、細身、ツインテールで片方ドリルっぽい（音の言う魔王像をまとめるに……）だからだ。対する音は身長百六十七センチ、ロングコートを難なく、スタイリッシュに着こなす超戦士だ。

どう見ても、その二人が対峙したのならば、イジメの構図だろう。最近はいジメに対して世間の目が厳しいので誤解されるような展開は相方として、桜魔は断りだと前々から音に口を酸っぱくして言い含めようとしていた。

この勇者様は卑怯な癖に魔王を倒すという勇者における王道的な

使命には大まじめだ。聞く耳を持つ訳がない。

せめて、背中に背負った聖剣 アキシオンで立派に闘ってほしいものだ。

「イジメではなああああああああ！ これはね、魔王と勇者の死闘なんだから」肩で息をする。力み過ぎだった。「今回はね……。魔王、道端に落ちている折り鶴を発見！ 魔王「可愛いではないか！ ゆっちゃんの部屋に飾るとしよう」 てくてくてくてく、これ歩く音な」

「……………その折り鶴はお前が用意したやつ？」

自信満々に肯定する勇者様。

「折り鶴を取ろうとしゃがんだ時、後頭部をこの聖剣で狙う。魔王の生首ゲットだぜ」

「地上最悪の勇者だろう、それ実行したら」

「桜魔は解っていない！ マンガやゲーム、アニメの勇者みたく正々堂々で熱血野郎なんて本物の戦場では一番、早く死ぬのよ。冷血な奴ほど、生き残る。それが闘い」

「だとしたら……」

生きる為の闘いも時として冷血なほどの機械的対処が必要なのだろうか？ だとしたら、俺は失格だな。無謀な夢に生きている。そう、苦々しい自己分析をしたくもないのに、してしまった。全く、無意識は恐ろしい。

いつものように如何に宮之ゆずちゃんが我々、年上の者にとって守るべき存在かと、勇者様に諭そうとした時だった。

「おーい！ 桜魔くん。取材させてもらっていいかなあ！」

アロハシャツ、サングラスのおよそ社会人らしくない日に焼けた男が遠くから手を振っている。その男と、桜魔と音は面識があった。

その男——浦城修司うらぎしゅうじは帝國テレビの記者だ。彼の背後には背後霊の如く、常にカメラマンが付きまとっている。今日も桜魔がアコースティックギター、音がヴォーカルのデュオ——K I Z A S H Iの取材に来たのだ。

桜魔達にしてみれば、桜魔の夢である日本一周の旅の路銀を稼ぐために結成したデユオであるから……そこまで注目しなくとも、という気持ちと、評価されているという気持ちの半々だ。

二人とも眼を見合わせてから、桜魔の方が修司に対して返答を送る。

「仕方ないなあ。修司と俺の仲だから許可しよう。ただし、いつもの路上ライブだから期待するなよ」

「なあに、それはいつも通りだろう。僕は武道館ライブも視野に入られるヒットぶりですなんて軽口を叩いちゃう一部のメディアとは違うよ。僕は取材方法に自然体を求めるのさ」

「じゃあ、ビラはもう、配り済みだから観客が集まり次第、ライブ開始だね！ 桜魔」

「おうよ！」

ああ、音が聞こえる。その音を聴く度に桜魔は自分がまだ、生きていると感じられる。

ギターを掻き鳴らす。観客が息を呑む音までもがギターのリズムを後押しするバックサウンドだ。

音がビブラートを上手く、効かせて歌い続ける。

> 君の言葉 吐息 肌 唇 全て触れされて――

覚醒してく 本当に大切な記憶に包まれて……

優しい時間はいつも 子守唄のよう

背の高い君にいつになったら近付くの？ 秋空の風に紛れて問う声

何を勘違いしたのか 微笑んで手を差し伸べた君に

私はその笑顔に抱かれてここに居るのだと実感する

思えば たった独りで暗い心をそつと 育てて凍えていたよ

今は君の全てが人の熱ほどの甘いミルク 猫舌な私はゆっくり 飲んでいる

だから――

負けはしないよ　どんなに壁が高くても　蹴破^{キミ}つてその先に進む
負けはしないよ　闇に染まる想いを制御する光の面影に誓った
今こそ　この夜空を翔る一閃の翼となれ

君の言葉　吐息　肌　唇　全て触れられて――

覚醒してく　本当に大切な記憶に包まれて……く

その歌声が嬉しさのあまり開きつばなしの口腔からすつーと入って
いく。すると、身体中が何らかの科学反応を起こしたみたく、熱を
帯びていくのだ。その熱は穏やかで優しい。　桜魔と同じように感
じているのか、観客の中には目頭を押さえつつ、涙を流す者さえい
る。

何故だろう、何故……彼女はこんなにも愛情に深い声音を発する
ことができるのだろうか？　それはまるで人生経験が豊かな往年の
歌手の如き、貫禄さえ感じさせる。

推測は多分、できる。

歌い終わり、頬に汗の浮かぶ横顔に潜む表（今）と裏（昔）の顔。
それを両方、見つめながら、桜魔は彼女の何かに向かう壮絶なまで
の直向きさを感じ取り、それがその貫禄だと推測する。

直向きさこそが生きているということならば、残り火のような激しさ
で燃える桜魔のそれは……命さえも削る。そして……消える。

今、演奏の音が消えて、しーんとした暗がりの臨海公園の影より
も尚、暗い……そこが桜魔のいつか行かねばならぬ場所。

怖い！　怖い。生きること、死ぬことも、時間が経過すること
さえ、過去の時間を振り返ることさえ。

光さえ……光さえ、音の金髪と評するには輝き過ぎる光る髪さえ、
灯台の灯の如く、見つめていれば、桜魔は岸边にまで辛うじて戻れ
る気がした。現世に自分の生を留められる気がした。

必死に音の眩しい髪を眼の端に留めておいた。

観客や、取材スタッフが帰った後、音が桜魔に言う。

「大丈夫。まだ、桜魔は死なないから。この言葉は信じて良い。あたしは人の生命力を値として捉える能力——生命察知を会得してるから」

「信じよう……」

その言葉は酷く喰れていた……

「あああ、もう！ 桜魔、これから魔王捜しに行くんだから、シリ阿斯モードはおしまい」

「ほどほどにしるよ、端から見れば、誘拐犯みたいな搜索法だぜ。八歳くらいの片方、通常ツインテールで片方、ドリル的なツインテールの子、知りませんか？ なんて聞き込み」

明日もちゃんと夜から朝へと変わる。そんな確定された未来を感じつつ、桜魔はギターケースの取っ手を握り締め、駅前へと歩を進める。その後に鼻歌を歌う勇者様が続く。

シナリオ？

恋は戦争！！！！

僕は現在、困った状況に陥っている………。

いや、この困った状況は意図的なモノを感じると言っても良いだろう。

昨晚、一時間ほど、津波さんをなんとか、説得して自称 魔王様である宮之ゆずちゃんを託児所に置いてもらおうとした。最低でも食費くらいは僕が捻出するつもりでいたのだが、お人好しの津波さんでもやはり、ゆずちゃんを預かる選択肢はなかったらしい。

ということで、大量のお洋服（津波さんの幼女時代のお古）を紙袋に入れて貰い、僕とゆずちゃんは午後九時頃、帰宅した。

ゆずちゃんが僕の住むアパート——メゾンNOZUTUKI（築三十年 木造）を横目で一瞥して、ポツリと言った感想が今も頭の中に残っていた。

「ゆっちゃんを助けてくれたお礼にいつか、城に一室、絢ちゃん専用の部屋を用意する」

思いつきり、哀れまれた気がした。いや、気なのか？ と今も脳内自分会議を開こうと……。いや、いや、そんなのはどうでも良い問題は！

「なんで、パンツが一枚もないんだ。津波さん、もしや、わざと！ そんなこと、ない。ない」

「絢ちゃん、替えのパンツなんていらない。ゆっちゃん、今、装備しているパンツを手洗いして再利用する」

「その間、どうするんですか？」

「すーすーするな？ でも、問題なかるう」

眼を擦りながら、僕を仰ぎ見るパジャマ姿のゆずちゃんとトランクス一丁の僕イン 流し台付近っていうのですら、問題アリ！ なのに。というか、ゆずちゃん……。僕が着替え終わるまで、

リビング兼・・・・寝室兼・・・・娯楽室兼・・・・
その他を全て賄う一室に行っていて、とあれほど、言ったのに。
どうやら、寝ぼけ眼だったようだ。

「いや、いや、僕がようじよにはあ、はあするお兄様と勘違いされ
そうで嫌です、それ。ああ、パンツさえあれば・・・・ギブミ
ーパンツ！」

その頃、託児所 友達百人できるかな？ 古瀬小波の自室では一
人の恋する幼女がヤンデレ化を見事に果たしていた事実を我らが少
女限定フラグ立て一級建築士 衣螺絢氏はご存じない。

小波は天井に張り付けた絢の写真を恋する幼女特有の粘ついた視
線で見つめる。昨晚、絢が連れてきた自分よりも年下であるうアン
バランス ツインテール（怒りのあまり、名前は忘れた）は悪意味
で小波にとってサプライズだった。

「そんなの、聞いてないよ、マジで。お兄ちゃんは私のものなんだ
から。それは前世から決まってるの。前世で私は官吏の娘で、お兄
ちゃんは異国の王子様だった。当然、お兄ちゃんは私を賤民の身分
から異国のお姫様にする王子様でもあったのよ。色々、ありながら
も、私とお兄ちゃんラブラブハッピーエンド♪ きゃふん♪」

妄想で儚い幸福を享受する小波は縫いぐるみをぎゅっと、抱きし
めた。抱きしめている縫いぐるみの林檎（文字通り、果物）は昨年
の十二月一日 午前六時三十分頃、駅前のゲームセンター ランド
石松のUFO キャッチャーで絢に獲ってもらった縫いぐるみだ。

毎日、毎日、縫いぐるみと一緒に寝ているくらいのお気に入り。
勿論、この縫いぐるみを愛しいお兄ちゃんに見立てている小波は生
まれながらにして変態の素質がアリ！ と判断されても致し方がな
いだろう。

そんな変態の笑顔に影が差す。

「あ、でも、でも、昨日は一矢報いってやったわね・・・・。
きつと、今頃、替えのパンツがなくて、オロオロしているよ、あの

アンバランス ツインテール」

くふふーんゝ な笑みさえ溢れ出す余裕。

これを利用して第五百六十回 お兄ちゃんゲットだぜ！ 作戦の発動を小波は思い付いたのだ。

概要はこうだ！

うちの庭の桜が綺麗に咲いているので花見をしませんか？ とお兄ちゃんに提案↓悔しいことながら、小波を妹分と誤っているお兄ちゃんはきつと、うん、いいよ！ と春風さえも思わず、その格好良さに花を添えなくなるほどの爽やか回答↓今日は邪魔な津波と託児所で預かっている子ども達は近くのパン工場に社会科見学↓小波、一人お留守番+お兄ちゃん〃二人つきり↓何かの間違いが起こる。もとい、起こす↓お兄ちゃんは誠実だから責任を取る。

「ゴール！ ゴーあおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおるうううう！」

「小波、うるさい！ 近所迷惑！」

「ごめん、ママあ！ ちょっと、某アナウンサーの真似してたの」
それにしても、この大量のパンツをどうする？

小波は自分の机の上にある大量のパンツに思慮深げな視線をぶつける。

季節外れの焼き芋でもするか？ と思ったが………パンツのキーワードである思考が頭を過ぎった。

まさか、とは思ったが、その可能性もある。シミュレートしてみよう。

アンバランス ツインテールのパンツがない↓優しい優しいお兄ちゃんは賤しいアンバランス ツインテールにも寛大だ。当然、パンツを買いにいく↓近くのコンビニでパンツを購入。お兄ちゃん変態疑惑がかかる。

寝汗がサツ——と退いた。それはもう、波の如く。

とんでもない速度でパジャマの第一ボタンに手を掛ける。えええい！ こんなボタン、もげろ！ もげろ！ と心の中で悪態を吐き

つつ、ボタンを全て外す。

パジャマを邪魔とばかりにベッドに叩きつける。ついでに脱ぎ立てのパンツも叩きつけた。

クローゼットを開き、最初に目に入った余所行きのスーツを着込む。強ち、間違いではないだろう。大人な女性にとって会社は戦場。小波にとって絢にパンツを届けることも戦場。ほら、見事に一致している。

「あ、パンツをはき忘れた……………」

その事実に気が付いたのは急いでパンツをランドセルに詰め込んで、託児所からアパート　メゾンNOZUTUKIへと走り始めて五分後だった。

ということとは……………今までノーパンでダッシュをしていた？

「いやいや、私は見えないパンツをはいていたの。高貴な者にしか見えないパンツよ」

「……………」

さすがに無理があると、幼い少女の心に致命的なダメージが加わる。自らの下手な言い訳によって。

「ちくしょう、覚えてろ、魔王様め……………」

今日も恋する少女は大忙しなのだ。

シナリオ？

あの日の敗北と苦渋の選択と……………

ゆっちゃんは日々の鍛錬を忘れない。パンツをはいていない状態でも忘れるわけにはいかない。それだけの理由がある。

アサガオに差し込む日射しの柔らかさを睨む。いや、実際に睨んでいたのは、自分だけ幸福な世界にまだ、存命し続けている自分。棒きれを握る手にも力が入る。

振るう。振るう。もっと、振るう。その度に空気達は甲高い唸り声を上げる。

手が止まる。

その悲鳴を聞く度に何百回目かの、あの日の敗北と苦渋の選択が蘇る。

「死ねばよかったのだ……………ゆっちゃんもあの場で」
ぎゅっと、眼を瞑る。

「お願い、お願い……………大魔王様。ゆっちゃんをあの日……………去年の七月十日 禁断の月の十に帰してください。今度こそ、ゆっちゃん、魔王の杖を正しく、使う。バベル システムに打ち勝つ。だから……………だから……………だから……………」

もし、大魔王なる存在がいたとしたら、きつと……………正式な魔王以上の力を備えているだろう。それこそ、魔話^{まわ}に存在する神と大魔王と同じく。

世界一つ、軽々吹き飛ばし、神と大魔王の闘いは無数の世界を収めている運命庭園で行われたという魔話——最終章 無数世界覇権戦争のような凜々しい闘いすら、あの時の……………ゆっちゃんは体現できていない！

「ああああああ……………ああああああ！ ああ！」

棒きれで桜の樹を殴る。けど、びくともしない。足の指先にはまっている十のトゥリングのうち、力のリングを発動していない幼女

の力では……それも無理はない。でも――

「許されない！ 許されない！ こんな、こんな！ こんな！ 不様ではないか！ 正式に戴冠式を挙げた魔王ではないけど……ゆっちゃん最後の魔王なんだあ。うつ……。あああ」

言葉を喋るのさえ、もう、苦しくてただ、ただ、桜の樹に八つ当たりする。それがどんなに滑稽か？ 頭の片隅では魔王を継ぐ為に、ありとあらゆる知識を備え付けた理性の自分が冷ややかな視線で品評している。勿論、理性の自分は幼女な自分に最低ね……としか評価を与えてくれない。

その度に理不尽な怒りを桜の樹にぶつけ続けた。

何度目かの打撃――

「止めな」

「え？」

「悪ガキ、桜の樹だって生きてるんだ。弱い者を虐めるのは弱者の思考だよ。って言ったところで五歳児には解らないか」

五歳児という不遜なレッテルにはノーと言いたかったが……そんなことよりもゆっちゃんの棒きれを掴んでいる白髪のお婆さんの言い分の方を気に留める。

素直にゆっちゃんは頭を下げる。

「ごめんなさい」

「違う！」

「へえ？ あ、そうであつ、あつた」

ゆっちゃんが謝るべきは桜の樹だと、悠然と佇んでいるお婆さんはそう言っている。そう、ゆっちゃんにすぐに解った。

素直に桜の樹に頭を下げる。

「ごめんなさい、桜の樹。ゆっちゃんはパパのような優しい魔王になると誓ったのに、王族に相応しくないことをした。何度、謝っても……許されぬ……」

しょぼくれるゆっちゃんの頭に皺だらけの手のひらが乗った。

「桜の樹はもう、てめえを許しただろうさ、悪ガキ」

「しかし……」

「ぐたぐた、言うんじゃねえ。魔王様」

「え、ゆっちゃんを魔王だつて信じてくれるのか、老婆？」

「老婆は余計だ！」

耳がきーんとする怒鳴り声にびくつとしてゆっちゃんの身体はぴくつと竦み上がった。もしかして、怖い大人なのだろうか？　だが、手のひらは暖かった。

だが……目つきが戦場の兵士のように鋭い。

どっち？

「そんなに怯えるな、魔王様。世の中にはモンスターなんて化け物が出ちまっているんだから、信じるさ。九十年も生きていると不思議な出来事にときたま、会うもんさ」

と、言つて老婆は庭に設置されたパラソルの下にあるテーブルに着く。

おもむろに、タバコを二本、器用に取り出すと二本とも吸う。

「ふつうはあく。やっぱ、朝の一服は美味いね。この為に生きてるもんさ」

「そ、そうであるか……美味しいのか……。ゆっちゃんも……」

「駄目だ。うめえタバコを吸うには私みてえに良い女にならなきゃな、小便可せえガキ」

にこつと、こちらに微笑む。覗けた口に光る数本の銀歯。

良い女？　と首を傾げそうになるが、やっぱり、怖そうなので逆らわない。

「ところで確認なんだけど、母乳くせえガキは昨日、小僧……これじゃあ、わからねえな。絢が部屋に連れ込んだちびつてことだよな？」

少し、考えてからゆっちゃんは答える。

「それはゆっちゃん……宮之ゆずのことだ」

「ふーん、なかなか、可愛らしいガキだね。私はこのボロアパートメゾンNOZUTUKIの管理^{のぞつき}人 望月^{りんご}林檎だ。以後、宜しく」

「こちらこそ、宜しく、だ……です」

「ふふん、お利口さんだね、お前。んで、なんでそんなに桜の樹に八つ当たりしたり、兎みたいに眼を真っ赤にしてやがる」

「それは……」

「愚図はキライだよ、このばばあは」

さあ、話せと顎で催促する。

「わ、笑わないか？ 信じてくれるか？」

「おうともよ」

「じゃあ……話す」

そう、林檎に言ってから、ゆっちゃんは林檎の向かいの席に腰を降ろした。タバコの煙に咽せそうだが我慢しよう。

それにしても、何故、大人はタバコなんて不味そうなモノは吸うんだ？ ゆっちゃんには理解しかねる。

「では話すぞ——」

大魔王歴二千四十年 禁断の月の十。

ゆずの部屋から、ゆっちゃんの語りを始めよう……。

汽車の汽笛が聞こえる。その音は幻想なのだろうか？ ああ、幻想でない事をゆっちゃんは願う。

格子の掛かった窓から、汽車が上げる黒煙を確認しようとした。だけど、死体の山や戦火に隠れてそれを認識できない。

あの死体の山には未だ、埋葬の叶わないゆっちゃんの魔王学校の友人達もいる。

四天王になって、田舎の妹に畑をプレゼントしてあげるんだと言う心優しきオカリナ吹き少年 デイ・フィーチャ。得意魔法は剣を使った強化魔法。

目標がなかったが、ゆずの人柄に触れてゆずを専属にサポートするゆず専門の護衛を目指す少女 カナア・イリ。得意魔法は鳥を召喚する召喚魔法。

王宮コックを目指す少女 プス・リール。得意魔法は焦げた木の枝から火を呼ぶ記憶呼応魔法。

そんな心優しき仲間を思うと、今の籠城をしつつ、安全を確保した身である自分に腹が立つ。

「ゆず様」

「何？ いりゆ！」

ウルフカットの金髪少女——イル・シュークリームをゆっちゃん
は思わず、怒鳴りつけてしまった。

だが、イルはゆっちゃんにいつもの悪意の欠片もない笑顔を魅せている。そうされると、余計に心苦しくて……ゆっちゃんはそっぽを向いた。そんなゆっちゃんの顔をそっと、ワレモノのように両手でイルは包み込んでくれた。

そして、イルの腹部にゆっちゃんの頭は触れた。イルが呼吸をする度にお腹が膨れたり、萎んだりする。それを聞くのに集中してしまふ。

「ゆず様」

そう、もう一度、呼ばれてイルの顔を確認しようとするが、視線がエベレスト級の胸に阻まれて確認不可能だった。イルの顎すら、見えない。

ゆっちゃんもいつか、こんな凄い十八歳になれるのだろうか……。胸だけではなく、イルは背も高く、下手すれば、男性よりも高いかもしれない。剣の腕も超一流だ。

「いりゆ……」

「落ち着きましたわね、ゆず様」

「……………」

答えずにまだ、イルの腹部に耳を充てる。甘えん坊でも良いわ、とゆっちゃんを包むイルの両手が甘やかしている。

「この両手は絶対に離しません……。ゆず様、ご報告があります」

「……………何」

何、と言っていないながら、イルが何を報告するのか、ゆっちゃんに

は解っていた。だけど、人は自分の都合の悪いことはなかなか、信じたくないものだ。それがパパとママの死ならば尚さらだ……。

不思議なもので汽車のあの……喧しい音が気にもならなくなっていた。それどころか、全ての音が凍り付いたように感じる。無音……。

そして、イルの声で全ての音は再び、時を刻む。

「本日 午前八時十五分 勇者の振るう聖剣 アキシオンにて、魔王様と后様が崩御あそばしました。場所は……アインセント駅です。我が軍は魔王城に通ずるこの路線を死守しようと奮戦したのですが……」

「よい、よいのだ。イル……。今日からゆっちゃんが魔王だ……。最後の魔王だ」

悲しくはなかったというのは嘘だろうけど、もう涙は枯れ果てていた。勇者達が魔王は全ての世界に不幸をもたらす存在であると頑なに主張して、調整世界を混沌の渦に巻き込んでから数百年が経つ。その間に色んな人が死んでいった。だからだろう、異様に私達は涙を流すということを知らないと四天王の一人 トマ・トマトが言っていた。トマには異世界からやって来た妻がいたのだ。

「さ、最後なんて言わないで下さいまし……ゆず様。ゆず様は……きつと、このまま、成長してご結婚なさいます。い、いえ、イル的には結婚してほしくないですがあゝ結婚します！」

「何、慌てている、いりゆ？」

「い、いいえ、ちよつと、ゆず様とゆず様の結婚相手のしょ……を想像しただけでございますわ。問題ありませんわ。ごほん！ とにかく、ゆず様はお子を授かり、魔王を次の代へと繋げるのですから」

「ふふっ、いりゆ。それは無理だ。アイセントが落ちたとなると……当然、補給路を走る汽車は勇者に奪われ、勇者どもはすぐにでも、この幼女を殺しにくるだろう」ゆっちゃんが死ぬのが怖いなんていうよりも、イルの顔を見るのが嫌だった。きつと、ゆっちゃん以上に血の気の引いた残念な表情を浮かべているだろう。俯き、冷たい

石床を眺めた。「覚悟はできて……いる……。死ぬ、覚悟は」

死ぬ……ゆっちゃんか？

綺麗に磨かれた石――癒し石は鏡のようにゆっちゃんの身体を映し出している。

自分の幼さが如実に表現されている。

イルには及ばぬ胸元……。ママが貧乳なのでイルにはなれない。

細い腕……。トマの腕は太く鋼鉄のようだ。以前、触らせてもらったことがある。

敵兵にすぐにでもへし折られそうな細い足……。同じ細い足でも二歳年上の四天王の一人 ミクミの足は、足にバネが仕込んであるのでは？ と疑ってしまいうくらい瞬発力に優れている。

翡翠色の長髪……。もう、この世にいないパパと同じ髪の色。これから大切にされたかった。

淡い朱色の唇……。ゆっちゃんはまだ、恋を知らない。恋をしたら、どうなるの？

未来はゆっちゃんにはもう、ない。癒し石に映っている自分が滲んでいた。違う、これはゆっちゃんが涙を流しているからだ。眼が痛い。

眼を擦ろうとする。それよりも先にイルの大人の指先がそつと、ゆっちゃんの瞼に触れた。悲しみを取り去ろうと涙を拭ってくれる。「いりゅ……。ゆっちゃんは解らない。真剣に刺されて死ぬのはやはり、怖い？」

違う。本当に怖いのは自分が感じられなくなること。けど、今の発言だけでも、魔王としては失格なのにこれ以上、魔王の威厳を地に落とすような発言はできない。

唇を噛み締める。叫びたい。いりゅ、ゆっちゃんを逃がして！ ゆっちゃんだけ助かればいい！

なんて、最悪な魔王様。家臣やパパ、ママは四天王を残して、ゆっちゃんだけでも少しでも長く、命を長らえさせようと必死だったのに。

もう、いいや、と投げやりになった時だった。ママと同じ温もりを頬に感じた。

負んぶされている。

イルの顔が近くにあった。先程の優しいイルの顔はそこにはなく、皆から流星魔女と呼ばれている一度に無限に近い魔法や体術を打ち込む最強の魔女の顔がそこにはあった。きっと、イルがこれから話すことはゆっちゃんにとってベストな選択だ。例えば、それがイルという存在が確実に消える前提であっても。

その優しさ。その幼い子どもに向ける直向きさが痛い。痛いんだ、いりゅ。

「いいえ、怖くありません。なんせ、ゆず様は永遠に真剣で刺されて死ぬ痛みを知る必要がないのですわ」

「え？」

嘘つき。ゆっちゃんはやはり！　って思ってる。でも、言えない。

「四天王全員が活路を開きます。ゆず様はペガサス——アップルパイに乗馬して、空に浮かぶ光涼山ひかりりやまへと突き進んで下さい。エミリルがそこで魔法により、ゆず様を異世界に送り届けます。そこは平和な場所だと、トマから聞き及んでいます」

「トマのお嫁さんが暮らしている地球？」

「ええ、その通りでございますわ」

いりゅは？　トマは？　じじいは？　ミクミお姉ちゃんは？　とゆっちゃんは今すぐにでも、いりゅに質問したかった。

できない。もう、そこには魔王を自分の命を懸けてでも守る戦士がいるのだから。

シナリオ？

過去。四天王とゆっちゃん。

王座に座るゆっちゃんの前に四天王達。たった五人ではもはや、国とは言えないのかもしれない。全盛期には我が調整世界は人口七億に、と結構、栄えていた。

勇者との戦争初期に核爆弾とかいう向こう側の世界——優雅世界の禁じられた兵器により、六億人と多数の大陸がチリと消えたらしい。もう、三百年くらい前の話だ。それを考えれば、良く保った方か？

「ゆず様！ ミクミに命令を！ 先程の手初通りに」
その声を発したのはエミリル・サーマ。ゆっちゃんがじじいと言っている普段はエロじじいな好好爺だ。

目立たないように着た修道服の裾をぎゅっと握り締める。

ミクミお姉ちゃん……ゆっちゃんは……。

「……ゆず。良いのです。ターニング ポインターである私が一番、この局面では有効的でしょう。忘れてもらってはいけません。ターニング ポインターは異世界の敵に対しては反則じみた強さを発揮します。さあ」

促すようにゆっちゃんの肩を叩くミクミお姉ちゃん。

出身村の特産である淡い水色の着物、木こりが仕事に使用している斧よりもさらに一回りサイズの大きい斧、黒髪のおさげのミクミお姉ちゃんは眼帯代わりの白布を弄りつつ、それでも、ゆっちゃんから目を離さない。

ターニング ポインターとは、数世代に一人と言われているその世界に最大級の幸福をもたらす存在、偉大なる人物に成長することを約束された存在である。理由は不明だが、彼らには異世界の住民のありとあらゆる攻撃に対する耐性があり、傷つけられた瞬間からその傷が自動的に塞がる。

さらに、ミクミお姉ちゃん自体のスキル、治癒魔法と強化魔法は強力で、四天王になった理由がそこにあると言っても過言ではない。そう、まさに城門に群がる八工をその場に足止めさせるにはうってつけだ。

「魔王として命じる。ゆっちゃんを逃がすために四天王 輝きの少女は強化魔法で創造せし壁で敵を圧死させ、ターニング ポイントとしての耐久力で敵を足止めしろ！」

「その最期の任務、承りました。四天王 輝きの少女、魔王様のお命のため、しいては魔王様の居るところ……そこが国の為に闘いましょう」

「ミクミお姉ちゃん……」

しまった！ と思った時にはもう、口から言葉が溢れていた。

「もう、甘えの抜けない魔王様ですね。私の妹は」そう、わざとらしく、溜息を吐く。ミクミお姉ちゃんは手提げ袋から、黒いリボンと子猫の縫いぐるみ付属の黒いリボンをすつと、ゆっちゃんの前に差し出した。「連れて行ってください、ゆず様の新しい国へ、私を」

ゆっちゃんがそれを受け取るのを見届けると、何も言わずにミクミお姉ちゃんは背を向けた。

「また、会えるよね？ もう、大切な人は亡くしたくない。ターニング ポイントは偉業を成し遂げるためにいる。そうでしょう！」

黒い廊下にミクミお姉ちゃんの姿は消えていった。足音だけがある。ミクミお姉ちゃんが生きていることを証明してくれている。

気を引き締める儀式であるかのように、黒いリボンで髪を結わえる。いわゆるツインテールという髪型に。

ミクミお姉ちゃんの後に続く。両手の力でバネのように身体を前へと弾ませて、王座から数段下の絨毯へと飛び降りる。

廊下へと、歩を進めた。その後に続くミクミお姉ちゃん以外の四天王達。

「前に出て退路を確保しろ、四天王 仮面の魔剣士」

「へいよ、お嬢様。仰せのままに」

ゆっちゃんの命令に、赤鬼の仮面を被った屈強な筋肉を全身、鎧とし、さらにその上に全身甲冑を装備した中年男性——トマ・トマトがオオカミの唸り声の如き、低き声で応えた。

ゆっちゃんはずぐにでも、命令を撤回したかった……。かつて、聞いたことがある。

「なあ、トマ？」

「なんだ、お嬢様」

「どうして、ゆっちゃんの髪の手入れ……そんなに上手いのだ。いりゅ、以上ではないか？」

「はっはっはっ、そうか、いりゅ、以上か。勉強した甲斐があったってmondぜ」

「ん？ いりゅといつも、互角だから、いりゅに勝ったことがそんなに嬉しいのか？」

「ちげえよー、お嬢様。俺には妻がいるって言っただろう。実はな、お嬢様より二歳年上のぷりちいーな娘がいるんだ。いつか、娘の髪を手入れしながら、学校での出来事を聴きてえー、そんな願望があったな」

「うむ」

「それと、イル・シュークリームと俺が互角っていうのは間違いだぜ。普段は俺の方が強い！ イル・シュークリームはお嬢様の前では死んでも負けねえー野郎だぜ」

「その発言、ツッコミどころ満載だ」

そんな優しい仮面の男をゆっちゃんは殺そうとしている……。罪悪感なんてものではない。確実に死が未来にはあるのだから。朝、目覚めて最初に見る格子越しの景色、城と同じくらいの高さに積み上がった死体の山が脳裏に浮かぶ。吐きそうになった……。

背中をイルがさすってくれた。

「大丈夫。お嬢様は死なない。なんせ、俺らが守るんだぜ。少人数の撤退戦ならば、敵が少量のうちならば……こちらにまだ、武があ

る」

そつだ。希望を持たねばならない魔王として恥ずかしくない希望を。

「背後は……」

「なんじゃ、こんな時までわしは幼女に萌えたりはせんぞ」

と、じじいこと、ゆっちゃんの師匠——エミリル・サーマは言っているのだが、どうも、目線がゆっちゃんのお尻にロックオン、されている気がしてならない。危険なろりこんだ。

「背後は……いりゅ。四天王 流星魔女、頼む」

「最期まで私はいりゅ……ですわね」

ワンピース型の魔法装甲を身に纏ったイル・シュークリームが戦場には相応しくない何か（ゆっちゃん？）に萌えている表情をゆっちゃんに魅せる。

「は、発音が何故か！ できないのだ」

いりゅはその言葉には応えずに、魔法装甲を発動させる。すると、イルの身体の周囲にボディーエラーの塊が生じる。イルの腰の巾着袋には鉄の水筒が入っており、予備のボディーエラーも準備万端だ。ボディーエラーはモンスターの死体（モンスターは死ぬと、ボディーエラーに戻る）から採取可能だが、今はそんな暇がない。備えあれば、憂い無し！ とはこの日のためにあるのだらう。

さて、ポジションが決まった！ 前方は、トマ・トマト。後方はイル・シュークリーム。まさに二強。

何か、忘れてる気がする。

エミリル・サーマから魔王学校卒業の証として、ゆっちゃんだけ特別に貰ったトゥリングのうち、奏者のリングを発動させる。

一瞬、木靴の中空に音符型の光が現れたが、すぐに霧散した。

敵兵の呼吸音が聞こえる。だが、その呼吸に乱れはない。過去に虐殺に近い戦闘行為を繰り返した彼らの精神はもう、こんな城攻めは楽勝だ！ といった心理か。

「魔王様……あのお」

「いりゅ、人数は五人。けど、廊下の幅は五人くらいがやっと、並んで通れるくらい」

「するつてえ、とお嬢様。敵は最大で二人ずつ……。だけどよ、光る弓矢には注意が必要だぜ」

「魔王様……あのお」

「何？ さつきから、ゆっちゃんの発言の邪魔をして」

「わしは前方？ 後方？」

「じじいはその辺で」

「わしだけ、ぞんざい？」

「じじい……。じじいが本気でしたら、城が吹き飛ぶ」

「それもそうじゃのお」と、アフロにしようと思つて失敗したような爆発頭をぼりぼりと掻きながら呑気に話す。「魔王様。勇者にあった際は闇打つ波動ではなく、魔王の杖を使いなされ。バベルシステムを使えば瞬時にこの世界が壊れる寸前の力を一時的に使用できるでしょう」

「使いたくはない……なるべく」

ゆっちゃんは血を流すのも、流させるのもキライだ。できれば、

誰にも、血を流して欲しくない。

けど……それは無理な話だ！

角から現れた光る弓を持った集団にいりゅが特攻を駆ける。硬い事から鉄であるう弓矢にも、弱点は存在する。いりゅは、目視で敵が光る弓矢を発射させるのに必要な動作である指で鉄の塊を弾く動作を見極める。

弾き切つた瞬間に軽い発射音と共に光る弓矢は発射される。だが、その軌道上にもはや、いりゅはいない。

いりゅは彼らの頭上にいた。

マインドエラーを周囲から吸収する為に眼を閉じていたいりゅは、同時に薬指に填めている剣のリングを一人の敵兵の頭に定め――

「軽装で魔法装甲無しにゆず様の敵を名乗るじゃないですね、雑魚

……」

剣のリングを機械的に発動させる。赤い色の宝石から剣が生え――

敵兵の頭の天辺に剣が刺さる。後、敵は四人。

かっと思開いた金色の瞳は今にもこぼれ落ちそうな程に見開かれている。その瞳の背景にある己が死に恐怖を成して、草に紛れそうな服を着た四人の兵士達は後退りをする。敵を倒さねば、とはつとしたのだろ。

「いりゅ、はそんな油断を許してくれない」

そう、ゆっちゃんのかいた通り、戦場のイルに情けという感情があるならば、それはゆっちゃんにだけ向けられるものだ。本人がそう言っていたのだから間違いない。

四人の兵士達の中心部に石が投げつけられる。

どうやら、ただの真つ赤な石だと思っっているようで彼らはそれをそのまま、マジックロックを解除せずに放っておいている。尤も、イルほどの実力者の魔力を破れるものなど、エミリルか、ミクミお姉ちゃんくらいなものだ。

光る弓矢が発射するよりも前に真つ赤な石が赤く光、輝き……あつと、一人の敵兵が驚嘆の声を残して、小爆発が敵兵全員を呑みこんでいく。

「バーニング バースト。大技の一つですわ……」と、ゆっちゃんの身体を両手でぎゅつと、包み込んだいりゅが耳元で囁く。ゆっちゃん顔、目掛けて敵の身体の一部――脳漿や、血に塗れ炭化した腕や、骨の覗けた胴体が吹き飛んできた。ゆっちゃんの身体に到達する前にトマがゆっちゃんを庇うように全面へと出る。それと同時に飛んできた敵の遺体を剣で粉微塵にする。「まあ、黄泉の駄賃には少々、過ぎた魔法でしょう。まさか、直撃なんて、アホな兵隊さんですわね、ゆず。くすっ」

明らかに流星魔女 イル・シュークリームは怒気の混じった微笑みを浮かべていた。

ゆっちゃんにはそれがゆっちゃんに向けられた怒りではないと、

解っていないながらも怖かった。

イルの温もりの加護の下、震えていたゆっちゃんに敵兵の血で全身を汚したトマが振り返り様に親指を立てた。

武骨な背中が無言で語る……。大丈夫、もう、敵は黄泉の世界だ、と。

それならば、平気だ。黄泉の世界には七億の我が国民と、パパ、ママ、ゆっちゃんの友達がいるのだから、きつと、ボコボコだ。

「いりゅ、頬に血」両手の塞がっているイル。ここはゆっちゃんが拭かねば、と器用に舌で右頬の血を舐める。だが、すぐに血がぱくつりと、開いた肉から滲み出す。「いりゅ、ゆだんはあ、にやめ、じゅる」。いりゅのあじい、なんか、てつみたいなあじ。ということとあ。にやあ、よだれがゆっちゃんのおごに。したがとどかにやい。じぶんではむずかしい」

「ゆずさま、ああ、ゆずさま、最高に名誉なことではありません。ですけど、周囲の殿方の視線が……。ああ、もう、死んでも良いかもしれないですわ」

「おい、ゆ——」

「止めるのを止めるのじゃ、トマ。ようじょが、年上のお姉ちゃんの頬を舐め舐めする。そんなレア しちゅーを止めるのは世界中のロリすきーが許さん。わしらはここで孫の可愛さのあまり、お菓子を貢ぐ。そんな暖かい眼差しで見守ろうじゃないか」

「あなたの眼差しは性犯罪者のそれ、だろうが……。頭、いてえよ…… 最後までこの狸じい」

ゆっちゃんは大人の会話を横目で聞きつつ、いりゅの吐息は朝御飯にゆっちゃんと一緒に食べた苺のお味だね、という新たな発見をしていた。

いりゅ、とはゆっちゃんが産まれた頃からの知り合いなのにまだ、まだ、知らないことばかりだ。

「あつ、また、流れてきたね、いりゅ」

「もう、大丈夫です。これ以上は闘う前に私が……。黄泉に逝ってし

まいそつですわー！」

シナリオ？

過去。痛みの方にある世界

魔王城の地下には川が流れている。増水すれば、川の傍らにある通路は通れないのだが、今は緩やかな流れになっていた。

しかし、薄暗い雲に覆われた空模様を思い出す度に……不安は尽きない。

ゆっちゃんの体力を気遣って、いりゆが負んぶしてくれていた。自分で歩を進めていたら考えなかったのかもしれない。

何故、闘わなければいけないのだろう？

いりゆ、やトマ、じじいには聞けない。彼らはその話をする、唐突に不機嫌になる。ただ、ゆっちゃんに将来は民を先導して、奴らが出現する遠い、遠い、東の地——死の大地にあると言われているニゲール ゲートから異世界へと侵略することを望んでいる云々と喋るのだ。

その時の彼らの笑顔は壮絶なまでに醜く、この世の汚れを集約したかのようだった。

昔は闘う理由があったらしい。

魔王学校の社会の授業の時間に調べたことがある。何故、調整世界と呼ばれる全てが滅び、全てが産まれる世界にゆっちゃん達の祖先が住まうことになったのか……。

ゆっちゃん達の祖先は勇者達、栄華世界と同じ民だった。

かつて、巨大な国家——永月の箱船と、夜月の箱船のどちらが世界の主導権を握るのか？ という覇権戦争があった。

両者は相容れず、互いに滅ぼし合うしかなくなり、永月の箱船が>勇者<と呼ばれる存在を創り上げたことにより、無差別の破壊が行われ——

夜月の箱船はこれでは世界が滅ぶと考え、調整世界に移住した。その当時の調整世界は不毛の大地だった。

だが、高濃度のマインドエラーを受け続けた人々は魔法を使えるようになった。その魔法は研究により、ありとあらゆる種類の魔法を構築し、不毛の大地をその力によって豊饒な土地へと変貌させていった。

その中でも最初の下地を整えた土地が以前保っていた生きる力を呼び起こす記憶呼応魔法の究極系——ソイル・サイクルは一人の若者にしか使えなかった。その若者を今では大魔王と呼び、その存在は魔法のような宗教談話を生み出し、宗教——大魔王至上教をも生み出した。

そこまでしか、調べていないから解らないけど……闘う理由は、勇者達、栄華世界の民はゆっちゃん達の世界の人間を咎人と呼び、裏切り者としているから？

それは彼らに聞かないと解らない。けど、聞くならば、勇者に聞いてやる。歴史に名高い称号を受け継ぐ長身の憎き女に。

齒を食いしばる。食いしばる。今はこの苦境に堪えねば……

「ゆず、怒りを静めなさい」

「ゆっちゃん、怒ってない」

「肩に食い込んでいるのは魔王様の爪ではないと仰るのですね？」

そう、指摘されるまで、気が付かなかった。指先に血液が集中して紅くなっている。その影響で指先から上の肌色が妙に強調されていた。

「ねえ、いりゆ。私達は何で闘っている？」

「情けないことを言うじゃねえ、魔王様。奴らは俺達の同胞を何億人と殺したんだ。最初の一撃でな。知ってんだろう、その武器の名？ 諜報部隊の兵士、死の大地の英雄^{はま} 羽馬^{ゆい}優衣率いる貴族隊が送った情報だぜ」

知っているに、決まっている、トマ。ゆっちゃんのママ——宮^{くのみ}之南^{なみ}のママ。王族にありながらも、諜報部隊で活躍した優衣の血はゆっちゃんにも流れているのだから。

一撃で事実上、調整世界をぶっ壊し、小規模だったモンスター出現ポイントを一気に拡張させた兵器——原子爆弾^{ヒカドン}。

「その顔じゃあ、忘れてねえみてえだな。核兵器、奴らの武器の名前とその脅威……。俺らの魔法や剣術が霞むくらい、ひでえ殺戮兵器だぜ。逃れたつてのに何故か、その後、ひでえ熱や、歯茎から血が出たりして死ぬ奴も大勢……。いた。だから……」

暗闇に映える敵兵数人の姿を確認したトマは背中に背負った自身の身の丈程の剣を抜く。

両手持ちに構え、敵の光の弓矢が上がる前に走り出す。

ゆっちゃんの真横を通り抜けた時、ぼそつとゆっちゃんに言葉を残す。

「覚えておけ。仲間を殺されたら殺せ。そうしねえと——」

そこで言葉は切れるが、その先は言わずとも解る。殺されるのだから。

敵兵はゆっちゃん達の姿を発見して、口々に喧しくさえずる。

「いたぞ！ 咎人共だ！ 咎人の姫様も一緒だ！ 我らが神調べルプテン様の予言書の通りに行動しろ」

「了解」「了解」「はいよお、キタあ——」

うるさいヒヨコ共をトマが剣で袈裟懸けに切り裂く。吹き出す血流に臆せずに、トマは何人も切り裂く。

「輝きの少女め。何人か、逃しやがったな」

「仕方ないじやろう。あの幼女にしては奮戦している方じゃ」

と、トマの背後から雷石を投げ、その雷石に向かってマインドエラーを送り込んだじじいが応えた。

雷石は敵兵の一人に当たると、数人を巻き込んで激しい電流地獄へと誘った。敵兵の姿に変わりはないが、体内は真っ黒げだろう。案の定、電流に巻き込まれた敵兵達は直立姿勢のまま、川へと転落した。

もう、上がってくることはないだろう。彼らは黄泉へと旅立った

のだから。

やはり、じじいの魔法——ライトニング バスター。下級のエーテル魔法でも威力は抜群だ。これなら、勝てる。そんな思いを無残にも無数の弓矢が風穴を開けた。

肩に鋭い痛みが走る。ああ、自分は光の弓矢に射られたのか・・・。そんな単純な感想しか浮かんでこない。

背後には腹部に銃弾を喰らいながらも剣を振るうトマと、ゆっちゃんといりゅ、の間に立ち、風の魔法——エアースールドを発動させているじじい。そんな二人の健闘を嘲笑うように十人以上の敵兵が光の弓を構える。まるで壁そのものだ。

もう、笑っしかない・・・。

「ゆず！ ゆず！ 顔を歪めて。傷は浅いはずよ、しっかりしなさいですわ！」

傷口が開くと文句を言いたかったが、いりゅの必死の形相に言葉を失う。ゆっちゃんを胸に抱え込むいりゅの体温が痛さを紛らわせてくれる。

けれども、そんなのはまやかしだ。

「痛い・・・。ゆっちゃん、光の弓矢に撃たれたの初めてだ・・・。」

そんなのはきつと、ゆっちゃんくらいなものだろう。みんなは撃たれるどころか、重症を負ったり、その先にもう、到達している。

ゆっちゃんの痛がりようをちらつと、一瞥したトマが、

「しゃあねえ……」

と低い声で唸った。大剣を背に戻し、両腰に巻き付けた鞘から細身の剣を抜刀した。

その刀はトマの妻の国の武器だと聞く。名は日本刀。

日本刀が薄暗い地下水路の灯りを全て、吸収するかの如く、不気味に輝いている。その輝きはボディーエラーが既に塗りつけられている証。

トマは本気だ・・・。本気で痛みの先に行こうとしている。

「トマ！ 止せ！ 貴様まで死ぬ気？ ゆっちゃんにトマの娘を紹介するまで生きろ！」

「ちげえよ。俺は輝きの幼女様みたく諦めの良い方じゃねえ。だからって腹が立つのを我慢できる方でもねえ。んだから、憂さ晴らしをちよつくらすんだだけだ」

「いりゆ」

ゆっちゃんはトマの決意を揺るがす処か、いりゆの胸に蹲り泣く。それだけしかできないただの泣き虫な魔王幼女だ……………。

また、いりゆに頼る。何千回目だろうか……………。

「いいえ、これ以上、人数を割けません、ゆず」

「そ、そうか……………」

「先を急ぎましょう。城を出た先の森にアップルパイと、アップルパイのお友達を待機させております」

そう言う、いりゆの足はもう、既に動いている。その横をじじいが並走していた。

ゆっちゃんは、というと、いりゆにお姫様抱っこされたまま、お荷物状態だ。

「うっおおおおおおおおおおおおおおおおおおあああああ！」

と、叫ぶトマの声がゆっちゃんの荒んだ心にまた、傷をつけていく。何もできないお荷物だ。

しばらくすると、トマの雄叫びであろう音は止み、同時に……………
・敵兵が光の弓矢を放つ際に生じる憎き音も消えた。

ゆっちゃん達は足場の悪い獣道を、後ろを振り向かずに激走していた。んん、違う。激走していたのはゆっちゃんだけだ。いりゆ、とじじいは無言で機械的に足を動かしている。無駄な呼吸さえ、吐かない。

「もう……………だめだ、いりゆ。少し、休もう」

膝を抱えてその場に座り込んでしまった。そんな場合ではない。解っていた。だけど、ゆっちゃんは……………。

「もう、いりゆ、疲れた」

息も上がっていた。

地下水路を一時間以上、歩いた。汚水を流す下水路の方ではなかったから、まだ良かったとも言えるけど、それでも、疲れた。

ぽつんと、冷たいのが一滴、落ちた。空を見上げると、雨が一滴、目に入ってきた。

視界にいりゆ、の手が映った。

「さあ、立つんですね。甘えは……許されません。あなたは生きるんですね。魔王だからじゃない。私の大好きなゆずとして甘えは許さない。そういういりゆはやはり、ゆっちゃんがいつも、食べているお砂糖入りのお菓子よりも甘い人だった。厳しい助言を与える人は、雨にも負けない眩しい笑顔をしているはずはない。

だって、また、甘えてしまうでしょう。

いりゆに導かれて、歩くこと、数分……やっと、ペガサスの群れを眼下に捉えた。

行こう、空へ。

行こう、異世界へ。

行こう、平和な日常へ。

だから……

雨ニモマケズ 風ニモマケズ

雷ニモ秋ノサムサニモマケヌ

丈夫なカラダヲモチ…………

シナリオ？ 過去。空中戦。降り注ぐ魔法の力。

ペガサス——アップルパイに跨る。ふと、目を地上に向ければ、鬱蒼と茂った何処までも続くと思っていた森があんなにも小さく見える。まるで、ゆっちゃんの保っていたお人形さんみたいだ。

ゆっちゃんはお人形さんを五体、保っていた。五体もあれば、いりゆと一緒にお人形さんごっこするには十分だった。

イルガ山脈を越えようと、うねをペガサスは力強い羽ばたきで越えた。ペガサスのたてがみがゆっちゃんの頬をくすぐり、こそばゆい。普段ならば、ゆっちゃんはすぐにでも、きゃきゃ、叫ぶだろう。だけど、死臭を運んできた風が鼻孔を襲う度にどうしようもなく、ゆっちゃんは魔王城に置いてきたお人形と、イルガ山脈に点々と存在する五体不満足の腐敗した遺体とを比べてしまうのだ。

高地に住んでいたイルガの民は優秀な戦士を生み出してきた。当然、その戦士達の就職先は魔王城を守備する魔王城騎士団に所属するのがほとんどだった。勇者側はその情報を得ると直ぐさま、戦闘機と呼ばれる鉄の塊による爆撃をイルガの民が住む隠れ里に行った。イルガの民は戦士として正々堂々と剣や弓で戦闘機に対抗しようとした。だけど、相手が矢の届かぬ遙か上空にいては話にならない。まるでお人形のように虐殺されたと、偵察に行ったターニングポイント（己にかかる異世界の攻撃力を無効にする存在）であるミクミから報告を受けていた。

実際に見ると、酷い有様だ。

死体は腐敗が進んでいる為でもあるが、そもそも、爆炎によるケロイドや雨風に数日以上も晒されて服が破損してしまっているの……性別の特定は不可能だ。供養してやりたかったが、ゆっちゃん達は先を急がなくてはならない。

これからも……永遠に……彼らはお人形のようにそこにいなければならない。

ゆっちゃんはせめて、彼らの骸をこの瞳で辱めぬようにしようと目線をゆっちゃんの跨るアップルパイの手綱を握っているいりゆに合わせた。

いりゆは凄……。トマの赤鬼仮面を被っているみたいに顔色一つ、変えない。

ゆっちゃんと二人きりのいりゆは今の冷涼な顔つきのいりゆではない。砂糖の入ったパンみたいに甘い笑顔を絶やさないのが、ゆっちゃんの知る普通のいりゆ。

けど、みんなは冷徹一貫という印象をいりゆに抱いている。これが本当のいりゆ？

「……情けないですわ、ゆず」

「いりゆは目を背けるな……って言いたいの？ でも、でも、イルガの民だってこんな不様な姿をゆっちゃんに見られたくは……ないはず」

「魔王様が普通の少女であれば、仰る通りだったでしょう。ですけど……残念ながらゆず様は魔王様なのです。魔王様という存在は太陽なのです。太陽を嫌う民が何処にいますか？

太陽は作物をその神々しい光によって育てます。それと同じ如く、魔王様は民を偉大なる力によって導きます……未来へと」

「ならば、尚さら……だ、いりゆ。ゆっちゃんは彼らの足下を照らす役割すら叶わなかった……」

「いいえ、まだ、ですわ。未来はゆっちゃんに受け継がれています。勿論、私にも……エミル様は——」

「よいのじゃ、わしは未来を尊ぶ月のような存在じゃ」

じじいといりゆは示し合わせたのようになやり、と笑う。

ゆっちゃんだけがその未来とやらの正体が解らない。思わず、頭を抱えた。

「あっ」

アップルパイの胸を掴んでいた手を離してしまった！

ゆっちゃんの異常に気が付いたのか、アップルパイが嘶く！

ゆっちゃんの身体が空中へと投げ出される前に、ぐっと、いりゆの腹部に引き寄せられた。豊満な胸がゆっちゃんの頭の天辺に触れた。

「ほっ、助かった、いりゆ」

「軽率過ぎますよ、ゆず！」

「うわ、ごめん、いりゆ」

「もう……」

「未来がもう少しで崩れるとこ、じゃったなあ」と、じじいが余計な横やり。

「ねえ、その未来って？」

「魔王様が再び、民の王となることを死んでいった民は願っているのですわ。ですから、私を含めてみんな、死を恐れませんか」

死を恐れませんか。そんな言葉を聞いては、ゆっちゃんとしては首を横に振るしかできない。

みんな、みんな、ゆっちゃんを置いていく。

みんな、みんな、ゆっちゃんに言った。

「ゆずりん、世界を頼むぜ！ 記憶呼応魔法に俺の技を刻んでくれ！ 強化抜刀を」

「ゆず姫様、私の可愛い兵士達と私に任せて下さい。戦闘機の五十機くらい、軽く足止めします。明日を生きるべきです、ゆず姫様は」
「全く、料理が好きだから、私は炎の魔法を覚えただつてのに。ああ、もう、私は料理される側じゃないの！ ゆず、行きなさい。後から、あんたの好きなグラタン持って行ってあげるから」

「ゆず様——」

「姫様——」

みんな、みんな、死を前にして、無謀な兵士に変貌していく。それが悲しかった。寂しかった。

「本当は死を恐れませんが、なんて言えないのでしょうか、私達は。で

すけど、ゆず様は太陽の中でも尤も、輝かしい太陽なのです。近付きすぎると……自分達が燃え尽きてしまうと知っていても……ゆず様の偉大な物語の一ページになりたいのですわ」

「いりゆ……まさか！」

いりゆとじじいはゆっちゃんよりもずっと、前からその可能性に気付いていたのだろう。二人の間に言葉はなかった。

微かに……殺戮者の冷笑が空を乱す。

いりゆがゆっちゃんの指を掴んで、手綱を握らせる。抵抗しなかった。この期に及んでそんなことに意味はない。

殺戮者はそんな行為を意に返さない。あいつは自身の身体のように空虚な灰色だ

その殺戮者がまだ、見えぬうちにいりゆはそいつを倒すためのおきとておきを解放する。それは四天王や前魔王だけが到達した極めの法則。

名称は――

「マインドエラー構築限界領域圧縮限定 ストームタワー」

と、言う。

いりゆの背後に竜巻が従う。但し、その竜巻は誰も傷つけない。

魔法を操る者にとって、マインドエラーは無害だ。純粋なマインドエラーを体内にある臓器――魔法樹に構築するには限界がある。それは潜在する全ての魔力の数パーセント程度だ。

例えば、ゆっちゃんの魔力は九千九百九十九（普通の民は千程度）だ。身体が壊れないように人間の脳はあらゆる箇所に制限を掛けている。魔力も然り。ゆっちゃんの場合、魔法樹にマインドエラーを構築できる限界は魔力と呼ばれる限界値のおよそ、十パーセント程度だ。これは情けないことに普通の民と変わらない。

四天王 いりゆは、魔力八千で、マインドエラー構築限界領域は魔力の八十パーセント。さらに、いりゆの周囲に流れるマインドエラーを空気の要素のみにした為、空気の魔法しか使用できないが、その変わり、マインドエラー構築限界領域は魔力の九十パーセント

に跳ね上がり、究極魔法が使用できる環境と化す。

いりゆは慣れた手つきでナイフを自分の両肩に食い込ませる。布は紙のように簡単に裂き、血が僅かに周囲の布に滲んだ。

その間にも、殺戮者はゆっちゃん達の匂いを嗅ぎつけてやってくる。どういつ訳か、人間の位置が数キロ先からも察知可能らしい。

肩の肌色が朱色になるのを待っていたいりゆは凍えるような、暗い、暗い声で人の限界を越える為の最後の手順を踏む。

「空気の究極魔法 エアー ブースター」

いりゆの肩に付着した血がいりゆの肩を嫌うように空中に逃げていく。すると、それらの血は朱色の羽根を形作る。四枚の羽根はまるで蝶のようだ。

透明な朱の先に空色が見える。

「これが……究極……魔法？」

空気の究極魔法——エアー ブースターを見たのは初めてだ。そもそも、究極魔法と呼ばれる魔法はホイホイ、撃てるものではない。魔法の基本系は五大元素の火、水、土、空気、エーテル。それらは攻撃用途に利用できるものでも割合、誰もが到達可能なのだが。

初級魔法、中級魔法、上級魔法と難度が上がり、究極魔法は火なら火を、水なら水をと、その属性全ての魔法を極めて尚、才能ある者だけに開かれる。狭き門なのだ。

千人のうち、使い手がいるか、いないか？ と表現すれば、その貴重さが解る。

魔法で具現化された紅い羽根を見つめて、ゆっちゃんは呆けた表情のまま、固まっていた。

「ゆず様、この究極魔法は異世界にて、モンスターと対峙する時に大いに役立つはずです」

「けど、ゆっちゃんの記憶呼応魔法の練度じゃあ、幾ら、いりゆと親しいからって無理だ」

才能のないゆっちゃんが使える魔法は記憶呼応魔法と、翻訳魔法、自分しか回復できない未熟な治癒魔法のわずか、三種類しかない。

しかも、記憶呼応魔法の使い手は珍しく、過去数人しか、使用に値するレベルにまで到達した事がない為、別名——役立たず魔法とさえ揶揄されている始末だ。

「一時的に魔王の杖を発動して下さい」

「そうか、いりゅ、頭良い！ 杖は魔法の練度をサポートしてくれる役割があるから、初心者用の闇打つ鼓動よりも、伝説の杖 魔王の杖の方がより、サポートしてくれる」

「だけど……力ある杖は意志を保持している。魔王の杖は聞かずとも、意志を保持しているに違いない。未熟な者はそれに魅入られ、精神を乗っ取られる。」

ロケットを握り締める。指先がロケットから離れない。これじゃあ、ロケットに眠るパパやママが笑ってる。ゆずはいつまで経っても泣き虫ゆずねって……。

「自分を信じて、伝えるのですわ！ 魔王の杖に！」

すつーと息を吸い吐く。準備万端。

両手を天空に翳す。

「闇にたゆたう覇道の威。」

世界の断りを知る外なる存在。

ゆっちゃんは欲する。

いつか、魔王を頂点とする民に平和を！ 応えよ、魔王の杖」

翳した両手の真上に巨大な闇の大口が浮かぶ。その口内に利き手を突っ込んでいく。現れたのは杖というよりは……漆黒のスポーツブラだった。

開いた口が塞がらない。ゆっちゃんと同様にいりゅも、じじいも開いた口が塞がらない。前魔王の時はカツコイイ剣だった。その前はカツコイイ杖だったと聞く。ちなみに魔王の杖は魔王が死ぬと、次の魔王の魔法樹に自動的に宿る。一子相伝の杖だ。

それがスポーツブラ！ ゆっちゃんは屈辱に耐えつつも、堪えきれぬ力がスポーツブラをしわくच्याにさせる。

「僕を装着するんだ。ゆず」

魔王の杖の青年のような声が頭に直接、伝わる。その声は甘いチヨコレートのようだった。

蕩けるチヨコレートを前にどうしても食べられないドキドキ感に似ている心の揺れ幅。この気持ちの動きは何だろう。

そんな対象を付けることはゆっちゃんには堪えられない。恥ずかしい？ それと相反するように怒りが込み上げてきた。

「ゆっちゃん、窮屈そうだから嫌」

それに……プライドが許せない。

懂れていたんだ、伝説の杖に。それがスポーツ ブラ！

あれ？ 違うとも思ったが、その心の揺れが真であると、ゆっちゃんには誤魔化してしまった。

「……ゆず、もしかして、魔王の杖に意志があるんですか？」

赤色の羽根を器用に動かして飛翔していたいりゆが、ゆっちゃんの顔を覗き込む。

「え？」

「歴代の魔王で魔王の杖の意志を感じ取れたのは……文献が定かならば、ゆずが初めてじゃ。のお、魔王の杖。それとも、君の真の名で呼ぶべきか？」

と、アフロをむしりながら、じじいが魔王の杖に問う。そうしたところでじじいに魔王の杖の意志が届く訳ではない。

「残念ながら、エミルさんには僕の名前を呼んでほしくない」
きっぱり、魔王の杖は応えた。

「じじいに呼ばれたくないってさ」

「それはそうじゃろうな……。馬が合わんよおじやのお」

そのやや、呑気な空気をいりゆが鋭い口調でがらりと模様替えさせる。

「お喋りしすぎたみたいですね。敵は予想以上に早い！」

そう言っている間に、機影は目視でもやや、ぼやけているが辛うじて黙認できる位置にまで到達していた。奴が来た殺戮者——戦闘機の軍勢が。

「ゆっちゃんの……初究極魔法が……」

「ゆず、落ち込むことはない。君の魔力ならば、一瞬でしょ？」

「……スポーツブラの癖にゆっちゃんをイジめるのか」

スポーツブラが言っているような事実は何処にもない。ゆっちゃんの魔法の才能は皆無と言って良いだろう。普通は魔力の大きさに応じて、才能も比例するようだが……。そういう知識がある分、ここぞとばかりにわざとらしい溜息を吐いた。

「あ、そうか、そうだったね、ごめん。未だ、至ってない……そうだった」

ゆっちゃんの態度にスポーツブラが焦る。

しかし、聞き逃さない。未だ？ ゆっちゃんの追求の目はスポーツブラに向かう。

「……」

「あ、こっちの話です。だったら、僕が手伝うから。それなら、一瞬です」

ゆっちゃんが承諾するのを待たずに、漆黒のスポーツブラが手中から消える。胸に違和感を覚えた。

スポーツブラが胸を優しくガードしている。

驚く間も与えずに、スポーツブラから霧状の闇が霧散し、ゆっちゃんをその闇で建設した繭に閉じこめる。

着ていた服が全て消え去る。

宙に浮かんだスポーツブラが複数の黒線と化し、服を形取っていく……。

清潔感漂う水色を基調とする布地のビスチェ。ビスチェが構築されたのを見計らうように右肩から左腰、左肩から右腰へと重厚な鎖がゆっちゃんの身体を縛る。ベビードールドレスがその鎖を隠すが、両肩が隠れていない。

そのベビードールドレスの背後には蔓に絡まれた少女が描かれていた。その少女はゆっちゃんと同じ年齢くらいで、その少女を縛る蔓の持ち主たる巨木は川の底に根を張っていた。この絵がただの絵

でないことは解る。先程の鎖と同等の威力を持っている。ベビードールドレスの中央に癒し石をその身に包んだ真つ赤なりボンが構築される。まるで狙ってくれ、と言わんばかりに。

靴は構築されない。目に見えない保護膜が身体全体を覆う。その膜を覆った瞬間、自分以外の人肌を感じた。不快にはならない。それどころか、自分の半身と出逢ったような幸福感が込み上げてくる。耳元に魔王の杖の囁きが聞こえる。

「ゆず、これが君のバトルコスチューム　ラグナロクフィールドです。感じるでしょう。このコスチュームに隠された究極魔法にも劣らない力を」

確かに感じる。魔王の杖が抑えていてくれなければ、猛る力に気絶していただろう。この温もりさえなければ、怯えていたかもしれない。

「うん、今のゆっちゃんじゃあ、扱いきれない」

「良いんだよ、ゆず。いつか、君はラグナロクフィールドと――」
ゆずの目の前に一振りの奇妙な剣が現れる。その剣は光る弓矢を並列に固定され、光る矢を発射する口は封じられ、代わりに刃が伸びている。やがて、二つの発射口から伸びた刃は螺旋を描き、途中から二つの刃は完全に一つの刃へと融合を果たしていた。

ゆっちゃんはその兵器の持ち手を握る。

それに共鳴し、並列した光る弓矢の側面から漆黒の翼が生えた。

持ち手は稼働するようになっており、剣を構えた時に不便ではない位置へと稼働させる。

「天永無想を自分の手足のように使える日が来る」

「言い切るんだね……」

「うん、君には到達できない理由が見つからない。じゃあ、永劫回帰空間を消滅させるよ。覚えておいて、この永劫回帰空間は兵器としても転用できる。外なる存在から禁じられているけどね」

魔王の杖が永劫回帰空間というワードを言った時、ゆっちゃんの脳内に永劫回帰空間に関する知識が流れ込んできた。

永劫回帰空間……外なる存在が住まう空間でさえも異端とされる
幾つもの世界を呑みこんできた世界。別名、世界喰い。外なる存
在らにより、現在封印されていたはずの力。封印を解かれた理由は

……

「おっと！ ここからは企業秘密です」

その自棄に明るい言葉と同時に闇色の繭は消え去った。

ほっとしたのも束の間、みんな、数分前と同じ位置のままである
ことに気付く。

そう、永劫回帰空間の時間は瞬時に流れ、瞬時に還るメビウス構
造。始まりと終わりは同位。

「ゆず、そ、それは……なんですか？」

「いりゆ、少しだけ触れる」

いりゆの質問には応えずに、意志を集中される。

心の片隅にある魔法樹という世界、その世界の果てにぽつんと建
っている古びた外装の図書館。中は断熱性に優れた木造。そこへと、
足を踏み入れる。

沢山の部屋が左右対称に並んでいる。

「ゆず様、失礼いたしますわ」

ゆっちゃんを心の中に住まういりゆがお姫様抱っこをしてくれた。
そのまま、移動する。

「ゆず様。今回、ご使用になられるお部屋は？」

「うん、いりゆの記憶を保管した部屋」

それだけで言葉は十分だ。いりゆの記憶を保管した部屋から地下
へと続く階段を降りていく。

「いつものゆず様とは異なるからでしょうか、地下七階までが限度
だったのが、地下九十階まで潜れます。記憶抽出可能領域七十パー
セントから九十パーセントまでの記憶呼応魔法を習得しますか？」

「そのために来た。記憶呼応の居城に。けど……今回は時間がない」
「と言いますと？」

「空気の究極魔法 エアー ブースターのみを習得する」

「畏まりましたわ」

最深部の部屋へとつく。そのまま、突き進んでいく。

そこには記憶を映す鏡があった。その鏡に立つ。

すると、鏡は虚像を浮かび上がらせた。究極魔法 エアー ブースターを習得した時の記憶。

今よりも小さいゆっちゃんが飛ばされた麦わら帽子を取ろうと、木の枝に跨り、手を伸ばしている。だが、幼い手は空ばかりを掴む。危なっかしい。ついにゆっちゃんは足を踏み外す。辛うじて、右手で枝を掴んだ。

それをゆっちゃんのお洋服を洗濯する為に通りがかったいりゆに発見され、当時、未完成だった空気の究極魔法 エアー ブースターを発動させた。それは火事場のバカ力だったとその日の夜、いりゆはベッドの中で震えながら回想した。そして、己の才能に初めて感謝した。

シュークリーム家の家訓は友人など要らぬ、要るのは自分の力のみだ！ ああ、ゆっちゃんはそれを初めて知る。記憶抽出領域が広がったからだ。

そして、次の瞬間、ゆっちゃんは現実のいりゆをギュって……抱きしめたくなった。

鏡に映るベッド内の裸身のいりゆは寝間を共にしている裸身のゆっちゃんの髪を撫でる。それをむずがって、ゆっちゃんはその手を跳ねる。それが可笑しくていりゆは息を吐くように笑った。

「大魔王様、お力をありがとうございます。あなたにイル・シュークリームは初めてお礼を申し上げます……。もし、これからも、私の小さな片思いの相手でもあり、親友でもあり、娘でもあり、全てもあるこの子を守って下さるのならば、私の全てをあなたに捧げましょう」

まるで大魔王教の信者のような口ぶりだ。

ゆっちゃんはその記憶を理解した。それを記憶呼応の居城の秘書役 いりゆに告げる。

「この記憶理解した。胸に閉まっておこう。いりゆの想いを……」
そつと、未だ蕾の胸に両手を添える。

「あら？ 本物のいりゆはゆず様の御寵愛を受けたがっているはず
ですわ」

「そうかもしれない。けど……それはゆっちゃん達が平和を手にし
てからだ」

「お待ちしております、ゆず様と私の子を」

「コウノトリが運んでくるからそれは解らないよ、いりゆ」

その応えを残して、ゆっちゃんは現実へと戻る。戻るのは簡単だ。
目を瞑って、戻りたいと念じればいいだけ。

目を開けた時には、もう、現実に戻っている。

現実のいりゆには取得の際に観たいりゆの記憶について、は話さ
ない。他者に記憶を観られていい顔のできる人間なんていない。い
りゆ、ならば……むしろ、喜びそうだけど、ゆっちゃんはマナーと
してこれを守っている。

いりゆは、ゆっちゃんに肯くと、

「では、ゆず様」いりゆの視線は灰色の戦闘機に向けられる。もう
既にペガサスの群れの一部は銃弾を浴びて、飛行不可能になり、墜
落していくペガサスもいた。「あのうるさい八工を落としてきます
わ」

「いりゆ、今のゆっちゃんなら、天永無想で薙ぎ払える。凄いよ！
いりゆ」

「……」

「先の、記憶呼応魔法習得だって、時間経過十分くらい必要なこと
をわすか、十秒程度だ！」

「……」

「疑ってる、いりゆ？ このお洋服も色んな効果があるんだ！」

「……………それでゆずは何人、殺すんですか？」

「え？」

「思い出せないというならば、そこで少し観てらっしゃい。闘いの

虚しさや容赦のなさや」

「どういふこと？」

「ゆず」

一機の戦闘機をいりゆが指さす。

「……………あの鉄の乗り物には人が乗っています。私達と何も変わらない笑うこともでき、泣くこともできる人間です」

そう言うのと、いりゆは剣のリングから大剣を取り出す。その大剣はいりゆの背丈ほど、ある。それを軽々構えると、指さした戦闘機へと一直線に飛んでいく。

究極魔法 エアー ブースターは風を自動的に操り、いりゆが飛ぶのに最速のタイムを出せるよう、コントロールしている。当然、今のいりゆのスピードならば、奇妙な形の大砲の砲撃から逃れられる。

いりゆはそのまま、戦闘機を一刀両断した。いりゆが指さすまで、生きていた人間も乗せたままに……………。

いりゆは見せびらかすように、ゆっちゃんへと奇妙な物体を見せる。

目を細める……………。それは敵の生首だった。

「こいつはもう、喋りませんわ」

「いりゆ……………」

「知ってますか？ ゆず様。闘いは残忍なんです。ゆず様は今までお手を一度も汚したことはありませんわ。そんな幼女様が人を殺せる？ こんな風に？」

「連続魔法 召喚魔法 竜」

雲と雲の合間から頑丈な鱗を帯びた調整世界最強の生物が二体、姿を現す。召喚魔法で呼ばれた彼ら、竜はいりゆの忠実なる僕だ。言葉を交わさずとも、二匹の竜はいりゆの敵である戦闘機に鋭い爪による攻撃を開始する。

それを一瞥したいりゆは目にした者がぞっとする微笑みを浮かべる。

自分の掌をナイフで傷つける。自傷行為ではなく、究極魔法の発動条件。

竜により、戦闘機と外界とを遮断していた壁が取り払われる。それに合わせて、残酷な一言をいりゅがゆっちゃんに向かって叫ぶ。

「時として、敵の命を手中に弄ぶことさえ、必要なのですわ！」

「やめてくれ！ いりゅ。そんな殺し方をしたら、ゆっちゃん達は勇者と同じになる」

「違うのですか？ 本当に」

その言葉はまるで心の片隅に今も燃えたぎっている復讐心を見透かされているようだった。多分……いや、絶対、勇者がもし、この場に現れたら、ゆっちゃんは仇を理由にして復讐心を大いに滾らせるだろう。

「同時魔法 クアッド コア、空気の究極魔法 アブソリユート
コントロール エアー」

いりゅの掌から光る弾が透明な外壁を外された戦闘機へと飛んでいく。四弾はその数だけ、戦闘機のパイロットに衝突し、砕ける。

こちらからでも、見えるほど、狼狽していたパイロット達は意外となんともないと解るとほっとした表情を一樣に浮かべる。

だが……変化は生じる。

喉を引つ掻くかの勢いで彼らは喉元に手を添える。誰もがこの状態から逃れようとするが、ここは上空だ……。酸素のない状態からは逃れられない。いや、地上であっても逃れられない。いりゅは彼らの周辺の酸素をコントロールしたのだから。

それだけでも彼らの絶命は約束されていた。その苦しんでいる彼らをこの場の強者である二匹の竜が食い荒らす。彼の好物は人間なのだ。特にゆっちゃんのような幼女の柔らかい肉など、さぞ美味そうに食べるだろう。背筋がぞくぞくする……。

一方的な暴力だった。酸素を失った敵を竜達は頭の上から、ぼりぼりと豪快に食べる。それを見かねて周囲の戦闘機が二匹の竜を攻撃するが……竜にはビクともしない。竜を倒せるのは事実上、究極

魔法クラスの方が必要なのだ……。

竜は食べ終わると、操縦者を失って地上へと落ちていく戦闘機の真上に人間の骨やその人間の服飾品を吐き捨てた。

「うむ……。さすがは流星魔女。短時間で戦闘機を五十機も沈めるとは……。末恐ろしいのお」

末恐ろしい？ そんな言葉を言っているじじいの表情は孫の成長を素直に喜ぶ好好爺のようだ。とても、戦場には似つかわしくない。ゆっちゃんは確かに復讐心を保っている。けど、けど――

「こんな殺し合いをしたい訳じゃない」

「ゆず様、一つ。予言をしましょう。ゆず様の想い人が勇者に傷つけられたら、それこそ、ゆず様は自分の力以上の痛みを勇者に与えるじやろう。これはもう、戦争ではなくてのお、虐殺じゃ」

「なにをじじい」

「やはり、すんなりとは行かせてくれんようじゃのお、来おった」
何が来たのか……。それは戦闘機の残骸を上手く、回避してやってくる。

背負った聖剣から、光る翼を生やした女性の姿は天使のようだ。オレンジ色のニット帽を被り、不適にそいつは笑っていた。そいつの髪は不思議なくらい、明るく輝いている。

だが、その光はゆっちゃん達にとって、死を意味する。そう、絶対的な死。

無謀と勇敢とを履き違えた。あるいは狩人と獲物の立場を履き違えた二匹の竜が大口を開けて、そいつへと立ち向かう。

そいつはその場に留まり、腰に帯刀した剣を抜く。その剣には刃がなかった。いや、刃は今から出現する！

細かな粒子が本来、刃のあるべき部位へと集まり、一瞬にして長大な刃を構築する。その刃を構築するにあたり、邪魔だった竜の口から串刺しにした。竜は悲鳴を上げることすら、ままならない。

その竜を右方向へと退かそうと剣を振るうそいつ。右方向にはもう一匹の竜がいる。二匹が接触するのを計算に入れていたに違いな

いそいつの剣は口内の肉を切り裂き、もう一匹の竜の頬へと移動し……そのまま、横へと通過していく。

そう、斬るという意気込みは何処にも感じられず、ただ、剣の刃を通過させただけだ。それで二匹の竜を倒すには十分だった。

二匹の竜は血を滴らせてゆっくりと地上へ……落下した。悲鳴は聞こえない。何せ、竜の脳と、身体とは寸断されているのだから。たった、あの一撃で。

刃を消失させたレーザーブレードを鞘に収める。レースグラブに付着した血を払おうとするが、いっそう、汚れてしまった。そいつは面倒だな〜とでも言うように溜息を吐く。

ロングコートが風により、翻る度にそいつの形の良いへそが姿を現す。

背中に背負った聖剣を抜き、ゆっちゃんの心臓へと狙いを定める。

「宮之ゆず、年齢は七歳。身長は百十センチ……。あたしとは七十センチも身長差があるんだね、魔王ちゃん」

刃がない。いや、刃はあるが見えない。あの刃に殺せないモノはない。あれはターニングポインターでさえも殺せる唯一の兵器。

以前ならば、逃げていただろう。逃げられないと解っていても。

だが、今は勝機がわずかにある。一パーセント、ある。

ゆっちゃんは天永無想で勇者の心臓に狙い定める。胸くそ、悪い大きな胸だ。

「勇者、身長で勝敗は決まらぬぞ！」

「あら、お漏らししてあの世にいらっしやるパパんや、ママんに助けを乞わないの。お父さん、お父さん、勇者が来る♪ って」プロポーションの良い勇者は年相応の瑞瑞しいウイंकをゆっちゃんに向ける。「ねっ」

「で、どっちが勝ったんだい？」

「林檎は不思議だな、こんな話を信じるなんて」

くそガキの言う通りなのかもしれないが、このばばあには解る。長

く生きていると……人間てえものの本質が解るものさ。だから、縁側にちょこんと腰掛けて、ばああ出した不味い団子を食べているちびが嘘を吐いていないって判断が出来る。

ちびが団子を食べる手を止めた。あや、やはり、不味かったのかい？ そりゃあ、本職じゃあねえから。

しょうがないねえ、ちびの好きそうなオレンジジュースでも搾えてくるか……。

重い腰を上げようとした。が……ちびの身体が小刻みに震えているの気づく。

こりゃあ……。

「……これから、話す。あいつの恐ろしさを……。ゆっちゃんはどう、あいつと闘えないかもしれないかも」

「おしっこ？」

ああ、まあ、そうなんだろうけど。

案の定、ちびは遠慮がちに肯いたが、それだけじゃあねえ。

ちびの焦点の定まらぬ瞳は……あたしの現役時代に似ている。そうさねえ……敵対しているマフィアの構成員 七十人と命がけの抗争をやった時にね……。あたし以外、全員、死んだ。今は物言わぬ思い出だ。

「すまぬ。どうしても忘れられない。あの輝く髪が」

今朝、掃除したばかりの縁側はちびの周りだけ、びしょ濡れになっている。

仕方ねえ、大目に見てやる、それだけ……怖い思いをしたんだ。

ついでにこのクソばあに話して、ただの思い出にしちやいな。

思い出が喧しく、口開くのは非常識ってもんだよ。

シナリオ？ 勇者（音）と魔王（ゆず）——宿命の闘い

荒い、荒い風が吹く。その風に全く、怯まぬ勇者の瞳はじつと、ゆっちゃんを捉え続ける。いりゅやじじいなんぞ、蚊帳の外だ。

それは隙と解釈してもいいのかもしれない。だが……。

無言のまま、究極魔法——エアースターの加速を最大限に利用し、勇者の背後をとったいりゅは、淀みのない川の流れの如き、剣での一撃を背に喰らわせようとした。

だが……その項を狙った剣は聖剣 アキシオンの鞘により受け止められる。勇者の左手が少し、聖剣の鞘を上げていたのだ。

そして、勇者はさも、見えているように振り向かず、右手の聖剣——アキシオンをいりゅの腹部に突き刺した。

「な……何…… 空気の流れを利用して気配すら消し、目で追えない速度で……」

「移動した？ ふーん、甘いね…… 流星魔女。聖剣を持った普通の人間よりは少し動ける人間？ とでもあたしを評価していた。それがあんたらの油断。そして——」

振り向く。そんな何気ない動作すら、警戒に値する。それは勇者という存在の力量を推し量ることができれば、可能か？ いや、不可能だ。

振り返った動作と共に、いりゅの肩にアキシオンの不可視の刃が入る。苦痛に歪めるいりゅに情けは掛けない。

ゆっちゃんは何も考えずに飛び出す。

「——そう言う人間が心底……むかつくのよ」

いりゅの意志により、魔法装甲のボディエラーの塊の全てがアキシオンの刃を跳ね返そうとする。両力は拮抗している。

「いりゅ！」と、叫んでゆっちゃんはラグナロクフィールドの両肩を包んでいる鎖——オービット チェーンを解放する。鎖は独りでに勇者のアキシオンの不可侵の刃にまとわりつく。「お前……許さ

ない」

「許さない？ どうするの……幼女様」

尚も、いりゆの肩肉を削ぎ落とそうと試みる勇者。

「こうするんだ……」

自分でもこんな低い声が出せるんだ、というような地の底を這う声。

意識を集中し、トゥリングの力を借りる。トゥリングは両足の指に填められた十つのみ。

「ブースト？！ 力のリング」

足の指が剣の形に一瞬、輝く。

アキシオンはゆっちゃんの鎖を引っ張る力に怯む。いりゆの肩からアキシオンが遠ざかっていく。

いりゆはその隙に距離を取る。肩を押さえる手の隙間から流血しているが……まだ、骨にまで達していない。ミクミの治癒魔法があれば、数秒で完治する。

ゆっちゃんの頭の中に、ミクミが負けている場合なんて想像はない。ミクミはターニング ポインター。こと、異世界の人間が相手ならば、ミクミを傷つけたとしても瞬時にミクミの状態は傷をつけられる前に戻るだろう。

「ブースト？……。うぐっ……」意識が遠のきそうになる。ゆっちゃんの幼い身体ではトゥリング一つ、発動するにも負担が掛かる。頭を片手で押さえつつ、二つ目のトゥリングを発動する。「風のリング！」

竜巻の印が足下に一瞬、輝いたのを確認し、鎖を手繰り寄せる。足の踏ん張りが利かなくなった勇者がこちらへと、誘われる。勇者の胴体に天永無想の刃を定める。

ゆっちゃんは……剣の達人じゃない。当たれば、良い……。柄を握る手が震えた。

ゆっちゃんはこれから、人を傷つけるんだ……嫌だ、怖い、怖い。痛いだろうな。

手の震えが止まらない……、止まってくれない！

「敵に情けをかけるのはバカって言うんだよ」

「じゃあ！」

アキシオンの鎧から推測して、刃を避ける。

勇者のどぎつい目と合う。

その一瞬で殺さなければ、殺される。そう、身体が理解する。

勇者の腹部に天永無想を突き刺し、命を奪う。命を奪う？ いや、奪わなければ、自分も、いりゅも死ぬ。

その一瞬、思考が天永無想を振るうタイミングを遅らせる。刃と刃が甲高い音を奏で、互いに押し合う。

押し合いには当然、力の弱いゆっちゃんが負けてしまう。天永無想を構える型が崩され、致命的な隙が心臓部に生じる。それを敵が見逃す訳がない。

アキシオンの不可視の刃が動く。

「ゆずは……やらせないよ、勇者」

耳元で魔王の杖の囁きが聞こえる。魔王の杖がゆっちゃんの断り無しにオービット チェーンを展開させる。それは蜘蛛の巣のように互いに絡み合い、一つの鎖の盾を創り出す。

アキシオンがその盾に阻まれ、止まる。

「ただの魔法少女風コスプレでは……ない、と言うことですね。そうですね……」

楽しそうに勇者は笑う。

その笑いの奥に絶大なる自信を感じ取る。

沸々と怒りが煮詰まってくる……。人を傷つけようとする行為に達成感があるなんて許されない！

ゆっちゃんは盾の裏側に天永無想の刃の軌跡が紡がれるようにする。盾を解き、計算通り、アキシオンの刃と闘ぎ合う。

「ゆっちゃんはやっぱり、勇者が許せない。そうやって楽しそうに殺したのか、民を」

「……そつですよ。それが？」

あつさりと他人の命を斬り捨てる淡白さが見えかける言動に……
ゆっちゃん心の火が点いた。そう、怒りの炎が。身を焦がすほどの怒りを天永無想に載せる。

「記憶呼応魔法 ロック解除……」

『ゆずりん、世界を頼むぜ！ 記憶呼応魔法に俺の技を刻んでくれ！ 強化抜刀を』

と、記憶呼応を司る図書館に在る記憶が再生される。

「解ったよ、ディ・フィーチャ …… 共に闘おうぞ」 空气中に漂うマインドエラーが勝手に天永無想へと吸収されていく。その度に天永無想の刀身が巨大化していく。魔王の杖が教えてくれる。極限まで集中力が高まった時、それは発動する。バベルシステム！ 「これが強化抜刀だ……勇者」

この世界で許された最速の足運びで抜刀に必要な距離を取り、勇者が迎撃しようと構える前に…… 腰を落とし、剣を勇者の腹部へと滑られる。

強化魔法＋抜刀の神速＋バベルシステムによるこの世界で許された限界の力、それらが勇者に牙を剥く。

「どうやら、限界みたいですね。やはり、幼女様ですね。力に身体がついていけない」

「う……くう……そんな」

身体が重い。勇者のロングコートの生地がはらりと、地上に落ちていく。ゆらり、揺れていく生地はまるで木葉のようだ。まるで…

…この世界で死んでいった魂達のようだ。

天永無想からゆっちゃんの指が離れていく。究極魔法 エアースターの威が徐々に消えていく……。

天永無想は勇者の脇腹に突き刺さったままだ。だが、臓器までは到達していない……。

「ゆず！」

「ゆず様！」

悲壮な二人——いりゅ、じじいの悲鳴が聞こえる。

「あ？ アキシオン……」

アキシオンが修道服を切り裂く。ついでにゆっちゃんの肉を裂き、骨を砕いた。

アキシオンを先まで握っていた右手が糸の切れたマリオネットのようにぶらりと脱力している。

腕全体が真っ赤になり、白い骨が見え隠れしている……。

痛み之余り、意識が飛びそうになる。

意識が飛ぶ前に首を掴まれる。逃れられない……丁度、究極魔法エア―ブースターの効果が切れた。

首にゆっくりと死をもたらす圧力が忍び寄ってくる。そいつは嘲笑っていた。

既にそれに抗う力――天永無想とラグナロクフィールドは消え去り、そこにはただの少女がいるだけだった。

「あ……うぐあ……ぐるし……」

苦しい。そう、ゆっちゃんが呟くと少し、力が弱まる。が、すぐに力が強まる。迷っているのか？ 勇者。

涙で霞む視界から見た勇者の顔に哀れみが浮かんでいる気がした。意識が薄れていく。

薄れゆく意識の片隅でいりゅが空気の究極魔法に加えて、炎の究極魔法を発動するためにマインドエラー構築限界領域圧縮限定フレアタワーを構築しようとする。

火柱が空を焦がす。

そんな業火を尻目にゆっちゃんの意識は完全に途切れた……。

僕はコンビニで買ってきた女兒用コアラパンツを握り締めていた。汗でもう、染みっている。長時間、廊下の壁に背を預けながら、ゆっの昔話に耳を傾けていた。

ひんやりと冷たかった壁はもう、人肌に暖まっていた。

ゆっは体育座りのまま、込み上げてくる涙を必死に抑えようと唇を噛み締めている。真っ白な乳歯がその身に余る無数の悲しみに堪

えていた。

抱きしめて、大丈夫だよ……ゆず。君はここで新しい人生を歩むんだと言ってやりたかった。

だが、パンツを握り締めながら盗み聞きしていた自分が……それをすることは躊躇われる。洩らしたゆずの穿いているモノはオムツだ。急いで買ってきたパンツは無駄になっていない。

「気が付いた時には、勇者も、いりゆも、じじいも、いなかった。異世界にいた。牧場を営んでいる老婆の家のベッドに寝かされていた」

「きつと、必死でてめえさんの命を仲間が守り抜いて、こっちの世界に寄越したんだろうよ」

「うああああ、ゆっちゃんは、ゆっちゃんは満足に一度も闘えなかったあ」

ゆずの瞳からぼろぼろ、とコンペイトウのように綺麗な涙が流れ、床に散らばる。

ゆずは鼻水を吸り、不器用な息継ぎを何度も繰り返す。

ぎゅっと、林檎婆さんのスーツの生地を小さな手で握った。

「待て。てめえがしがみつくべき、相手は途中で盗み聞きしていた奴にしな」

「知っていたんですか……人が悪い——」と、林檎に対して言おうとした僕なんて構わずに、ゆずが僕の身体に飛び込んできた。「うわあ！ ゆっ、ゆず」

タツクルに近いゆずの抱きつきは僕を軽々、押し倒した。何処にそんな力があるのだろうか。僕に馬乗りになった姿勢なんて気にせずゆずは泣き続ける。

腹に幼女を載せた体勢。これを何も知らぬ人に見られたら完全に変態確定だ。しかし、やれやれ、等とは口が裂けても言えない。

「ゆず、今は怖い怖い勇者さんはこの世界にいないのでしょ？」

「うん、そのはずだ。究極魔法 聖なる虹でなければ、この世界には来れないだろう。ルート〇みたいな異世界と異世界を繋ぐ道なん

て千年単位、費やさなきゃ……無理」

「うん？ どうしたんですか、ゆず。帰れないのがつらい？ でも」
「まだ、あの世界にはいりゆ達がいるんだ。ゆっちゃん、ゆっちゃん、助けないと」

小さな身体でこの子はまだ、必死に魔王としての使命を果たそうとしている。だから、僕はこの子に今、できる最高の微笑みを浮かべる。

残念ながら、僕にはそれと綺麗な言葉を吐くことしかできないから。

「そうか……そうですか。僕としては君には小学生らしい生活をして欲しかったんですけどね」

それは無理だと、ゆずは涙を両手で拭いながら無言の姿勢を崩さない。

「だったら、僕も手伝いますよ。魔王様が臣下と合流できるように」

「あ……、ありがとう！ 絢ちゃん」

そう言って、馬に抱きついてくるゆず。

ああ、僕は胸にのし掛かるこの暑苦しい熱を帯びたちびつ子を全力で守りたくなっていた。この世のどんなに深い、深い深淵から……。

「全く、その真面目腐った表情……やっぱ、似てるね……」

そう、林檎婆さんが呟いて、火の点いたタバコ二本、不味そうに顔を顰めて吸った。

青空に二筋の煙が舞い上がる。それは離れていたが、やがて……互いに絡み合い、完全に一つになった……。

青色に白色が異端者のように混じっている光景は僕の目には酷く、印象深く残った。胸の奥がざわつく……。

その頃、古瀬小波は……。

「待ってて、お兄ちゃん！ お兄ちゃんにアンバランススインターのパンツなんて買いに行かせたりしないんだからあ！」

と、叫びながら、ストップウォッチがあつたら、自身の自己ベ
スト越えのタイムが弾き出されたであろっ凄まじき速力で街を駆け抜
けていた。

哀れな古瀬小波。

少女の努力はまさに空回り。

シナリオ？ モンスター

寝苦しい……。漬け物石に乗つかられているみたいだ。

寝苦しさから目を覚ますと、そこには幼女の白い肌があった。ぎよっとしてしまいが、すぐ、その肌の持ち主が小さな魔王様 宮之ゆずだと思ひ当たる。

口元がしきりにむにやむにや、動いている。何か、食べているみたいだ、夢の中で。

僕はそんな幼い少女のあどけない動作が愛おしくて、ふっと、自然に微笑んだ。

「僕が小さい頃もゆずみたいに笑えたのだろうか」

正直、もう、思い出せないと思っていたんだ。思い出せば、中学一年の頃、死んだ映画監督だった父——衣螺^{いらひかる}光や、もう音信不通になつて何年も経つ母——ルビー・サーマと出逢う。

出逢う。ううん、と僕は首を振った。

ぎゅっと、ゆずを抱きしめる。この子はこうしていると良い夢を見られるらしい。そう、気づいたのはきつと……。この子がまだ、恋愛対象枠に入らない幼女だったからだろう。それに……。よく、託児所の子ども達に添い寝をしてあげていた。彼らもゆずと同じようにそうすることによって安心してくれていた。この経験が生きたのだ。

「ゆず、君は独りで闘うのかい？」

「にゃあ……。いりゆ、ゆっちゃんは砂糖たっ、ぷりのパンを食べるゆ」

とんとん、と背中を優しくノックする。きつと、ゆずのことだ。喉を詰まらせるに違いない、と。

「いりゆ……。か。君に温もりを与えてくれた人だね……」

ゆずの温もりは僕が孤独な人間だったことを痛感させてくれる。

それは良いことなのだろう。

今まで、生きていくという温もりを感じずに……機械的にがむしやらの生きてきた。頼れる人間は周囲に大勢いた。

ゆずのパジャマが着崩れして見えちゃいけないとこまで見えそう。僕はそつと、直してあげる。お礼代わりなのか、ゆずは僕の肩を小さな手でぎゅっと、握り締めた。

「僕は結局、助けられていたんだ。片意地張っていただけ……なんて、子どもなんだ」

ゆずに見られないように両手で自分の顔をガードする。

望月林檎は家賃 一万五千円という破格の値段で僕に住まいを提供してくれた。

古瀬津波にはお金の稼ぎ口——託児所 友達百人、できるかな？と家庭的な優しさを貰った。

古瀬小波は週に四回、朝御飯をたかりに来る。彼女の動物的な躍動感溢れる箸運びは毎度のことながら驚嘆に値する。そんな小さな妹的存在はゆずが、我が家にやって来て以来、毎日、来るようになった。

その他に悪友、その悪友の父親……たくさん、僕は彼らに頼っている……。

脳の血管に流れる血液が解るくらい、僕は興奮し、涙を流した。まるで血液と涙の流れが同調しているように。

両腕の隙間から、二重まぶたの薄茶色の虹彩を咲かせた瞳が何かに怯えて、僕を凝視している。

「絢ちゃん、どっか、怪我した？ したならば、包帯を持ってこよう。ゆっちゃんの治癒魔法は役立たずだから……」

その声は酷く痛々しく、沈んでいた。この子は何で自分を否定するんだろう。癖なのだろうか、ともかく、僕は優しい魔王様の髪を手で梳く。

「大丈夫。僕は怪我していない」

「うつん、ゆっちゃんが言っているのは心の怪我。ゆっちゃんのい

た調整世界では屈強な戦士でも何にも怖がることのないのに怯えているものがいた。だから、絢ちゃんもって」

「……PTSDですね」

「ん？ 何、それ？」

「んん、いや、ゆずには暖かい日向が必要ですねって思っただけ」

僕の言葉を理解していないだろうゆずは、何のことって言いたげに顔を僕の両腕に近づける。そして、躊躇いもなく、両腕にキスをした。

「そついうのは好きな人にやるもんですよ」

と、ゆずに苦言を呈した。

しかし、小さな魔王様は子猫みたいにそっぽを向いて、僕の身体から離れ、本来、自分が寝るべき、布団へと顔から潜り込んでいった。ゆずの巣穴とでも名付けて、有名な絵師にその光景を描かせたいくらいに可愛い行動だ。

けど、ゆずは何故、僕に懐くんだ？ 確かに……僕は異様に小さな女の子限定で懐かれるけど……。

「きつと、託児所で培われた子守技術の向上の賜ですね」

どうやら、ゆずはもう、寝てしまったようで小さな寝息を立てている。僕もタオルケットを頭から被り、寝ようとするが……

「眠れないよなあ、とほほ。ジュースでも買ってきますか」

跳ね起きて、リサイクルショップで見繕って二年の年期の立つ卓袱台に置いてあった財布を手に取る。財布をねじ込もうとして、同じく卓袱台に置いてある駄菓子屋によくあるお菓子を詰めた小瓶（但し、今は百円だけ入っている）が目に入る。

その小瓶には油性マジック まっぴーで、ゆずの金庫と記されていた。昨日、僕が買い物をしたいと所望したゆずの為に制作した金庫だ。

その金庫の紅い蓋を捻り開けて、五百円を投入した。

何故か、ゆずの金庫を前にして柏手を打つ。

「魔王様に流石にカップラーメン 九十九円特売は食べさせられま

せん。ですから、幕の内弁当 三百七十五円特売、もしくはラ王
二百五十円特売でばんぼんを満たして下さい」

これで明日のゆずのお昼御飯は安泰だ。明日は学校の入学式だから、春休みの時のようにゆずにお昼御飯を作ってあげることができない。

「……釘を刺しますか、お砂糖入りのパンを買わないように」

ボロボロのスニーカーの底が開いていないか、調べつつ、僕は独り言を言った。

菓子パンは御飯には入りませんからね。バナナはぎりぎり、御飯だと認めましょう。

部屋を後にしてから、数十分、歩いて僕は自分の間抜けさを呪った。致命的なミスだ。

「うわー、リボルバーを部屋に忘れて来てしまいましたあ……うわあ、痛いですね」

そう、これはもの凄く痛い。ひょっとしたら、命に関わるほどに。夜は奴らのテリトリーだ。

奴らに哀れみを感じる感情は皆無だ。ただ、目の前の獲物を捕食し、それを殺して喰らう。本能に忠実な生物だ。

奴らがどのような進化を辿って、食物連鎖の表舞台に登場したのかは出現から約一年経っても解明されていない。僕ら、人間は奴らから身を守る為に地区事に自警団を結成している。

だが、その規模は奴らに対して微々たるものだ。

実際、人間の命を死守する理由のみ、武器の使用を許可する法——特別武器法がなければ、個人レベルで対処できなかっただろう。奴ら——モンスターに対して。

「そう考えると、一九八〇年の連続女兒殺傷事件は都合が良かったのかもしれませんが、軽率か、それは」

以前に町内会の回覧板で回ってきたモンスター生息地図ではこちら辺に生息しているのは、ネコネコだと記載されていた。

ネコネコとは、容姿だけではなく、ほとんどネコと同じ戦闘力しか持っていない世界で確認されている中で一番弱いモンスターだ。こちらが攻撃を仕掛けなければ、彼らは攻撃してこない大人しい性格なので大丈夫だろう。

だが、稀にネコネコ以外のモンスターが彼らの縄張りに入ってくるから要注意だ。

春の風は肌に優しい。暖かくもなく、冷たくもない。夜に映える桜は僕を何処か、違う世界に誘ってくれそうな感じさえする。

実際、深夜の二時なんていう深い時間に起きている人間なんて、ほとんどいないだろう。それを裏付けているのは、街灯の頼りない灯りしかない街の様子だ。その街灯には羽虫が群がっている。羽虫に街灯がぶつかり、ぱちん、ぱちんと清音をぶち壊す濁音が響く。

僕はその音があるだけで、安心できた。

紛れもなく、その音は僕の知る世界のもので、桜の世界に迷い込んでいないことを証明しているのだから。

「僕がゆずの立場だったら……」

僕はゆずのいた世界を知らない。知らないってことは、恐怖と同意義だ。そこに自分を脅かす存在がいるのかもしれない。

背中を誰かに舌でべろり、と舐められたような悪寒に襲われる。

僕は左右をしきりに観察する。右側には何も掲示されていない掲示板、左側には自動販売機。

その自動販売機を見つけ、僕は自分が本来、外出した理由を思い出した。

「いつの間にやら、軽いジョギングになってしまいましたね……」。

ゆずの分も買っておきますか、あの子は何が好きなんだろう」
財布から三百円を取り出し、販売機の前でしばし、考える。

「ここで、何も購入しなければ……夜の御飯をちよつと、リッチにうーん、どうしますかあ……絢」

自分に問いかける。その考えは却下だ。何の為に深夜のジョギングを敢行したのか……解らなくなる。

百五十円を投入する。それに合わせて、選択ボタンが緑色に光る。迷う……。ゆずってどんなのを飲むのだろうか？　そもそも、彼女のいた世界にジューズなんてあったのだろうか？

「ゆずだけに、ゆずレモンを購入しましょう」

ゆずがこの渾身のギャグを聞いて、普通の子どもみたいに笑う。そんな図を想像するだけで僕の頬は膨らんだ。笑いを堪えるのは大変だ。

ゆずレモンを大事に両手で抱えて元、来た道に戻ろうとした。

グガアアアアアアア

乗用車のエンジンよりも甲高く、不規則な咆吼が聞こえた。それは普通の生物の声ではない。かといって、この辺に出現するモンスター——ネコネコの声でもない。

何者なんだ……。それは好奇心か、それとも、ただ……腰を抜かしているだけか？　いずれにしろ、僕は動けずにいた。

僕が動けたのは、その咆吼の主の姿を目視してからだった。

ネコ科の動物　トラに似た黄色と白の斑模様、鼻面は黒く、白い髭の裂先はナイフのように鋭い。四足歩行でそいつは僕のいる方へとゆっくりと移動してくる。移動する度に撓る柔軟な足の筋肉。鋭い爪が今にもアスファルトに食い込みそうだ。ドンドン、と怪獣じみた走行音が聞こえてこないのが不思議なほど、そいつはでかかった。四足歩行で歩いているのにも関わらず、僕の身長と同じくらい高さがある。

立ち上がったら……と、考えそうになる。

「考えるな……考えるな、考えるな、よせ、そんなの……無意味です……」

おまじないのように僕は何度も自分に注意するが……立ち上がったら？　の次なんて決まっている。自分が襲われたら……。

自分が襲われたら、ただの一撃で肉や骨、さらには臓器まで破壊されるだろう。血と肉の入り交じった、さながら、不細工なミンチの出来上がり。

ガアグウ……

目が合った。そいつの目はとても、穏やかに見えた。純朴なんて言葉が似合うんじゃないかな、と呑気にも現実逃避したくなる。

ガアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！

現実逃避する脳より、先に足が動いた。後ろ歩きに数歩、歩いた後に……僕は背をそいつ——ベンガルソードタイガーに向けて、走った！

最適に走る方法？ そんなの知るか！

とにかく、腕を振り、足の裏が地面に接する前に爪先で硬いアスファルトを普段よりも激しく、蹴り飛ばした。

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、な、くう」

三十メートル、走ったところで息が上がる。それでも、脳は体に命令を下している。

もつと、もつと、速く走れ！ 奴に殺されるぞ、奴の胃袋内にご招待させられるぞ！

僕は今まで一度もモンスターに襲われたことはない。モンスター

——ネコネコになれば、遭遇したことはあるが、彼らに襲われた経験はない。彼らは人間よりも弱い生物を狩り、その肉を貪る方が自分達には合っていると理解しているらしい。

人間はネコネコになれば、銃を持っていなくても勝てる可能性がある。だが、今、僕を遊び半分に追いかけているモンスターは銃があつたとしても、人間に勝てる確率は……あるのか、どうかも怪しい。

運はここで切れたってことなのだろう。諦めたい。諦めるべきだ。徒労だ。

下半身が重たい。

ベンガルソードタイガーは実に軽やかな呼吸をしている。

手を振るのが億劫だ。

ベンガルソードタイガーはオモチャを見つけたことにきやきや、と楽しそうな声を上げる。

呼吸が乱れる。整えようとしても、たんが喉に絡みつき、口腔内に壁を徐々に構築していく。無理矢理に酸素と二酸化炭素の循環を行う度に、僕は窒息死そうになる。

それでも僕は…… 生きたい。

背中に激しい痛みを感じた。背中が焼けている。そんな錯覚にさえ、陥りそうになる。火種になりそなモノはなかった、と頭の片隅で辛うじて…… それはただの痛みだと理解する。

「うわぁ、ああああ！」

悲鳴を上げたことによつて、たんの入り交じった唾がだらしなく開いた口の端から流れ出る。アスファルトに唾が垂れるよりも早く、唾の糸は口の端とお別れする。

その唾の糸の付着したアスファルトを、ベンガルソードタイガーの鋭い爪が抉るように踏みつける。

このままでは殺される！

僕の目はそれから逃れるための術を見出そうと動く。道端や駐車場に止められている自動車やバイクを視界に捉えるが鍵がない。第一、エンジンがイグニッションする前に車体が壊されるのは目に見えている。

自転車…… これも駄目だ……。

自転車に跨る瞬間、こちらの速度がガクンと落ちる。それを奴が逃すなんてことを考えるのはナンセンスだ。

「あああああああつ」

僕の死は確実だ。

ゆずの顔が浮かんだ。あの魔王幼女ならば、モンスターと互角に戦えるだろう。いや、互角以上かもしれない。なんたって、魔王様なのだから。

僕はその力が羨ましくて仕方がない。ああ、欲しい力が！僕はまだ、生きたい！

「生きたい！ 生きたい！ 生きたい！ ここで死にたくあ、ない……」

シナリオ?? 魔法少女の夜

魔王幼女がいるならば、魔法少女がいても可笑しくはない。だが、本来、彼女が登場しなくとも、数奇な運命を辿る運命に在る衣螺絢は運命にさえも数えられないこの苦難を乗り越えられただろう。

では、何故、魔法少女が登場するに至るのか？

もし、魔法少女に……古瀬小波にそんな質問をしたら、彼女は向日葵にも似た満開な笑顔を浮かべ、こう答えるだろう。

「くふふん」 私はお兄ちゃんの背中にコアラみたく、くっついてでもお兄ちゃんを守りたいんだから」

その根拠となるのは今、魔法少女らしからぬ行為を彼女が取っているからだ。

魔法少女 古瀬小波はママに言われて、得意の召喚魔法と強化魔法を駆使してご町内限定で、モンスターから人々を守っている。それが魔法少女。それが正義の味方だ！

彼女の熱いパトスはそれだけに留まらない。そんな彼女の熱いパトスが近頃、多く注がれているのが突然、現れた幼女に愛しの王子様を食べられるのを阻止すること。

今日も日夜、魔法少女は己の正義の為にストーキングしていた。

愛しの王子様の住んでいるアパート メゾンNOZUTUKIの一室に鋭い眼光を光らせているはずだった。

古瀬小波はまだ、今年で小学三年生になる幼い少女だ。当然、睡魔に勝てるはずもない。それが古瀬小波が己の持てる全ての性欲を掻き集めた衣螺絢とベッドインする夢ならば、永遠に眠りに就いたままでも良いとすら、思っている。

そんな彼女が情眠から目を覚ましたのは、まさしく愛の成せる業と言えよう。

古瀬小波は自分が寝ていたという事実に驚き、目を擦った。急いで、望遠鏡を手繰り寄せる。

ここがメゾンNOZUTUKIの向かいにある二階建ての住宅の屋根の上でなければ、こうも望遠鏡で覗けなかったであろう。

タオルケットを抱きしめて眠る愛らしい魔王幼女。それを目に捉えてしまった古瀬小波の顔が歪む。

「アンバランス ツインテールめっ。そこは私のいるべき場所よ」次に衣螺絢が寝ている魔王幼女の隣へとレンズを合わせる。

「え？ いにやい！ にやんで！ にやんでなのよ！」

有り得ない、有り得ない……そんな言葉で魔法少女の脳はパンク寸前だ。しかし、そこはご町内限定で平和を守る魔法少女！ へこたれない。

ここで魔法少女 古瀬小波は最終兵器をブリーツスカートのポケットからおもむろに取り出した。そう、こんな時の為に彼女は衣螺絢の財布に超小型の発信器を取り付けておいたのだ。それと受信機を購入するのに彼女のお年玉はすっ飛んだ。

それは些細なことだ。この受信機がある限り、いつでも彼女は――

「くふっ、お兄ちゃんと一緒っ」
――だ。

なんて、恐ろしい魔法少女……。

「おっ、意外と近い。すぐに行くからね、待っててお兄ちゃん」ちなみに古瀬小波の着ているワイシャツも昔、衣螺絢が着ていたものだ。ネクタイもそうだ。両方とも、古瀬小波が失敬した品である。

ネコの肉球の形をした先端を持つ杖を一振りする。杖をベルトに固定した。

そして、口に手を添えて、低く口笛を吹く。その音には魔法が宿っている。使用者にしか解らぬ違いがある種の言葉を創り出している。

日本語に直訳するならば、こうだ。

—— 親愛なる友人、無限の空を駆ける鷹。私を空へと。報酬はちくわでどう？

三羽の鷹の声が遙か、遠くから微かに応える。

—— ちっ、しょうがねえなあ、変態魔法少女様。ちくわは大目に頼むぜ！

すぐに古瀬小波の笛の音を聞いて、三羽の鷹が東から飛んでくる。力強い羽ばたきだ。

滑空すると同時にそれぞれ、古瀬小波の右肩、左肩、背中を両足でがっちりとくわえ込んだ。

彼らの力では足りないと知っている古瀬小波は腰に括り付けたビンの蓋を開け、ボディエラーを一掴みし、三羽の鷹に振りかけた。

仕上げるに、

「肉体強化」

と叫ぶ。

強化魔法。液状であるボディエラーを該当箇所には振りかけ、強化と叫ぶ。その一連の動作によって起動する魔法。その効果は術者のレベルによって異なる。古瀬小波は幼い頃から魔法の勉強をこなし、しかも、才能もある。この世界だけならば、最強の部類に入る魔法少女だ。そんな彼女の強化魔法は今のようには該当箇所を定めない全体の筋肉強化の場合、三倍化というところだろう。

もし、一定箇所に定めたら、五倍化は硬い。

古瀬小波は夜空に浮かぶ星々をつい眺めてしまいが、すぐに自分の目的を思い出し、首を左右に振る。

「いけない。お兄ちゃんを探さなきゃ。お兄ちゃん、モテるから何処かの女に襲われてるかも」

古瀬小波の言っている女とは、十二歳の女の子、三歳の女兒を指している。そんな少女がこんな深い時間にいるわけがないと考える頭は残念ながら彼女にはない。元来、古瀬小波の頭は直情的に出来ている。

そんな古瀬小波の猛アタックを受けても、お兄ちゃんこと衣螺絢は小さい子に好かれる性質があるのか……ベビーシッターは僕の天職かもしれない、と真面目に分析するのみである。

哀れ魔法少女 古瀬小波。

古瀬小波の視覚と聴覚、嗅覚はお兄ちゃん関係の事になると、通常の二乗化される。彼女曰く、お兄ちゃんへの愛が私を進化させたの、らしい……。

その視力は眼下に広がる歩道をくまなく探す。

「ちっ、野犬ばかり。うざいのよ、野犬！ 焼いて喰うぞ」

苛立ちのあまり、汚い言葉を吐き、唾を電柱にマーキングしている野犬に向かって吐く小波。お兄ちゃんの姿をその目に捉えるまで彼女に安心の二文字はない！

溜息を吐こうとしたその時だったやさぐれた小波の鼻がひくひくと歡びのあまり、小躍りした。お兄ちゃんの匂いを感知した。

「ああ、このおゝさわやかなミント風味。一生、このまま嗅いでいたい」

その言葉に偽りはなく、古瀬小波はお兄ちゃんの匂いをおかずに白米を三杯食べられる。実際に彼女はそうしたことがある。

彼女のお腹はその時の事を思い出し、きゅうんと可愛い音を奏でた。お腹をさする。

「うう、今日はお弁当を持ってきてない。でも、お兄ちゃんの笑顔が私の栄養源！」

小波は早く、愛しいの人を見つけるべく、耳をすます。

「集中しろ……お兄ちゃんの声、はあ、はあ、はあ、はあ、はあはあ」

目を瞑った途端、お兄ちゃんと結ばれる自分を想像しまくる古瀬小波。もはや、変態の域を越えている。思わず、スカートに手が……

「はっ、違う。それは後！」

幻聴かもしれない。いや、幻聴ではないかも……。判断に困る小さな音が聞こえる？

もう、一度、聞こうと両手を両耳に添え、エリマキトカゲの傘のようにする。

「……たい！……たい！……生き……ここで死にたくあ、な……」
尋常ではないお兄ちゃんの怯えきつた声が聞こえる。

何かの鳴き声。それは明らかに普通の動物の声ではない。モンスターだろう。

「んなの……関係ねえ……ぶち殺す。ミンチにしてやんよ」

小学生の声とは思えぬ、怨嗟に満ちた地獄の底を行く者の声が、古瀬小波の喉から吹き荒れた。

あっちか！ 鋭い視線が巨大なタイガーもどきと死に物狂いの徒競走を敢行している衣螺絢を束縛する。もう、離さない……。

上歯と下歯が互いに鬩ぎ合うくらい、きつく噛み締める。そうしていないと……小学生らしい自分を保てそうにない。理性が飛んでしまいそうだ。

古瀬小波はボディエラーを自分の膝小僧に満遍なく、振り付けた。処刑判決を下すように、

「両膝強化」

と呟き、

「鷹さん、あの最低野郎に突撃……。爆撃地点はあれの額」

と抑揚のない低温で指示を飛ばす。

空が揺れる。空が振動する。

空気が小波の耳元で悲鳴を上げる。それは自分の噴火寸前の怒号にも似ている。そのエネルギーはまだ、ここで吹き出す訳にはいかない！

食い縛れ、魔法少女 古瀬小波！

家々の影が小波の影と重なり合う。

衣螺絢が古瀬小波に気づいて瞳孔を目玉が飛び出そうなくらい見開いた。

古瀬小波は大好きなお兄ちゃんに顔を向けたまま、小動物が餌を欲しがっているような打算的な笑みを浮かべる。

巨大なタイガーもどきの顔を見る必要はない。小波の攻撃の調整は鷹達がしてくれる。今の小波の膝はミサイルだ。

「お兄ちゃん、小波は魔法少女なんだ。てへえ♪」

無邪気な言葉をさらりと言つてのけた小波の両膝は巨大なタイガーもどきの頭を貫いた。

そのまま、巨大なタイガーもどきの背後に小波は着地する。

——ちくわ、楽しみにしてるぜ、変態魔法少女様。避妊はしつかりしろよ、あばよ。

と、鷹達はブラックを満遍なく垂らした空へと翼をはためかせて、同化して行つた。

鷹達に手を振るべく、振り返つた時には、巨大なタイガーもどきは首から上を無くし、冷たいアスファルトに転がっていた。小波に反応しようとしたかぎ爪が小波の膝に当たっていたらしく、硝子のようにそこら中に散らばっていた。但し、骨や肉、血に紛れてどれがどの部位に当たるのか、全く解らない……。

残酷までに破壊する……。それこそが古瀬小波の闘い。

魔王幼女 宮之ゆずのような甘さは魔法少女 古瀬小波には皆無だ。蔑んだ目で物言わぬ死体を一瞥し、生者である衣螺絢に話しかける。

「危ないところだったね、お兄ちゃん。たまたま、私が通りかかったから良かったものを。こんな時間の一人歩きは危ないよ」

「……………」

「あつ、アンバランス ツインテールとの二人歩きも駄目だよ。今度はぜひ、魔法少女 古瀬小波と一緒にねっ」

さり気なく、可愛らしさをアピールする為に、衣螺絢の片腕に引付き、上目遣いで甘え声。これが古瀬小波の奥義だ。

だが……それでも。

何が今、起きたのか……。それは見ていたのだから知っている。理解できないだけだ。

だって、僕がただの小学三年生になる女の子だと思っていた少女が……魔法少女？ いや、魔法少女が打撃で攻撃するか？

ツッコミを入れるべきだろうか。とりあえず、小波に泣きべそを掻いている自分の姿は見せたくない。袖で涙を拭う。鼻水は啜っておく。

「あつ、アンバランス ツインテールとの二人歩きも駄目だよ。今度はぜひ、魔法少女 古瀬小波と一緒にねっ」

僕の腕に巻き付き、普通の少女のように上目遣いで楽しそうにそう言った小波にはあの鬼神の如き、強さは感じられない。

僕は狐に拐かされていたのか？

違う、と……アスファルトに伏したベンガルソードタイガーの死体が教えてくれる。

そして、もう一つ、助かったと教えてくれた。

ここでやつと、乾いた笑いが込み上げてきた。息を吸う度に肺が苦しい。まだ、酸素を欲していた。

咳をこぼこぼ、と何度もする。その僕の背中を小波が優しくさすってくれた。

「大丈夫、お兄ちゃん？」

「ごほっ、あー、うん、うーん、あ、あれ？ 僕、怪我をしてたはずなのに……痛くない？」

小波ちゃん、僕……背中に」

「え？ お兄ちゃん、何ともないよ。ジャージも破れたとこ無いし」あの痛みは……幻だったのだろうか……。傷がないのなら、恐怖が作りだした仮想未来だったのだろうか。

怪我のないことは良いことだ、と自分を納得させる。臭いものに蓋をする的な考えではない、実際にあったかも怪しいんだ。

モンスターの死体に目を向ける。すると、モンスターの姿は崩れていき、崩れた部分が液化化し始めていた。この現象を間近で見たことはなく、僕には大変、興味深い現象だ。

この現象を文科省では公式に還元素現象と呼んでいる。かんげんそけんしょう

「これがモンスターの在るべき姿に戻る為の現象か……。一定以上のダメージを受けると、還元素同士の結びつきを助ける構築系こうちくせいがはち切れる……。か。気味が悪いなあ」

気味が悪い。物体だった者がドロドロに溶けていく姿なんてホラー映画内に留めてほしいものだ。

透明な液体の一部は排水溝へと滑り落ちていく……。それを目撃した小波ちゃんが低い声で唸った。

「うぎゃああ、勿体ないなあ。ボディエアーの収集、開始！」

透明な液体の傍で屈んで、小波ちゃんは理科の実験で使うようなスポイトで透明な液体を吸い取っては空の瓶に溜め込んでいく。

空の瓶が満たされているのが楽しいのか、小波ちゃんはTMRの曲 サンダーバードをノリノリで歌っている。……サンダーバードってそんな明るい曲調だっけ？

あ。僕は道德の授業で習ったことを今、思い出した。還元素は便宜上、名をつけられただけで詳しい解析は進んでいない……。だから、発見した際は文科省に連絡を、と禿山先生はげやまが太陽の陽を主に頭に受けつつ、言っていた……。な。

……

……無謀です！ 小波ちゃん。

強く力を込めて、小波ちゃんの肩にタッチする。

「小波ちゃん！ 小波ちゃん！ そ、そんな危険物で遊んじゃいけません。今すぐ、文科省に連絡して引き取りに——」

「あ、あれ？ ふん、一般人の皆さんはまだ、そんな世迷い言を信じているだね」

「え？」

僕は小波ちゃんの小さな肩に触れたまま、一ミリも動けずにいた。闇が在った。その闇は夜の闇から古瀬小波という少女の影を異端の気配へと変えている。重苦しい空気がその余波として、僕の心を射貫く。

緊張している？ 僕が……。僕が小波ちゃんに？

僕の表情を上目遣いで盗み、子猫はくすつと妖艶に笑う。

「お兄ちゃんには特別に教えてあげる。世界はね、嘘に嘘を重ねて、また、嘘に嘘を重ねて成り立っているの」

「……………」

「ん？ お兄ちゃん……手、震えているよ。安心して、お兄ちゃん
は私が、魔法省に登録している正式な魔法少女 古瀬小波が体も、
心も守るからね。ついでにご近所の平和も守る。ママに言われたか
ら」

「え、津波さんに？」

「くすつ、お兄ちゃん、ママの方が小波より好き？ 肩に乗ってる
手、力、弱まった？」

そこでやっと、僕が小波ちゃんの肩を握りつぶす勢いで圧力を掛
けていたことに気が付く。すぐに手を離れた。

街灯のじーという通電音が耳に優しく入ってくる。

しかし、僕の世界はまた、変わっていく。今度は魔王幼女が存在
ではなく、魔法少女の存在によって……。

「ママはね、古瀬小波の上司。ううん、魔法省に所属する魔法少女
の魔法神技官……みんなに魔法を教える人」

え……。伝う汗が妙に背中をざわつかせる。

理解しようとしていた。信じていたただの子ども好きな古瀬津波
と、僕に懐いているただの小学生 古瀬小波の像が粉々に割れるの
を……。

ただ、その音を聴いても尚、僕は……拳を握り締めてその内に、
破片を後生大事に秘めている。

「嬉しいなあ、こんな話をしてもお兄ちゃんはお兄ちゃんなんだ
ね。大好き」

古瀬小波はお腹に触れる。ああ、また、だ。妊娠したような気がする。
する。

お兄ちゃんと行為をしていなくとも、波夜はここ（ぽんぽん）に

いる。

その波夜に母はテレパシーを送る。

波夜、大丈夫。お兄ちゃんはきっと、私にあなたの源をくれるよ。好き過ぎると、人はその人間の意志など、問わずにその想いを貫きたくなる。

魔法少女 古瀬小波には実現する為の力がある。

小波はそれを否定するように目をきつく瞑る。

小波の頭上から、お兄ちゃんの優しい声が降り注ぐ。愛のシャワーだ。

「どうしたんですか？ お腹がいたんですか……。春とはいえ、冷えますから」

自分の着ているのがパジャマ代わりのジャージであることに気が付き、下にシャツを着ていないので小波ちゃんを暖められない。

そうだ、後ろから抱きしめればいい。

それを実行すると、小波ちゃんの還元素収集の手が止まる。それを誤魔化すように小波ちゃんは言い訳をする。

「もう、瓶。いっぱい。話しの続き、しよっ」

「うん」

何を照れているのだろうか？ 謎だ。けど、経験上、ここは小波ちゃんに従った方が良さそう。僕のシックスセンスがそう、告げていた。鋭いからね、僕のシックスセンス。

「魔法省ではこれをボディエラーって呼んでいるの」

そう言っ、小波ちゃんは収集した還元素改め、ボディエラーを指さす。

「そ、そうなんだ」

そう言っしかない。

「私の使う召喚魔法は呼ぶ時にだけ、マインドエラーを口笛に込めるんだけど、マインドエラーっていうのは空気中に含まれている要素なんだ。無限に引き出せるわけじゃなくて、制限があるけど……」。

こっちはわりと楽勝かな。でも、強化魔法は難しいんだあ。ボディエラーを強化したい場所に垂らして、強化っていう言霊でマインドエラーを載せる。技と魔法の融合かな。ねっ、私、凄いやね、お兄ちゃん」

「う、うん」

「うむー、リアクションが薄塩味」

不味い。僕のシックスセンスがそう、告げている。これは小さな子がむずがる前触れだ、と。どうやら、僕の受け答えがいけないらしい。

古瀬小波は自己主張の強い子だ。上手い質問で、彼女の性格を満足してあげさせる。それが突破口だ。

「と、ところでマインドエラーとボディエラーって何？」

え……、小波ちゃん、固まった。冷凍食品みたく、固まった。

そして、解凍。

「うん、そ、それはね……困ったね、知ら——」

「あっ、絢ちゃん！こんなとこにいた。探したよ！」

「ゆず……その恰好……」

ゆずの恰好は津波さんのお古のパジャマのままだった。サイズが少し、合わないのか、生地が少しずれて、右肩が露出している。

はあ、はあ、はあ、と浅い呼吸をし続ける膝に手を添えた中腰のゆずの姿を眺めていくと、ゆずの血だらけの両足に辿り着いた。

ゆずの歩いてきた道には小学生くらいの足跡がくつきりと朱く残っていた……。

「あ……ゆず、靴はどうしたんですか！何足も津波さんから貰ったでしょ？」

「うわー、これ、相当……。痛いでしょう、アンバランス ツインテール！」

小波がゆずの両足を心配そうに見つめる。

ゆずは心配しないで、と僕達を毅然とした瞳で見つめ返そうとするが……失敗した。

見る見るうちにゆずの虹彩はティーカップに満たしたコーヒータいに水面を揺らす。そして、決壊する。涙がぼろぼろ、零れ始めた。

「痛い。痛い。だけど、ゆっちゃんが痛がつている間に絢ちゃんがモンスターにやられて死ぬかもしれぬ……。それは嫌」

どうして、靴は履かなかったの、とは言えない。

こんな小さな身体で、全力で走ってきたに違いない。僕がいないことにびっくりしたに違いない。

だって、この魔王様は家臣のほとんどを失い、この地でただ、独りなのだから。

「ゆっちゃん、今度、ちゃんとお……」

「ゆっくりで良いよ、ゆず」

喋ろうとしているゆずの頭に手を置く。こうすると、ゆずに頑張れ！　と言いつづけている効果があるような気がした。

「今度、ちゃんと……敵を殺すから。それで絢ちゃんを守る！」

僕はその時、思った。

世界はいつだって僕を裏切る。

母は僕の前から失踪した。

父は交通事故で死んだ。

魔王と呼ばれている子は全てを失った。それでも……意志を捨てない。

魔法少女は命を失いかねない闘いに挑み続けている。

どうして、僕の思い通りにならない！

母には居て欲しかった。

父には死んで欲しくなかった。

ゆずと小波は普通の小学生のように……野山を駆けずり回って欲しかった。

ねえ……どうして、こんな運命を辿るの？

誰か、教えて……と懇願したかった。だけど、それに応えられる存在なんていない。

僕は残念ながら無神論者だ。

ゆずと小波の顔を自分の胸に寄せる。この小さな温もりさえ、感じていれば、僕は僕じゃない僕になることなんてない。

もう、発狂しない。父が……死んだ時のようには。

もう、応えてくれない答えを求めることなんて……ない。

「……………ゆず、小波ちゃん。帰ろうか。ゆずは僕が抱っこしてあげるから」

そう、言う言葉で誤魔化すことができたのならば、僕は大人の階段を上がったってことなのだろうか。

……………僕は大人になりきれていない。失った者にまで、僕があなたに求める幸福を求めているのだから。

シナリオ？？ ゲームを始めようか？

正式な魔法少女がいるのならば、非正式な魔法少女がいるのは世の中の理に適っているだろう。そして、正義と相反して、自分の欲望の為すがままに世界というボードゲームで遊ぶ悪が存在するの無理に適っている。

コンクリート剥き出しの壁の崩れた一室で、全裸の女性が浴槽でお湯と戯れている。湯を月明かりに照らしては、妖艶に微笑む。

しだいに指と指の隙間から逃げ出していく熱い雫を女性――明日あすな鳴厘はゆつたりとした動作で右肩に掛けていく。

「ねえ、もう一度、言ってくれる？ 私、耳が悪くなったみたい…

…耳鼻科に通院する必要があるそうだわ」

厘はうんざりそうに顔を顰める。彼女は解っていた。彼女から少し離れた場所で頭を垂れる少女 仁良くもり（くら くり）が言ったことを。

だが、人間は何でもはい、そうですか？ 許しますよなんて簡単に自分の感情を御せる程、高性能には出来ていない。全く、神様とやらに文句を言いたいくらいだ。

「厘様……わ、私、成功すると思ったんです。だけど、あんな正式の魔法少女が関わっているなんて知らなかった。あんなの反則です！」

厘の冷めた声から少し間をおいて、いつまでも黙っていては殺されると思ったのだろう震える幼い声が厘をさらに苛立たせた。

「……言い訳なんて私、聞きたくないわ」

両手を皿にして、湯を手中に満たした。それをランドセルを背負った長髪の少女に投げつけた。少女の黒い髪に透明な湯が交わる。ポタポタと、墜ちる湯を少女は拭おうともせず、ただ、石像のよ

うにそこに在った。

厘はこいつがウザくて仕方がない。いや、こいつらとすべきだろうか。厘が飼っている親に捨てられた可哀想な子ども達。

それを思うと、かつて、こいつらと同じだった自分が疼きだし、脳に血管が破裂しそうなくらい……感情がざわつく。

視線を浴槽の傍に向ける小柄な骸骨に目がゆく。

どの骸骨も獣に弄ばれて、陥没していたり、欠損していた。

殺意が急激に衰えていく。殺した後の空しさはまるで自慰をした後の虚無感に似ている。どちらもただの自己満足。

「生きてること自体が自己満足か……。まあ、いいわ。こつちとしても魔法省が究極魔法を超える究極魔法の完成阻止に乗り出すのは時間の問題だと思ってたから」

究極魔法を超える究極魔法。

魔法省が躍起になってひた隠しにしている大魔王の家系 サーマ家。そのサーマ家のみが行使を許された理を破った禁断魔法がそれと言われている。

魔法省の仕事でルビー・サーマに出逢うまでは……。

馬鹿な女、自分の息子があんたの軽はずみな発言のせいで血を狙われるはめになるとは知らずに。

その時の事を思い出して、厘は笑ってしまった。

びくつと、肩を揺らしてくもりは面を上げた。

「ふふつ、怯えなくても大丈夫。あなたはまだ、こいつらの」すつと手を伸ばし、骸骨の頭を拾い上げる。そして、それを投げた。「仲間にはならないから」

と、言い終わったところでかつて、くもりの親友だった明菜の頭あきな部は厘の手中に収まった。

それを食い入るように眺めていたくもりの充血した瞳は厘にとってスナック菓子だ。

両足を組んでしばし、その菓子を楽しむ。

こいつの才能を厘は認めていた。何せ、召喚魔法を使える者は魔

法省の中でも古瀬小波くらいなものだ。部外者でならば、きつと、厘とくもりくらいなものだろう。

その中で一番、誰が使い手か？　たとえば、間違いなしに厘だと自負している。

「ねえ、親友を飼い主に奪われるってどんな感じ？」

「……………」

「ふふつ、良いねえ……、その表情、大好きよ、私。怒らないから正直に言ってごらん？」

浴槽から肢体を抜け出す。

灰色の床に黒い染みを創造しつつ、弓の反り返りのようなくびれが左右にしなやかに揺れる。その度に透明な雫は厘の足下へと歩を進める足を急がせた。

その行進がくもりには死神の行進に見えたのだろう。くもりの顔は絶望に蒼白と化していた。

それさえも、厘にとってはおやつだ。メタボリックになることはないので、厘はそれをいつも、バクバクと食い散らかしていた。

人の絶望がもし、目に見えていたとしたならば、厘の周囲には悪臭が常に漂い続けていて、喰いカスだらけだろう。

くもりの触れたら壊れてしまいそうな柔らかい顎をそつと、上げた。

「どうなの、くもり？」

「……憎いに決まっています。あんたみたいな最低人間に能力がないって言う理由だけで殺されたんだから！」

怯えていたはずの少女は幼い剥き出しのアギトを露わにするが、厘はその意味を正しく理解できない。

こいつらの自分を畏怖する態度を観察して解ったのだが、自分は完全に壊れている。

「よくできました。ご褒美に殺さないであげる。今日の私は優しいなあ」

「……………」

「くもり、大魔王様が覚醒する前に私はどうしても、大魔王様の血が必要なの。あんたらはその為に私に生かされている。私はね、優しい飼い主よ」

「……………」

「あら、あら、そんな顔はしない。知ってる？ 親のいない君達を売りさばいていた商人が主に誰を相手に商売してるか？ この国のエリートなロリコン達よ。毎晩、毎晩、おデブな男に大切な、大切な、お花を散らされる前に栄誉ある仕事を提供してあげてるのよ。まあ、それも用済みになったら……………」くもりの顎から手を離し、バスタオルを手にとってきた少女——浦片みく（うらかた みく）からバスタオルを貰う。お礼に彼女の首筋にキスをあげた。「…………殺すよ」

舌をぺろりと出して、くもりにウィンクした。

「だ、だい、だ、だ、だ……………」

「何、くもり。まだ、殺さないって言うてるでしょ？ だから、緊張せずにスローリーに喋りなあ。お姉さん、こわーくーない」

「だい、だ、大魔王様の血じゃなくて、魔王様の血でも良いじゃないですか？」

「あなた達に本当の目的を話してないからあれだけど、それじゃあ駄目。あれは大魔王の使い魔みたいな雑魚」

そう、魔王 宮之ゆずを例え、一億人用意しても大魔王 衣螺絢には及ばない。厘の欲している恐怖を生み出せるソイル・サイクルを魔王では産み出せない。それを可能にするのは大魔王の家系のみ。恐怖だけが私のお腹を満たせる。そう心に留め、お腹をさする。

聞こえて来るではないか…………お腹が空く。虚無の音が。

「引き続き、大魔王として自覚してない坊やを…………あなた達にとっては優しそうなお兄ちゃんを死なない程度に痛めつけなさい。ここに連れてくるのよ」

「はい」「はい」

と、忠実な二人の将は厘に応えた。

「そう、そう、搜索には男共を使っただけ……魔法省に小規模と思わせる為にしばらくはあなた達、二人で大魔王様を狙って。軍を動かされるとさすがに骨が折れるから」

シナリオ？ 魔王幼女と魔法少女の語らい

春は何度も訪れる。僕はその度に思うのだが……窓を開けて吸い込む新鮮な四月の空気のドキドキ感は何なのだろうか？

未だに解らないが、ただ桜の花びらが舞い、人々が新生活について語りながら同じ進路を歩む友と歩く。そんな冬の寂しさから再生する春の活気が溜まらなく、好きだ。

欠伸が聞こえた。勿論、清々しい朝の景色に水を差すことは、僕はしない。

その発生源は丁度、一週間前から一緒に暮らしている魔王幼女宮之ゆず様のものだ。

ボサボサの翡翠色の長髪、激しい寝相によって砂漠の丘陵のように段差を造る皺付きパジャマ。目を擦りつつ、僕の顔をじっと見つめているそんなだらしのない恰好のゆず。

この後に来る台詞は決まっている。正直、気が重くなる。僕はまだ、今日から高校一年生の青二才だ。ゆずが求める大人像とは程遠い。

それでも、ゆずの甘えられる人間なんて限られているのだろう。

気怠そうにゆずは口を開く。

「絢ちゃん、着替えさせるのだ」

「……いや、だからね、ゆず。僕はまだ、そんな子育てをする年ではありませんから。僕に……」

僕が今、口にいる焦り混じりの台詞は虚言だ。本当はそんなのが理由ではない。ただ、単に恥ずかしい……。その娘を甘やかす親的行為は子どもが産まれたのなら、平気になるのだろうか。

うーん、何十年後の話だ。

考えていると……気が遠くなる。ああ、違う。これはお腹が栄養

を求めているから、か。

そんな事を考えている時だった。

「おっ、くそガキ、今日も元気だね。まるでヤクザが球を捕りにくみてえだねえ」

「林檎さん、おはっ！」

前者はこのメゾンNOZOTUKIのオーナー 望月林檎さん。

口は悪いが、心はそんなじょそらの婆さんには負けない優しい心意気を胸に宿したお人だ。

後者は昨日、僕と添い寝すると駄々をこねた挙げ句、ゆずがとんでもないスピードで連れてきた古瀬津波によって回収された魔法少女 古瀬小波だ。

サッサとリズム良く、アパートの周囲を掃く林檎さんと、元気よくスキップする小波の絵が窓から覗かずとも明瞭に浮かんだ。

まあ……朝の風物詩ですから！

小波がいつ壊れてもおかしくない板張りの階段を昇降訓練の如く、素早く駆け上がってくる。年々、タイムが上がっているような気がする。将来は体力の要る仕事にでも有り付くつもりなのだろうか。

ばん！ と僕にとっては血の気が引くような音を立てて、玄関の扉が開く。玄関は閉めたはずなのだが、魔法少女は見慣れない鍵を持っていた。

それは何と僕が尋ねる前に小波ちゃんは朝の日を背景にして、陽より眩しい満点笑顔で言つてのける。

「オーダーしちゃった」

ちよつと、上品に言つても駄目だ。小波のやった事は犯罪だ。そして、以前、小波ちゃんがこの家に入るべく、使っていた魔法のよくなピッキングもやはり、犯罪だ。こんな子が近所限定（本人曰く）で平和を守る魔法少女なんて世も末だ。

小波はまだ、僕が上がっても良いよって、声を掛けてもいないのに襖に立て掛けた卓袱台を素通りして、寝ぼけ眼のゆずを覗き込む。「残念ねっ、アンバランス ツインテール！ 幾ら朝が弱い私でも

何度も、何度も経験値を積みめば、この時間にここに来れるようになるの。どうだ、参ったか」

「……ふ……ああはあっ」

お友達である小波ちゃんがこんなにも努力に努力を林檎さんの厚化粧並みに重ねたのに、ゆずの反応は実に……淡白な欠伸だった。

ああ、動物園にゆずみたく、大口を開ける力バがいたなあ、と物思いに耽っていると、膝にぴりつとひと味、効いた痛感を感じた。

ゆずの蹴りが入ったのだと、わざと蹴りの体勢のまま、固まっているゆずを見て解った。

ここは叱ってやるべきだ！ と僕の託児所バイト魂が轟き叫ぶ。

「ゆず、駄目でしょ。人を蹴ってはいけません。保育園で習わなかった？」

「……知らん、そんなの。ゆっちゃんはそのような施設に行ったこと、ない」

明らかに拗ねたふくれっ面でゆずは応えた。まるで子豚ちゃんみたいな酷い顔をしている。笑えば、美少女なのに……。

「ねえ、その表情も人によつては不快に思う人間もいるんですよ」

「……知らん、そんなの。絢ちゃんが悪い。ゆっちゃんは、ゆっちゃんは……」

目が潤んできた。泣く前兆だ。

一体、何が気に入らない？ 僕の勉強不足か……。いまいち、児童の心を理解し切れていない。将来は保育関係に進むのも良いかなと思っていたのにこれでは不安だ。

見かねてなのだろう。小波ちゃんが卓袱台をいつもの定位置である部屋の真ん中に設置した。そして、彼女は不敵に笑う。

「残念ね、魔王様。お着替えは一人でやりなあ……」

あれ？ いつものお利口の小波ちゃんならば、ここはさあ、御飯にしましような展開なのに、喉の奥から這い出たような低い声でゆずをからかった。

ゆずは悔しいのか、顔を真っ赤にさせるが、魔王という立場上、

ゆずは毅然とした態度を取り繕うとする。

が、小波ちゃんはずの心にさらに一撃を加える。

「魔王様、寝る時、オムツ装備なんてしてないよね。お着替え以前に」

ゆずがオムツを履いているというのはとんでもないシークレットだ。魔王様の威厳が砂上のお城のように今、崩れようとしている。そんな悲壮感、漂う表情をしているゆずだが、ばれていても仕方ない。そう、僕は思う。

何せ、物的証拠である新品のオムツが部屋の隅に置かれているから。

さすがに可哀想だ。僕は話題を変更しようとしたが、ゆずがその前に反撃に出た。

「魔法少女、ゆっちゃんがそのような赤子の履くパンツなんぞ、履かぬ。ゆっちゃんが履くのはカッコイイパンツのみだ」

王様喋りのゆずだが、カッコイイパンツって？僕は廊下に設置した冷蔵庫を物色しながらしばし、考える。

うわっ、納豆……昨日で賞味期限切れてる。うちには子どもがいるから捨てよ。お腹、壊したら大変だ。

「カッコイイパンツ、何、それ？」と小波ちゃん。

「決まって、決まっておろう。あ、あれだ。あれ？」とゆず。

「あれ？」

「真ん中にピンク色のリボンが付いているやつだ。あのお、リボンって少女マンガ雑誌によく出て来る。そ、それだ！」

リボンだけに……か、と僕は呟きながら、冷蔵庫の奥に百円を見つけた。

おっ、ラッキー。ジュース代が浮く。

「……センスゼロのパンツじゃん。はあ、敵ながら呆れるわ。ん、いいわ。今日、学校帰りがてら、私の感性が囁くカッコイイパンツを魔王様にご教授しましょう」

「えっ、良いのか？」

「ええ」

あれ？ 険悪なムードがいきなり、和解ムードに。子どもって解らない。

昨日、お総菜屋で買ったきんぴらゴボウと、白菜の漬け物、だし巻き卵を手に卓袱台へ置いた頃には、二人は仲良く、絵本を読んでいた。題名は【オスと魔法使い】。

しかしまあ、漆黒のゴスロリ衣装と、淡い水玉模様のパジャマ姿ってアンバランスな絵だ。

「ゆず、今日は僕、学校が終わった後、バイトがあるんです。家で大人しく待っていてもらえますか？」

電気炊飯器の蓋を開ける。すると、思わずむわっと煙が飛び出てくる。その煙を喋った際に吸い込んだ。御飯の味だ。当たり前だ。「一緒に行っちゃいかぬのか？」

ゆずのお茶碗である魔法少女もののイラストが描かれた茶碗に、米をたんまりとよそる。ゆずは沢山、食べるので山盛りだ。

「無理かなあ、はい、ゆず」

「ありがとう」

ゆずは僕から渡されたお茶碗を大事そうに両の手を添える。

小波ちゃんにも御飯をよそって手渡す。

そして、二人は競うように御飯を喰らい始めた。個々におかずも分けてあるのだからそんなに急ぐ必要はないのに……。競争でもしているのだろうか、子どもは無邪気だ。

僕が彼女達在必死に箸と顎を動かす姿を観察していると、箸を一時停止させた小波が僕に疑問を呈する。

「あれ？ お兄ちゃん、その前にアンバランス ツインテールも学校あるよ」

「うへえ？」「え？」

御飯粒を唇に装備したふぬけたゆずと僕。

僕の箸からきんぴらゴボウが脱走した。そのきんぴらゴボウを空中で小波ちゃんの箸がくわえ込んだ。

「あ、お兄ちゃんの箸から逃れたきんぴらゴボウ、えいつ！」と、小さなお口にきんぴらゴボウは消えていった。「あむう、かんしえすうきちゅう」

もはや、何言っているのか、解らない。苦笑しつつ、僕は小波ちゃんに話しの続きを促す。

「どういう事です、小波ちゃん？」

「あれ？ 変だな、ママから聞いてない？」

僕と小波ちゃんは同時に頭を傾げる。

と、そのタイミングを狙ったかのように新品オムツの傍にある黒縁電話（あの全滅したはずのドーナツ型のダイヤルを回すタイプ）から、けたたましい音が鳴り響く。

「いつも気になってたあれは何だ？」

「ゆず、あれは電話って言って遠くの人と話す道具です」

「ふむ、勇者軍のヒューマンウオッチとか、いりゆの究極魔法 ストームラインと同じ効果か。ならばやることは——」

腰を落として、目線は黒縁電話。…… ってゆずは走るつもりなのか、まさか。

「——決まっている」

語尾を力強く発音し、それをスタートの合図とするかのように、陶器の美しい白のような美しい足が脈動する。

それを危機感、漂う視線で射貫く小波。

彼女も——

「させるかあああああああああ！」

——と、アパート中に伝わる叫び声で四足歩行の姿勢のまま、ゆずの走行予定ポイントへと飛び出した。

「にやあああああああああ！」

小波の妨害を気合いと共に、跳び箱の要領で小波の背に両手を添えて、小波の身体を突き放す勢いをバネにし、目的の黒縁電話の受話器へと手を伸ばした。

「やったあ！」

勝者 宮之ゆずには黒縁電話の受話器。

「ぐほおあ」

敗者 古瀬小波にはおでこと新品オムツタワーが、ごつつんこ」

「はい、絢ちゃんの妻 宮之ゆずです」

「油断大敵！」と、敗者は諦めずにトライ。そして、気の抜けたサイダーのようなあつさりさでゆずの手から、受話器は小波の手へと略奪された。「はい、お兄ちゃんの愛の奴隷 魔法少女 古瀬小波でーすう」

「……ママ」

ああ、電話の相手は小波ちゃんのパパ 古瀬津波だったようだ。色んな意味で小波ちゃんのテンションは急低下しているだろう。だが、彼女にも、そして、地団駄を踏むゆずにも……僕にはやらねばならない事がある。

二人にそつと、近寄って両手を駆使した同時ゲンコツを二人の頭に降らせる。

「お部屋の中で暴れちゃいけませんよ」
「痛い」

と言つて反撃してくるゆずの右足。なまじ、ゆずのいた世界が第二次世界大戦を遙かに超えた大量虐殺世界だっただけに……何らかの武道をやっていたらしく、普通の蹴りでも普通の小学生×2くらいの攻撃力がある。少し痛い……。

「お兄ちゃんの愛のムチ」

小波ちゃんは別の意味で強い。動物が甘噛みする程度の力でしか確かに込めていないが、喜ばれると、凹む。

気を取り直して、僕は小波ちゃんから受話器を受け取り、耳元に充てた。

「はい、お電話、変わりました。衣螺絢です」

「あ、絢君。そうそう、昨日、伝えるの忘れてた。今日から宮之ゆずちゃんは絢君の従妹という身分で金意かねい小学校に御転入、あそばれました。ぱちぱちぱち」そのぱちぱちが僕の開いた口が塞がらない、

を加速させていることにどうやら、津波さんは気づいていないようだ。「うん、あれ？ 絢君」

「感謝はしますけど、遅いですよ。まだ、ランドセルとか、登校用のお洋服とか用意してないんですけど……」

そう、保護者としてはゆずの晴れ舞台を新品のお洋服と真っ赤なランドセルで飾らせてあげたい。

僕は頭を抱える……。何とかならないか。

一人だけ心当たりがある。その悪友はカメラで写真を撮る事を趣味としていて、部屋には大量の小学生向けの洋服があるのだが……果たしてそれは新品なのだろうか？ 爛れたことに使われていそうだ。いや、あいつは純粹に写真を――

「ん、そんな気を負う必要無し、無し」

という妙に雰囲気のある声が僕の思考のループを止めた。受話器から、と思ったがどうやら、玄関の方だ。

びっくりという言葉がこれ程にまで合うシチュエーションがあるだろうか。

「だって両方とも私が持ってきたから」

と、津波が勝手に玄関に上がり込み、パンプスをその場で脱いでいるのだから。

「あれ？ 鍵掛かってたはずなんですが」

「ほい！」

娘の小波ちゃんと同じく、銀色に光る鍵は新品らしい光沢を放っていた。そして、スーツ姿の津波が右肩に背負っている真っ赤なランドセルと、小波ちゃんとお揃いのゴスロリ衣装が電話口で言っていたそれなのだろう。

「あなたも、ですか……」

そんな呟きと共に今、あることを思いだした。

あれは三日前だっただろうか、僕とゆずが古瀬家から部屋に戻る際に鍵を使おうとしたら、ジーンズのポケットにあるはずの鍵がない。それで鍵屋を呼んだんだっけ。

「返して下さい。その元になった鍵」

「ほい、ゆずちゃん」

ゆずに返す津波さん。鍵を一つ、僕が持っているのだから、それが妥当か。

今までのようにいつまでも隣でぶすくれている魔王幼女様に仕えている訳にはいかない。もう、春休みは終わり、これから高校生活が始まる。

僕はそれが泣きたいくらい、寂しいことに思えて、ふと……ゆずの身体を自分の両手で包み込んだ。僕の両手はゆず専用のマフラーみたいだね。

「ゆず、お着替えしましょうか？」

「うん！」

「あ、でも。パンツは今日こそ、自分で履きましょう」

「……いやあ」

「仰せのままに、魔王様」

誰もが願っていた。

あの桜の花びらのように儚い幸福であつても良い。

ただ、桜の薄桃色の美のように綺麗な時を過ごしたい。

だが、衣螺絢は知らない。

宮之ゆずは産まれた時から知っている。

それは……同じものを見ていても、感性と呼ばれるモノは人によって違ふことを。

邪悪が訪れるまで、牙を剥くまで、一時の幸福を善良な者は無傷で過ごせると思っている。

否、君達は幾千の邪悪に常に抱かれているのだ……。

シナリオ？　ターニングポイント　偉大なる歴史の変動者

僕の日常は魔王少女に完膚無きまでに破壊されたのだが、どうやら、それは僕の日常だけで世界はまだ、以前としていつもの顔しか見せない。

だからだろうか、少し眠い。

欠伸をすると、目から涙が零れた。これはセツトなのかなあ。

「よお、あつさん」

「やあ、しゅう」

空き地の廃棄されたジャンボジェット機を住めるように改造した住まいから、スキンヘッドの男がカメラを構えてこちらへとやってくる。

こいつは僕の悪友——北裏秀平きたうらしゅうへいという僕とは病院で知り合った。

とはいっても、何せ、秀平も僕も母親のお腹からこんにちは、赤ちゃんの状態だったわけで当時の事はてんで理解していない。

秀平は僕の右手と手を繋いでいる古瀬小波の顔に近付き、さも当たり前のように匂いを嗅いだ。

「おはよう、古瀬。今日も健康のようだ」

「スキンヘッド、殺す！」

秀平も懲りてないなあ、小波ちゃんちゃんは小さな女の子でも立派な女の子だ。匂いなんて嗅がれたくはないに決まってる。

匂いを嗅がれた代償として、小波ちゃんちゃんはとんでもないスピードで秀平の腹部に拳をめり込ませていく。

「死ね！」

「くお！」

１ヒット！

「学習力ゼロなの？　ハゲ」

「ぬお、た、たすけてえ、あっさん」

2ヒット……。

「いやあ、無理です。近づいたら僕が殺される」

「絢ちゃんはゆっちゃんを守る!」

「アンバランスツインテール……ああ、もう、呼びにくい!」

「ぬお、何故に俺?」

3ヒット……。4ヒット! 5ヒット!

「略してアンツインテールで十分よ! 吹き飛ばえええええ!」

「だから、何で俺?」

6ヒット! 目の蹴りが秀平の腹部を襲った瞬間、秀平は空の住人となった。秀平は後頭部から電柱に叩きつけられ、アスファルトへと落下した。

アスファルトに亀裂が走っていた……。その凄まじい破壊力にゆずが僕の隣で呻く。僕は? というと、この程度で秀平が死ぬはずがないので特にリアクションはない。

ほら、そうこうしているうちに秀平は生まれたての子鹿のように、全身を振るわせて立とうとしている。

「ちっ、死ななかったよ、あれ」

そう、舌打ちしていた小波ちゃんがこちらを向いた。驚いたことに舌打ちしていた人とは思えない爽やかな笑顔で僕に話しかけ始める。

「さっ、あんなスキンヘッドはいつものように放って、私たちはスクールライフ エンジョイ♪ てへえ」

「……は、はい」

「す、凄い、流石……魔法少女。ゆっちゃんにはあのような残酷極まる攻撃は無理だ。ううん、昨日、読んだマンガに出て来た魔王はあれ以上にグロだった。よし、ゆっちゃんも頑張ろう!」

なんか、ゆずが魔法少女に感化されている。ガッツポーズをして、自分に気合いを注入していた。昨日、某国民的レベルがちょー上がりにくいソフトのアンソロジーコミックを読ませたのがいけないの

かな。

ゆずの肩に手を添えて、鼻を近づける者がいる！

ゆず、危ない！　なんて言葉を述べる前に秀平は匂いを嗅ぎ終わる。相当、気に入ったのだろう、顔が気持ち悪いくらいニヤニヤしている。

「高貴な香り。うーん、これは英国貴族にも通じるなあ。うん、きつと、ドリルツインテール&通常ツインテールちゃんは魔王だと確信した」

「おい、何で匂いで解る……魔王だって」

と、僕が秀平にツツコミを入れている横でゆずは怒りに燃えていた。

「ぶ、ぶれいものおおお！」

ゆずの怒りは僕が見た中でもゆず激怒ランキングベスト1だっただろう。そんなゆずの行動は魔法少女さえも戦くものだった。

ゆつくりと木の棒を拾い上げる。そして、精神を集中するべく、瞳を閉じて――

「記憶呼应魔法　ロック解除。ゆっちゃんの匂いを嗅げるのは絢ちやんだけ。他は不可！」

木の棒が激しく、燃え上がる。どういう仕掛けか、解らないがこれも一種の魔法らしい。

小波ちゃんがその魔法の正体を――

「記憶呼应魔法で再現された火の上位魔法　フレイムコーティングの応用。防御に特化した魔法を攻撃に転用？　嘘……」

早口で呟いた。

その動揺した声を聞いて僕の好奇心は翼をはためかすことを止められないと判断する。

「それって凄いですか？」

「記憶呼应魔法？　でも、役立たずの異名のあれが？　嘘でしょう、十分実用レベル。しかも……直接、棒に触れている火力を弱火にして、強火と弱火の間にマインドエラーが……」

僕の質問を無視して、小波ちゃんは目を細めた。

ゆずはその間にも、両手持ちに変えた。

変えた瞬間、天を焦がす勢いで炎は空を目指す。上空十メートルの位置くらいまで炎の刀身は形成された。

「……やばいぜ。親父に連れて行ってもらった戦場よりもやばい……ぜ」

それでもシャッターを切るのだから、秀平は生粋のジャーナリストと言えなくもないが、誰から見てもその行為は無謀だ。

解る、あれを喰らったら良くて大やけど、悪ければ……焦げすぎた肉料理の一丁上がり。

「あ、あん、あんなの……聞いたことないよ……。あんなの、ほとんど……」

「小波ちゃん？」

「あん、あんなの反則。あのレベルで使いこなせるって、冗談」

自分の考えを否定するように小波ちゃんは短く切ったショートヘアを振り乱す。

「お兄ちゃん、魔王の使う記憶呼応魔法は五元素、空気・火・土・水・エーテルや魔王のみが使うことを許された闇だけじゃなくて、個人レベルの技も完全再現できる。危険」

「え？ どういうこと？」

「……魔法使いはみんな、究極魔法を究めることを目指しているんだけど、あれはその究極魔法を究めた者と親しくなれば、いつでも習得できるってこと」

「解説ありがとう、魔法少女。これがゆっちゃんの唯一、使える牙にして、記憶呼応魔法。親友の応用魔法 命炎剣めいえんけんを記憶から呼び覚ませた！」

「そ、それを俺にくら、喰らわせるの、冗談？」と腰を抜かす秀平。
「冗談？ 貴様は絢ちゃんにだけ許された権利を踏みにじつたのだ。これが我が国ならば、即刻、死刑だ」

と、威厳たっぷりと言ってみせるゆずだけど、僕はゆずの匂いを

嗅ぐ権利を与えられた覚えはない。与えられたとしてもそんな変態的な権利、願い下げだ。

火の粉が草を消滅させる。

一方、術者のゆずは火の粉に当たっても無傷だ。術者には通用しないのだろう。

小さな少女が身の丈の七倍以上の刀身を構える姿は壮観ともいえた。薄茶色の虹彩に殺気が在り在りと宿っている。

これは止めなければ、と無意識に身体が動いた。

何かが僕のワイシャツの生地に触れたような気がする。

「お兄ちゃん、駄目！ 迂闊にゆずに近づいちゃ！」

悲鳴にも似た危機迫る小波ちゃんの声。

「火の粉。うわぁ！」

身構えるがもう、襲い！ 火の粉が両手に降り注いだ。

……熱さを一切、感じない。両手は普段通り、肌色で火傷一つ、無い。

「あれ？ おかしい。火の粉が軌道を変えたのか？ ま、いいや」

「絢ちゃんが……ミクミお姉ちゃんと同じ？」

命炎剣を解いた放心状態のゆずを僕はぎゅっと、抱きしめた。

良かった、ゆずがゆず自身を嫌う状況にならなくて。

「ゆず、君はもう、誰にも傷ついて欲しくないんですね」

「あつ……ゆっちゃんは」

「怒るのは簡単です。怒っても良いんです。だけど、子どもみたいに怒ってはいけません。ゆずは人を殺せるだけの力を持っています」
両腕の中でいやいやをする幼女みたいにゆずがたじろぐ。

でも、事実を伝えてあげなければならない。魔法はただの力だったことを。

「強すぎる力は交通事故にも似ています。自分が予期しなくても力は違う方向に流れていってしまう」

「それ、怖い」

「ん？ でも平気です。交通事故だって気を付ければ減少するよう

に、ゆずも気を付ければ良いんです。良いですか？ 理性が制御できないくらい、怒りを感じたらまずは深呼吸ですよ。そして、決める、自分の選択をね」

こくりと、ツインテールな髪は下がり、また、上がった。素直になれた良い子なゆずの頭を優しく撫でて解放する。

「悪かったよ、やり過ぎた。えーと……」

「宮之ゆずだ。ゆっちゃんは魔王をやっている、宜しく頼む」

「ああ、俺は北裏秀平。たまに新聞社に請われてカメラマンをすることもある。将来の夢はジャーナリスト」

「カメラマンか……ではな——」

秀平の耳元で内緒話をするゆず。

なんか、羨ましい……。

「そんなことでチャラにしてくれるのか！ いいぜ」

「ほ、本当か？ やっ、やった！」

そう叫んでゆずはその場で盆踊りや社交ダンスのステップ混じりの小躍りを始めた。嬉しいことが僕の知らぬ、あの瞬間であつたらしい。

なんか、むかつく……。

と、秀平に肩を叩かれた。

「大変だな。あっさん、魔法少女や魔王幼女、その他諸々に好かれて。そのうち、幼女独り占め罪で逮捕されるぜ」

「何？ その犯例……有り得ないですよ。僕はただ、子ども好かれているだけです。ねえ、僕は優しいお兄さんでしょうか？」

「ああ、お前は残酷にまでに優しいお兄さんだよ。ところであの子のこと、説明しろよ。魔王って何？」

「あ、やっぱり、納得してなかったんですね」

北裏秀平と衣螺絢が話し込んでいる最中、ずっと、古瀬小波の頭には一つの存在が浮かんでいた。

ターニングポイント。

古瀬小波は母親から聞いたことがある。魔法の通用しない存在がいるとしたら、ターニングポインターくらいだ、と。

そのターニングポインターは所属する世界の理に影響するほどの存在で、一千年に一人出るか、出ないかの重要人物らしい。世界はそれを守るために、異世界の存在の攻撃力をターニングポインターは受け付けないというルールを打ち出している。その為、異世界の者が使う魔法はターニングポインターには通用しない。

先、火の粉が絢の両腕に触れても何ともなかったように。

「お兄ちゃんがターニングポインター。偉大なる世界の変動者様」

古瀬小波のお兄ちゃん大好きポイントはこの事実のおかげで二倍化された。尤も、ゲージは既に出逢った瞬間から振り切れているのだが。

ターニングポインター。その存在をゆっちゃんは苦い記憶と共に知っている。

異世界の者の攻撃は通用しないから、いつも、ターニングポインターであるミクミお姉ちゃんは十万の敵を一人で屠っていた。

敵は機械と人間の混合軍だったが、ミクミお姉ちゃんは治癒魔法に特化した魔法使いだった。いりゅのように強力な魔法も、トマのように力強い技もミクミお姉ちゃんにはなかった。

それでも闘った。心臓が貫かれようと再生し、脳が焼かれようと再生し、骨が折れようと再生し……流れた血は直ぐさま、体内でその分、調整された。それを何十万回と繰り返し、いつもミクミお姉ちゃんは独り、屍の山に座って……肩で息をしていた。

ターニングポインターでそれが可能だから……。

きっと、絢ちゃんはゆっちゃんを守ってくれるモンスターから、勇者から。

でも、勇者の持つ聖剣 アキシオンはターニングポインターでさえも殺す剣。

想像できる、自分が闘わなければ、きっと、代わりに絢ちゃんが

闘うだろう。そして、死ぬ。

「闘わなくちゃ……ゆっちゃん」

そう言葉にしたらただけでお腹が痛くなった。

解っている。この痛みがまやかしで、身体が闘うことはどういう事を招くのか？ と無言で説いていることを。

そう、誰かの死がそこには在る。

「闘うんだ、ゆっちゃん」

シナリオ？？　これが男の娘（こ）の日常です。

僕と秀平はゆずと小波を金意小学校に送り届けると、ゆっくり坂道を登り始めた。

坂道の中腹に金意中学校、坂道を登り切った先にある十字路を右に入って少し歩いた市民プールの隣にある金意高校。そんな立地にある為、学ランとセーラー服、ブレザーが仕切りのないお弁当箱のように入り交じっていた。

「おいおい、風情が台無しだぜ。シャッターを切る気にはこれではならんよ、ならん」

「しゅう、君のために世界は動いているんじゃないんですよ」

「ふふつ、ならば、動かすまでさ」

秀平は付近に建っている民家の庭から水道を拝借し、掌に並々注ぐ。

「何してるんです」

「まあ、まあ、見てなさい。チミに芸術を伝授してやる」

僕が訝る行動はまだまだ、序の口らしい。周囲の学ランとセーラー服、ブレザー諸君が生暖かい目でこちらを一瞥しては通り過ぎていく。

きっと、こう思われているに違いない。

「春だから出るよね、変態さん。しかも、あれ、ブレザーってことは金意高の奴って」

「俺に限ってはそうかもしれない」

と、言って秀平はアスファルトに窪みを見つけると、そこに水を注ぐ。

「どういうこと？」

「耳を傾けてごらん」

「え？」

秀平の助言の通りに耳に手を充てて、ダンボの耳のポーズ。

「あ、やっぱり絢お姉様だ。小さくて可愛いなあ。マジ天使」と、学ランをびっちり、着込んだ少年。

やはり、過去の傷跡は後世に残っていくらしい。頼むから、僕の心の傷だけに留めておいてくれ、なんて無理のようだね。

中学三年間、僕は女の子扱いだった。

小学校の頃は、女子に虐められて、本当にあれついてるのぉ？

って女子の集団が僕のブリーフを無理矢理剥がせた。おまけにこんな不自然だよって鉄で切ろうとしたんだ、女子の軍勢が。

……思いだしたら、寒気が。

「肩くらいまで伸びた髪の子。新入生かな？」と、ブレザーの少女が隣のメガネな少女に訪ねる。

「癖毛がチャーミングよね。次のプリンスはあの子かもね」と、メガネな少女が応えた。

「ってことは三年連続プリンスってこと。胸以外はプロポーズン良いもんね、あの子」

そんなブレザー少女に僕はツツコミを内面で吠える。

それでも、僕は男の子です！

「お前が思っている事を充ててやる。ずばり、それでも、僕は男の娘こです、だろう？」

「なんか、悪意をそこはかたなく感じるんですけど……しゅう」

「馬鹿な、俺は正直者の正義のスキンヘッドだぜ、よし。これで」と、掌に乗った桜の花びらがしゅうの掌から離れていく。すぐさま、カメラをしゅうは構えた。「ナウ！」

英語で絶叫するしゅう。

太陽の燦めきを受けてきらきらと水面が光り、その水面内に丸い太陽が佇んでいた。桜の花びらが水面にゆったりと触れ合い、波紋を描く。その波紋の影響を受けて、太陽は散らばった光となり、水面全体に光る波紋を描いた。

そして、まさにその瞬間をしゅうは激写した。

「うわぁ……綺麗ですね。さすが、スキンヘッド」

「それだと、俺のスキンヘッドが綺麗に思われるじゃねえか。照れる」

だが、世間とは慌ただしい変化を富む生き物だ。水面に浮かんだ可憐な桜の花びらをオートバイのタイヤが呆気なく轢いていく。そして、その余波を受けた水がこちらへと飛沫して、秀平は持ち前の運動神経で避けるが……僕は呆気なく、その水の洗礼を受けた。おかげでズボンがおねしょをしたみたいに汚れている。

キーーーーんと、けたたましいブレーキ音と共に岡持装備のオートバイは横滑りに停車した。

ノーヘルであることを何とも思わない憎たらしい笑みを浮かべるスーツ姿の女性がオートバイを押してこちらへと歩み寄る。

「すまん、女。職員会議に遅れそうだったんで急いでた。替えのヤツなら、数点、保健室にあんから失敬しよう」

赤髪のアスリートヘアに強そうを通り越したキツイ目付きの女性はそう、キビキビと話した。そして、これまた迅速に出前機をアスファルトに投げつけた。

岡持の中に入っていた鞆が覗いた。

「少年、それ、金意高の教員あさの 朝野恋れんの机んに追いとけ」

「先生はその子を？」

悪乗りして秀平は僕を男と修正せずに、恋先生の会話に乗った。悪いスキンヘッドだ。

「ああ、着替えさせないと、風邪引くだろう」

「いや、この程度では引かないと思いますよ。ただ、女子に引かれるだけですって」

「誰が上手いことを言えと言った」と僕のユーモア溢れる切り替えしを無視して、恋先生は荷台を叩いた。「乗れ、女。男に引かれる、その恰好」

「……いや、むしろ、男子に引かれるのは別に、です」

「何、お前、百合なのか！……気が合うぞ、じゅるり」

今、舌鼓を打った気がする。いやいや、仮にも先生だ。

僕はこの男気溢れる恋先生の提案を無言で荷台に載るという形で受け入れた。

「応えずとも良い。さあ、風になるんだ！」

「先に行つてますよ、しゅう」

遠ざかる秀平に手を振り、僕はそう告げた。

秀平も僕に手を振り替えしてくれた。

桜の花びらが僕の髪や肩に見事に、軽やかに、着地した。満点をあげたいところだ。

だが、そんな余裕もすぐに消え去った。

いつまでスピードをあげるんだろう？　なんて疑問は悲鳴に変わった。

オートバイという地に行く乗り物に乗っているのに、ジェットコースターという特殊なレールの上を縦横無尽に走る乗り物と同じ恐怖を味わっている。

今は一九九九年　四月七日。僕は軽く泣きそうです……。

予感はしていたんだ。女って言われた時から予感は。保健室で男だと、訂正したのに保健室にて――

「悪いが、それしかないらしい。怠惰だな、保健室のおばさん」

と他人事なのであっさりと恋先生は言つてのけた。

何十回目かの溜息を吐く。下がスースーする。女子はいつも、こんなのを着用しているのかと、スカートの縁を握り締めた。

「おい、いつまで扉の前で固まっているつもりだ。入学式が始まる時間になつてしまう」

近頃は僕の運は右肩下がりらしい。魔王少女のパンツを買いに行つたり（腹立たしいことにレジのお姉さんに「妹想いのお姉さんなんですネ」と言われた。）、モンスターに襲われたり（小波ちゃんが出来なければ死んでいただろう）、暴走オートバイのせいでズボン

どうしても、信じないようだ。

「嘘だろう？　女子中学生じゃないってことは女子高校生以外の何者でもないだろう」

「えー、あたしよりも可愛い」

「蒼い瞳に黒髪つてこんなにも似合っんだね」

と、口々に言う生徒達。

僕の容姿を褒めまくる彼らの言動に僕の怒りは収縮した。褒める人間を責めるのは僕のポリシーに反する。

ガヤガヤと、喋り始める生徒達の頭上をパンパンと、拍手する音が通り過ぎていく。席を周りながら恋先生は叫ぶ。

「諸君には悪いけど、衣螺絢君は立派な男の娘だ。さて、諸君、絢君で遊ぶのは入学式が終わってからにしてくれ！　良いかな？」

「はい！」

と、生徒達は実に聞き分けよい返事を返した。そろそろと廊下に移動し始める。

「僕は高校でも女の子扱い……」

すっかり、空っぽになった教室内にその声は虚しく響いた。

整然と並ぶ机はどれも傷一つとしてない新品だ。自分の席の机をさつと撫で、ナップサック（入学式なので荷物が少ないから）を机の脇にあるフックに掛けた。

春休みの間、箆笥の奥に仕舞い込んであった龍の形に彫られたルビーのブローチをブレザーの上からそつと、包み込んだ。

このブローチは霸王の証という仰々しい名称が付いていて、女優ルビー・サーマの家系に代々、伝わっている夢を叶える効果があるらしい。

眉唾物だが、母は真剣な眼差しでこう言っていた。

良い？　絢たんが大勢の人間がいる場所に行く際は必ず、それを身に付けなさい。良いこと、アリアリだから、と。

遠い異国の空にいるであろう行方不明の母に僕は文句を言う。

「全然、良いことないです、母」

ゆっちゃんはクラスメート達に紹介されて席に着く。

クラスメート達は感じの良さそうな連中だと予想されるが、隣の席にいる物体だけはいただけない。

その物体——古瀬小波もゆっちゃんと同じく、隣の席にいる人間を見て、

「げっ……こいつかよ」

と絶句した。

何の因果でゆっちゃんと小波が隣席しているのだろうか。誰かが因果を手繰り寄せたとすれば、あの教師だろう。教壇に立ち、生徒に春休みはどうだったかな？と聞いているわざとらしい笑顔を貼り付けた教師を睨む。

教師はこちらの殺意に気付いていないようだ。面白くない。

小波と隣席になるという不幸があつたが、ゆっちゃんにはまだ、給食という希望がある。マンガで読んだ給食のシーンは級友と語り、御飯を食す暖かいシーンに見えた。まるで魔王学校に通っていた時の昼食のようだった。

あの時は手で食べるって事を知らなくてフォークとナイフ、フキンの重装備でサンドイッチに挑む姿を級友に笑われた。今はもう、遠き幻のようだ。

「魔王様。溜息吐いたり、笑ったり、溜息吐いたり、とるさいんですけど」

小波はそう言うが、ゆっちゃんの行動程度では迷惑にならないと思う。クラスメートはほぼ全員、教師の話に耳を傾けず、それぞれが思い思いの事をしていた。

「小波、給食は何時くらいだ？」

「はあ？」

「だから、きゆう——」

「ねえーよ」

「それはゆっちゃんに飢え死にしろって言うのか。無礼者の殿堂入

りを今、小波は果たしたぞ、喜べ」

「ちっ、始業式やって、掃除したらもう、下校なの。喰う必要ないの」

「な、何……楽しみが先延ばしだとお。泣きそうだあ……」

給食のために御飯のお代わりを四杯までに留めておいたゆっちゃん
の努力が報われない。そう思うと虚しくなった。

心にすきま風がびゅーびゅーと吹いている。

シナリオ？？ 闘う強さ、闘わない強さ

長い黒髪が頬を撫でる。

私の生を風よ、さらっておくれ。

と、願ってみても結局、私は命を奪われる段階になると、怯えて惨めたらしく、助けてください！ と請うのだらう。親友の明菜のように。

明菜は世間的には正しいことをした。非公式の魔法少女の率いる部隊が決起することを魔法省のあるクリスタルパレスに密告しようとした。

明菜は言っていた。

「せめて、最期は人間らしく……生きたい」

って、それが骸骨のまま、冷たい床に晒されること？

「……私達は世界にすら、捨てられた棄て児なのよ、所詮……明菜」
手筈では午前十時頃に浦片みくと同時に、魔王と大魔王を襲撃する。魔王は殺害しても良い。しかし、大魔王は明日鳴厘の目的のために確保。

「私は……魔王の方が。眠れる獅子を起こすかもしれない大魔王よりは気楽ね」

金意小学校の屋上で、三年三組に所属している仁良くもりは平和という水槽でしか生きられない同級生達を俯瞰する。

彼らの話しは実がない。サッカーをしないか？ と放課後の予定を話し合いつつ、箒で無駄に同じ箇所を掃くもの。サッカーをして何になる？ キック力の増強か……。それならば、サンドバッグをひたすら、打ち込んだ方が効率的だ。

「全く、二年前にこの世界が変わったって言うのに餓鬼は無邪気だ。生きる価値がないゴミなのよ、あんたら。……私もそうだけど」

一九九七年 七月十日。その日は三十七度の猛暑日で日が沈んでも尚、温度は下がらなかった。記憶に残らないただ、通り過ぎるはずだったその日に……モンスターが金意市に初めて出現した。

それを予想していたように魔法省がピンポイントにその出現ポイントに現れた。当たり前だ。偶然、大魔王をモンスター達が襲い、大魔王を常に影から守っていた魔法省がそれを許すはずはない。

それから遅れる事、十五分……。地球上に在るあらゆる国々にモンスターは出現した。彼らが何処から来るのかは未だ、解らない。そして、解らぬまま、現在もモンスターは人間達の営みに深くその牙を剥けている。

だが、例外も存在する私達、召喚魔法を使う者。モンスターを唯一、奴隷として使役できる存在。

モンスターの飼育の為に明日鳴厘が借りているビルの方角に向けて、私は言葉を内在させた口笛を吹く。

——さあ、手筈通り、お前達はこの小学校の生徒を喰らうといいな。に、遠慮はいらないよ。柔らかなショタ肉と、ロリ肉のサービスだ。

「さて……可愛い、可愛い奴隷達がお返事するまで私は待機。ふっ奴隷？ それならば……」

「私は明日鳴厘の奴隷か……」

もうすぐ、掃除の時間が終わり、生徒達はいつものようにランドセルを背負って帰宅できると思っているだろう。

明日鳴厘ならば、モンスター達が生徒を食べる瞬間をその場でしやがんで観察するだろう。彼らの恐怖を食べる為に。

私はそういう悪趣味な趣向はないが……どうせ、時が全ての生を奪っていく。みんな、私のようにただ、死ぬことが怖いんだ。

だから、私が引導を送ってやる。

「後、十分の命を享受しな」

掃除が終わってゆっちゃんは帰ろうと、下駄箱の前まで来ると、

先客がいた。三年三組の生徒が靴を入れている下駄箱の前だ。

「いの一番にダッシュしてきたから……ゆっちゃんが一番乗りだと思っておったのに。さすがは古瀬小波」

やはり、ゆっちゃんの完全同位体である衣螺絢に懸想を抱いている小波をゆっちゃんは少し気に入らない。

でも、嫌いにはなれない。もっと、嫌うべき人間は他にいる。

ゆっちゃんのパパ——先代魔王は歴代魔王の中でも政治力に関しては才があつた。だが、その先代魔王の力があつても人の心は変えられない。

折しも勇者との戦争を何十年と繰り返してきたのだから、魔王軍の加護を受けられない農村もある。それくらい、戦力は疲弊していた。そんな環境で暮らす者達はより弱い弱者を虐げるようになる。勿論、例外は存在する……。だが、大半は嫌うべき人間になつてしまつた。

——お腹が空いてしまったんです。子どもの肉は柔らかいねえ。

——野兎を殴って何が悪い！ どうせ、こいつらは俺達に喰われる為に存在している。

——敵軍の兵士を虐げるなど！ 姫様はお優しい。あなた様には脅威にならないってんだろ！ 勇者軍なんて。ぜひとあなた様の代で木炭にでもしてください、あんな連中。

——金なんてもう、意味がない。んだったら、どうやって洋服や酒、おまんまを手に入れるんだよ。黙ってたって手に入る姫様よ？

全て、ゆっちゃんがミクミお姉ちゃんといりゆと一緒に遠足に行った道中に言われた言葉だ。そう、子どもの遠足すら許されない時代だった。それをあの当時のゆっちゃんは知らなかった。今みたいな大人になりきれていなかった。

奴らの目は一様に生氣のない諦め一色の顔色をしていた。生きながらに死んでいる。そんな言葉がびつたりだ。

下駄箱の影から、小波の様子を窺う。やはり、小波も奴らと同じ世の中、何も変わらないって言いそうな顔をして、こせ こなみとネームテープが貼ってある下駄箱の中を覗いていた。

小波は口を硬く閉じたまま、のろのろとランドセルを床に降ろす。ランドセルから業務用のゴミ袋を取り出し、金色に光る針のついた何かをその中に入れていく。

ガサガサと針のついた物体達が互いに身体を擦り寄せる音が冷たい空気内で、爆ぜる。

ゆっちゃんはその針のついた物体を知っているような……。うーん、絢ちゃんの部屋や、託児所 友達百人できるかな？ で見たよ。うな。

「魔王様、ちよつとはこの世界について勉強したら？」

「気づいていたのか」

見つかつていたのでは隠れていても仕方がない。ゆっちゃんはツインテールを指で弾きながら、小波の背後から業務用の袋を覗き込む。

「小波んは魔法少女よ。マインドエラーを絶えず、微量に吸収している未熟な魔法使いっていったら……アンバランス ツインテールしかない……はぁ」いりゆと同じ事を言う小波は深く溜息を吐いた。「で、これは画鋏。本来の使い方はこうやって運動靴を履いたところをグサツみたいなアイテムじゃなくて。あああ、もう、ウザッ」運動靴の靴底に刺さった画鋏を引き抜いて、作業用の袋に投げつける。「モノを掲示する際に落ちないように固定するアイテム」

「そうか、一つ賢くなった。礼を言う」

「私に礼？ あんたが冗談。解ってる私とあんたは一人の男を取り合うライバルなの」

同情する気？ と今にも食いかかりそうなきつい目でゆっちゃんの表情を射る。

同情なんてさらさら、する気がない。普通にゆっちゃんは話しかけているだけだ。

「小波は絢ちゃんがないときつい」

「当たり前でしょ、あれはお兄ちゃん専用人格」

なるほど、だから、学校にいる間は一言も、誰とも関わらなかつたのか。ということは普段のハイテンションな方はイレギュラーか。「小波はやはり、報復するのか？ それとも誰かに八つ当たりするのか？」

今の小波は憎まれ口を叩く元気を取り戻しているが、一瞬、ゆっちゃんは小波に嫌うべき人間の気配を感じた。そういう危ういバランスの上に立っている古瀬小波の意志を聞きたくなった。

小波は業務用のゴミ袋の口を二重に縛る。ランドセルを背負いながら、あっさりと口を開く。

「あのね、私やあんたが普通に闘ったら、虐めっ子即死。誰でも解ることでしょ？」

「法律云々の話しをしているのではない。ゆっちゃんの世界にはやられ、やり返しの日常がそこかしこに溢れていた」

「……もう、止めなさいよ、そういう後ろ向きな考え。あんたを狙う勇者だって異世界までは着いて来れないでしょ。世界を渡る究極魔法なんて使えたとしても早々、成功する代物じゃないの。あんたがここにいるんだって奇跡なんだから」

「それよりも小波——」

「魔法少女 古瀬小波も墜ちたものだわ。疑うの？ お兄ちゃんの嫌いな暴力を、自分は正当だ！ って叫ぶのに使わない。それにあんた以外、この小学校にいる連中は屑ばっか。人間が蟻を気にして歩くと思う？」

そう言っつて、小波は業務用ゴミ袋を引き摺りながら、歩き出すが……何かを思い出したのか、止まり、ゆっちゃんへと視線を向ける。「アンバランス……あつ、言いにくい。もう、これ止め。魔王様、焼却炉に蟻の糞を始末してから、で良いなら、あんたを家まで送り届けるのも……」

「ありがとう！ 小波。ゆっちゃんはお前を好きになれそうだ！」

「ふ、ふん。べ、別にあなたのために言ったんじゃない。ここで魔王様に取り入っておけば、好感度アップするに違いないし。きつと、後でお兄ちゃんにありがとう、僕の小波」って感謝され……ん、ん、そう言うわけだから来るの、来ないの……。え……ちつ、やっぱり、昨夜のは普通の……」

急に小波が顔色を変えてフロント硝子を見据える。その表情は……。

「小波、お手洗いか？ ゆっちゃん、待ってやるから行って来い」「あんた、本当に魔王様……読めないの？ 凄い膨大な数のボディエラーが近づいてくる。モンスター？ でも、モンスター一体分じや……ない。これは百体分？ 戦争でもする気！」

上階から子ども達の悲鳴が聞こえる。みんな、痛いよと泣き叫んでいる。

何だ！ と小波に尋ねるより先に、それをもたらした軍勢の姿がグラウンドを駆けてくる異形の者が確認できる。その異形の者は教師や生徒を喰らってこちらへと目指してくる。

昨夜、絢ちゃんを襲ってきたベンガルソードタイガーや、コウモリ、巨大ネズミ、驚などの形をしたモンスター。

「こんなにも早く決起するなんて……。魔法省の討伐チームを恐れているんだろうけど！ 魔法少女 古瀬小波は一騎当千！」

と、小波が腰の横付近の中空をぎゅっと握もうとした。

自信ありげな魔法少女の顔が一気に泣きそうな顔になった。

「小波……ゆっちゃん、しーつもん！」

拳手をするゆっちゃん。

「……言いたいこと、解る。杖は？ ボディエラーを詰め込んだ瓶は？ でしょ。ねえーよ、忘れたよ。ピンチ」

「こんなにも早く決起するなんて……。魔法省の討伐チームを恐れているんだろうけど！」

魔王美少女 宮之ゆずは一騎当億！

「真似するな。しかも、さり気なく図々しい！」

小波の応援をBGMにしつつ、ゆっちゃんは闇打つ鼓動を呼び出す。

ただ、来い！ と念じるだけで、ゆっちゃんの身体から黒い霧が生じてそれが両掌に集まり、構築されていく。

鎌の形状をしたどす黒い魔法の杖兼、武器がゆっちゃんの掌に収まった。

手の震えが、足の震えが止まらない！

だけど、小波を、みんなを、守らない、と。

「もう、亡くすのは懲り懲り！」

シナリオ？？ 死が二人を別つまで、その想いを秘して守るから……

俺は隣を歩いている女にしか見えない男の娘——衣螺絢を愛している。

愛っていうと大層なものに聞こえるだろう？　きっと、俺と同じ高校生が考える愛なんて言葉とは違うんだ。

俺のは……こいつが他人とは思えない。もう一人の自分に感じてしまうくらい近くにいることが当たり前な愛。アガペーも、エロスも含めた愛なのだろう。

絢が蒼い瞳をこちらへと向ける。何か、用か？　と俺が尋ねる前に彼女の口端が可愛いアヒル口を作る。

「しゅう、頭の上、頭の上。それ、河童ですよ」

「ん？　河童？」

仕方ないなあって微笑む絢は誰よりも女らしい母性を秘めている。こいつは自分が子ども達に好かれる理由が解らないと言っているが、こんな微笑みを見せられたら、こいつは自分を傷つけないってアピールには十分だろう。

子どもはまだ、一般常識を兼ね備えていないから野生に近いのかもしれない。

絢の人間国宝が創造したような穢れ一つない指先が淡いピンク色の花びらを掴んでいる。ああ、桜か。これが俺のスキンヘッドに乗っていたのか。

河童か、笑える。

爆笑して良いと、俺の笑みで察した絢は口を両手で隠してお上品に笑う。

坂道を下り、絢がよく、買い物をしている丸井商店街に差し掛かる。絢の目つきが変わる。可憐な顔が真剣みを帯びているのだが……

…そこは童顔な絢。縫いぐるみが真剣な顔になっているような感じだ。

全然、迫力がない。

「ねえ、しゅう。お願いがあるんです」

「へえ？」

「真剣に聞いて下さい。貧乏人にとってはここは戦場です！ 死闘を毎日、繰り広げています。そこで最初の激戦地はここです！」

俺の顔を覆うようにスーパールのチラシが俄然、視界に飛び込んできく。あまりに近すぎて文字が認識できない。近眼の人でもこれはきつい。

「ち、近いぜ、絢」

「スーパ― ヒロシミサエのチラシです。今日はお一人様一点限りで挽肉が普段より十円安いです！ どう、凄いです」

「……ああ、す、凄い」

そう、俺が同意した途端、嬉しそうに肯く絢を見ると、罪悪感を覚える。俺も親父と母がアフガニスタンに撮影に行っている事情もあり、現在は一人暮らしなのだが……食い物は適当にカップラーメンで済ませている。さすがに、俺もただのカップラーメンとは思、ラ王を食べているが。

そんなずばらな俺だ。勿論、絢の言う十円の価値をほとんど、理解していない。

「嘘でも僕に同意してくれて嬉しいですよ」

ほら、見破られた。先にスキップして先行していた絢が、振り向き様に俺に言った。

背が低く、小学生に見られがちな絢と俺が並んで歩く。

いつものように買い物帰りの主婦や暇な大学生が絢の顔をちら、ちらと眺めてはまた、二度見する。その度に苦笑する絢。

確かに絢の容姿では見るな、というのが拷問だ。ブレザーに触れている柔らかそうな髪なんて触れて、思わず鼻に近づけたくなる。そういうレベルの可愛いさだ。

そんな可愛い男の娘と共に目指した最初の激戦地　スーパー　ヒロシミサエは二階建てのこちらでは割と大きい店だ。

昼前の時間帯だから、混んでいる。こうなれば、階段の方が早い。そう、判断した俺は無理矢理、絢の手を引っ張って階段へと誘う。

「あの……ゆつくりで良いですよ。しゅうのお蔭で挽肉が二パック、手に入ったから」

「そうか？　他に買うものだってあるんだろう？」

「二階の書店でゆず用に参考書を」

「ああ、ゆず用って……まだ、小学三年生だろう？　そんなガッツリ勉強する必要ってあんのか？」

「ゆずはちよつと、事情があって今まで学校に行けなかったんですよ。だから、これから強制的に猛勉強させます」

怖い。絢の笑顔が怖い！

逃げてゆずちゃん！　と叫びたいが……そのゆずちゃんは今頃、掃除をしていることだろう。

ふし書店が見えてきた。マンガコーナーには沢山、人が集まって大盛況だが……小説コーナーには人があまり、集まっていない。

活字離れと叫ばれている昨今だが、その縮図を垣間、見た気がした。俺も……文字を見ただけで吐き気と目眩がするのだが……俺はそれに堪えて知識を蓄える必要がある。

俺の隣でどの参考書が良いか？　をリサーチしたメモに目を落としている絢と同じ大学に行く為に。傍にずっと……居続ける為に。

絢がメモをポケットに仕舞い、ふし書店に入っていく。

「俺はそのベンチで待っているぞ」

「あ、解りましたよ」

自動販売機で缶コーヒーを購入して、ベンチに座り込んだ。

こうして、見回してみても、モンスターとやらが出現してからも周囲は全く変わらない。リュックサックを背負って走る男の子、その後を追う母親らしき若い女性。

そついう光景を見ると、目を細めてしまつ。守るってこついう事

かつて。

俺はあの時から自分に問い続けている。

また、絢がモンスターに襲われたら、お前は守れるか？

二年前の七月十日。その日は猛暑日だった。絢が熱を出して倒れて少し、保健室で休ませてから俺が背負って下校することにした。

「絢？」

と呼びかけても返事がない。耳をすませてみると……熟睡しているようで寝息が聞こえる。幾分か、穏やかな寝息だ。

頬を綻ばせながら、二日前から絢が部屋を借りているメゾンNO ZOTUKIへと急ぐ。

だが、三十分も絢を負ぶっていれば、疲れる……。例えば、体重が女子よりも軽いとしても人間一人の重さは大した重量だ。

空き地を見つけて、絢を両手で抱え込んで座る。

青い、青い空に一条の白い線が延びていた。飛行機が描き出したアートだ。

空は遠い。けど、天国はもっと、遠い。そう、感慨に耽ってしまつたのは絢の瞳に涙が溜まっていたからだ。何も眠っている時まで……涙を無理しなくても良い。

昔から絢は頑固者だった。普通、頑固者というのは自己中心的に、だが……絢は違う。他人の為に頑固になれる男の娘なんだ。

きつと、自分が深く、悲しんだら……周りにいる人間に悲しい想いが伝染するからか。

感情を共感してしまう。そんな現象は世界にありふれている。それは悪いことじゃないと俺は絢に言いたい。こいつが俺にもっと、弱みを見せてくれれば！

きつく歯を食いしやる。

「俺は……なんて弱い人間なんだ。一体、いつになったらこいつを背負える」

その言葉は虚空に散るだけで何も意味をなしえない。そう、解つ

ていても猛る弱い力。

ふと、顔を絢から違う方向へと向けると……そこに不思議な歪みがあった。

何か、階段？　のようなものが見える。

「なんだ、あれ？」

その階段を軸として、様々な色の糸が循環している。

歪みを通じて、こちらにも糸が侵入してくる。その糸が無数に絡み合う。ありとあらゆる箇所での現象が生じる。

俺はそれを見ていることしかできない……。いや、人間が手を出せる領域じゃない。

身体が震えている。身体が訴えている。

ここから逃げる。さもないと、お前も……絢！　も死ぬぞ、と。

「けどよ……動かねえんだよ、足が！　手がよ！」

こんな不思議な状況になっても……熟睡している絢。父親が死んで葬儀やら、アパート探しやら、バイト探して忙しかったのも解るが――

「今はお眠りタイムな場合じゃねえ！」

やがて、糸は物体となった。それはどれも巨大なネコの形をしていたが……凶暴な形相で金意市を包むような咆吼を上げた。

――ウギヤアアニヤアー――

逃げるという選択肢は無くなった。逃げ場はない。ありとあらゆる場所に巨大ネコが溢れ変えている。

一匹が走り出して、路上駐車してある自家用車へと突っ込んだ。フロント硝子が衝撃により、割れて車体が凹んだ。

「ふ、普通のね、ネコじゃあねえだろう。ファール先生びっくり」

普通のサイズならば、さして脅威にならないネコ達だが、民家と同じくらいの背丈となったネコ達は辺り構わず、暴れまくる。

電柱を頭突きで横転させ、そこら一帯の電気の供給が停止する。

逃げ回る人々が数人、足を取られて転ぶ。転んだ人間を毛糸のよ

うにころころと転がす。尋常ではない圧力に屈して、人間の肉が下ろし金に下ろされたように肉塊が辺り一面に散らばった。

そこには悲鳴も無く、ひたすら、怯えた呼吸音しか聞こえない。弱々しいそれは助けを請うている……。

だが、誰が助けられるっていうんだ！ あんな化け物！

俺は絢の柔肌を抱き寄せた。ネコ達の細い瞳がこちらへと一斉に向いた。

周囲の建物はネコの爪で半壊し、そこら中に……朱い布きれが散乱している……。そこには息づいているモノはいない。

次はお前達だ！ と叫ぶようにネコ達は咆吼する。

「ば、化け物……」やっとの思いで出た台詞がそんな間の抜けた声だ……。絢の髪を撫でた。勇気が出た。「守るんだ！ 守らなければ、俺が俺ではなくなる」

学ランを脱ぎ、絢の頭の下にひいた。

走る。産まれた頃から好きだった……。いや、産まれる前から好きだった絢は俺の背の後ろにいる。

拳に力を込める。同じ保育園で約束した。おおきくなったら、けっこーおしよつ。あの頃は教養なんて鎖で社会っていう電柱に結ばれていなかったから、純粹に想いを口に出来た。はい！ って。

一匹のネコも俺の殺意へと向かってくる。

両足に力を込める。ああ、死が大口を開けて、牙を保って歓待してくれている。

「でもよお。俺は好きな女がむざむざ、殺されるとこなんて」ネコの額に拳を振り上げる。「見たかえーんだあああああああああ！」

後、少し。後、わずか！ その距離を逃してくれる敵ではなかった。

死の扉が拳を呑みこんだ。慌てて、腕を引いた。掌が消失していた。腕から先は血管と、骨、僅かばかりの血肉が付着していた。

ぼつ、ぼつと血が地に伏すのを許さずに、ネコの爪が俺の身体を

吹き飛ばす。

浮遊感……。一撃も……喰らわせることが叶わないまま、死ぬのか！

悔しかった。けれど、口には窒息しそうなほど……血液が集まり口さえ開けない。口の端から暖かい液体が流れている。きつと、涎と血だろう。

地面に叩きつけられた。息が止まった。

視界も、触覚も、痛覚も、死に備えて徐々に消失していく。残るは聴覚のみ。

ネコが砂を蹴る音。新しいオモチャの出来上がり♪ とばかりににやーと他のネコに来いよとご招待。

ああ……最期に絢を逃がしたかった。俺はどうだっていい。神様、少しで良い。時間と力が欲しい。力が欲しい！

太陽の光さえ……俺にはもう、届かない。

ネコが走る音が止まった。

終わりが始まる。

——ウギヤアアアアアア！

それは俺の口から飛び出した悲鳴じゃない。ネコ達の口から飛び出した声。

「あら、あら、ボロボロねん。ここは私に任せなさい。魔法少女古瀬津波に」

視界は皆無だが、微かに聞こえるその声は俺の親父の友人である古瀬小波さんのモノに間違えはない。

「あ、あんたは……、つ、津波さん……」

「痛い、痛い、とんでーけえ♪ 記憶呼応魔法 リターンブレイン」

そんな緊張感のない声がした後、身体がほんわりと暖かくなり、全ての感覚が蘇ってきた。だが、そこに在るはずの痛みはなかった。気づいたら、衣服も身体も完璧な自分がただ、地面に寝そべっているだけだった。

「津波さん、あんた、一体？」

身体を起こし、そこにいたはずの津波さんを探す。探している最中、人間ではない先程の巨大なネコが胴体と首が分かれた状態になっているのを発見した。

それを成し遂げたのは、今も成し遂げているのは、古瀬津波を中心とした十代くらいの女の子達だった。

津波さん以外は巨大なネコに対して互角に戦っている。彼女たちが危なくなると、津波さんが圧倒的な力で助力した。

彼女達の武器はアスファルトに包まれた拳や蹴りのみ。どういう原理でアスファルトと融合を果たしているのか、解らないが。その闘い方は集団で獲物を襲うスズメバチの群れだ。

一体の巨大ネコが無邪気に何も知らずに眠っている衣螺絢へと迫る。

「ま、間に合わねえー、ちくしょう！」

巨大ネコと並走するように津波が走り、巨大ネコが津波さんの姿を確認しようと……顔を向けた瞬間、津波の手刀——アスファルトの剣がその首を切り裂いた。

意志を失った巨大ネコの身体はその場に崩れ落ちた。

津波さんは俺にピースサインを向けた。

か、と思えば、ミリタリー映画に出て来そうな上官のように部下らしき女の子達に対して叱咤激励を送る。

「殿原の私兵！ 我らは大魔王 衣螺絢様の剣であり鎧なり！ 大魔王様に仇成す存在は塵芥残してはならん」

「はい、殿原の女王にして魔法省の副大臣 殿原胡桃様」

一人の部下がみんなを代表して、上官？ である古瀬津波に応えた。

これで彼女たちの服装が軍服ならば、戦場の臨場感みたいなものもあり、そしてここにカメラがあったのなら、絶対シャッターを切るだろう。

しかし、ここにカメラはないし、第一、彼女達の服装は皆……ウ

エディングドレスのような服装だ。恥ずかしくないのだろうか？
と俺は熱い戦闘を繰り広げる彼女達に対してそう、感じた。

死にそびれて緊張感が切れたようだ。

「胡桃？ 津波さんだよなあ」

「いい女は色んな顔を保ってるの。でも、秘密だぞい」

そう津波さんが言い残して、また少女達の輪の中に入っていく。
死んだ巨大なネコの遺体は数分、間もなく……液状に変化した。
その液体を少女達は瓶に詰めていく。一体、何の意味があるのか？
皆目健闘も付かない。

全ての巨大なネコが液状と化すにはあまり、時間が掛からなかった。
いつの間にか、津波さん以外のウェディングドレスを着た少女達の姿が消えていた。

強い……強すぎる……。これだ、これがあれば、絢を守れる。

俺は津波さんの足下で土下座をした。

「お願いします、津波さん。俺にそれを教えて下さい！」

「これって……強化魔法 コーティングを。無理無理、うちの小波
んだってやっと、習得した小波んにとっては奥の手だよん」

それでも、俺は頭を上げなかった。

「お願いです、俺！ 俺、絢を守りたい！ 自分の力で」

「無駄よん、あなたと絢様は住む世界が違う。このまま、何もなかったら、高校卒業後、私達、御三家が支柱に収めておいた世界を支配して貰う役割があるからん」

「……それでもっ！」

「あまり、うるさいと、しゅうちゃんでも消し炭にしちゃうぞ」

ジョークのように聞こえる口調だが、それを言う津波さん自身にはとんでもないオーラが漂っていた。

これはジョークではない本気だ……。

あの時、津波さんに楯突いていたら……ここにはいなかっただろう。その事実ですら、情けない。

缶コーヒーの缶を捨てに俺は席を立った。

その時だ。階下から人の悲鳴と、人が移動する騒音が店内に響く。手摺りを握り、下を覗く……。

そこには和服を着た小さな女の子がベンチの上に仁王立ちしていた。

女の子の持っているのは豪華な青い宝石の付いた杖。そして、そんな女の子の周囲には老若男女、数人が背中や頭、腰に火を点けたまま、逃げ惑っていた。

その中の一人がカーペットを見つけて転がってみるが……背中の火は消える気配を見せない。

「残念……。魔法の炎はマインドエラーやボディエラーの威のあるモノでしか消せない……」

その声に抑揚や感情はない。まるで人間に似せたロボットの声のようだ。

頭が燃えている老人が女の子に声を掛ける。

「逃げなさい。ここは危ないよ!」

「止める! そいつがその炎を点けたんだ! そいつが魔法で! 俺達の世界では考えられない常識で!」

自分の命を諦めたというのに、他者の命を心配している。そんな老人に対して俺は迂闊にもアドバイスをしてしまった。

ゆっくりと、おかっぱ頭の少女の視線が俺へと向けられる。そして、目線が合った。

それだけで解る。今、俺はこの少女の獲物として認定された。

「魔法? を知っている……。敵発見。魔法省か? 大魔王関係者の可能性大」

シナリオ？ 幸福の在処

勇者……。それは私にとっては罪の証でしかなかった。そう、気づいたのは異常ではない日常を手に入れたからだろう。

桜の花びら。私の掌にある桜の花びら……。千切れてしまっている花びらがまだ、桜の樹に在りし姿を想像する。

きつと、そこで私の経験したことのない親のような優しい温もりを栄養にして、すすくと風さんと遊んでいた事だろう。

おかしいなあ……。剣しか使えない人間がこんなしょうもない空想に浸るなんて。

花びらをこんなにもじつくりと見たのはいつ、以来？

「あ……」

可笑しく思わず、口元が綻びた。

私の普段とは違う表情に気づいたのだろう。桜魔が私の顔をちらつと、盗み見た。

男ならば、堂々と観察すればいい。まるで剣と剣を対峙させて、敵の見方を鋭い眼光で窺う武将のようなことを……。

「桜魔？ 桜魔！ そういう女々しい真似をするなよ」

「ほい、ほい。ただ、剣を持っている最中のお前の顔より、今の乙女チック全開です！ みたいな愁いの表情？ の方が俺は好きだなあってちらつと見てただけですうよーだ」

「……素直で宜しい！」

と、桜魔の背中を弱く叩く。

何、遠慮してるんだよ、と桜魔は目を細めるが……。その抗議には乗らない。彼の身体は既に柳のような細さにまで痩せ細っている。触れただけでどうにかなくなってしまいそうな肩にはギターケースの持ち手が食い込んでいた。贅肉がほとんどないので……。痛々しい。

痛々しい？ 誰かに対してそう、心配の念を抱くのは……兆詩ほのかを殺して以来だ。

「ねえ、桜の花びらが美しいって思ったことある？」

もう一度、桜の花びらを眺めつつ、私は実に軽いノリで桜魔に尋ねた。だが、内心、自分の感情は他者と比べてどうだろうか……急に不安になった。

「あん？ それがどうしたよお？」

「私は初めて、桜の花びらに目を止めて、美しいって思った。こんな小さな花びらでも生きているんだなあ……ってしみじみ……」

「なあ……。まだ、ゆずちゃんを殺すつもりでいるのか、勇者様……音？」

魔王 宮之ゆずの名が出る度にこの頃、私は躊躇する。私が聖剣技を使えば、確実に仕留められるであろう魔王は例えるならば、手の中にある桜の花びらと同じ儚さだ。

私の手中にある咲いたばかりの薄桃色の花びらを試しに握りつぶそうとした。

花びらが殺意の影に包まれ……。

「にやあああ！」

指先が止まった。

突然、耳に入ってきたその子猫の如き悲鳴の先に視界を向ける。

魔王 宮之ゆずと同じ年くらいの七歳だろう？ 女の子が体育座りしていた。

それだけならば、私も知らぬフリを決め込むのだが、三つ編みの少女は擦り剥いた膝小僧を親の仇のように睨みつけて、今にも泣きそうだ。

自然と足が動いた。

笑える。だって、戦場では弱い者やケガをした者は捨て置け！

足手まといだ。兵など、幾らでもいる、と言っていた勇者様が弱者に手を差し伸べようとしているのだ。

「ん？」

私に気づいた少女の透き通った瞳が私を映し出す。この子には私はどのように映っているのだろうか？　なんて不毛な事を考えつつ、口を動かす。

「大丈夫。今、お姉ちゃんがバンドエイド、貼ってやるからな」

背負っていたリュックサックから、応急箱を取りだし、地面に置いた。少女はそれを珍しそうに眺めている。

「ああ。これか？　お姉ちゃんとその坊主頭のお兄ちゃんは旅をしながら、お歌を勉強している。だから、こいつがあると、怪我をした時にいつでも治療できるんだよ」

「仁深にみみたいに？」

自分の膝に貼られたバンドエイドを仕切りに指先で擦りつつ、仁深は首を傾げた。揺れる三つ編み。

「そう、仁深ちゃんみたいに。そうか、仁深ちゃんか。私は兆詩音。あつちのは——」

「お兄ちゃんの名前は兆詩桜魔さ」

キザったらしいポーズは要らないよ、桜魔と私は軽く抗議の眼差し。それに対し、桜魔はわざとらしく、ギターケースを持ち替える仕草で回避した。

その間に仁深は立ち上がり、スカートをはたく。

「仁深！　スーパーに行かなきゃ。ホットケーキの元、買うんだ。」

それで、いっぱい、ホットケーキパーティーでママのお誕生日をお祝いすんのお」

仁深はホットケーキいっぱいを私達が想像しやすいように身振り手振りで表現した。そんな一生懸命さが微笑ましくて、私と桜魔は破顔した。

ママ……。小さな女の子からそのワードが出る瞬間、私はゆずの母親を刺し殺した瞬間を思い出す。

ゆずの母親は心臓を貫かれながらも、血の一滴が枯れるまで私の目の前に立ちはだかった。究極魔法と究極魔法を合わせる究極融合魔法をそんな状態で、私に何度も打ち込んできた。

彼女が発した言葉は私の胸に今更ながら、深く食い込み始めている。

「ゆずは殺させない。ゆずは向こうで……幸せになるんだから！」
その言葉を言える強さを持っている者、それが母親なのだろうか？
何にしてもゆずの母親も、仁深のママも、私にとっては遠い存在だ。

私は所詮、試験管で育ったデザインベビーなのだから。

「仁深ちゃんのママは幸せ者だね」

「うん！ ママね、ママね、仁深がいるだけで幸せなの」

ああ、私はきつと、殺せない。この子と同じ太陽の下で育った宮之ゆずという幼子を。

ほのかは昔、言っていた。

「アキシオンを私が一番上手く使えるって言っていたよね？ おーちゃんは。おーちゃん、違うよ、それ。私達はアキシオン、聖剣に使われているだけ。だって、そこに私達の意志はないもの」

だから、ほのかは全てに絶望し、自殺した。

アキシオン、勇者、神の鉄槌を喰らわせる戦士は私に魔王の血族を根絶やしにしろ！
それがお前の唯一の価値だ！ と叫ぶ。

私は……解らない。

「お姉ちゃん？ 苦しいのぉ？ 仁深がお腹のお薬、探してあげる！ さっきの箱から」

「いや、ありがとう、仁深」

私はまだ、その無垢な笑顔を見たかったのかもしれない。そう思ったと同時に心は声と化して外へと駆けて言った。

「スーパァってこの近くのスーパァ ヒロシミサエ？」

「うん！ チラシにホットケーキの元、九十円ってあった。仁深、ちゃんと百円、持ってきたよ？」

「うん、偉いね。仁深ちゃん」

そう言っ、私は仁深ちゃんの頭を撫でてあげた。

仁深はくつぐったそうにしているが、満更ではない表情を浮かべ

ていた。

「じゃあ、お姉ちゃん達と一緒に行かない？ 私達もスーパーヒロシミサエに行く予定なんだ、丁度」

スーパーならば、何処でも食べ物は売っているだろう。別に仁深の事が心配だった訳ではない。

「うん！ 良いよ」

仁深と手を繋いで、スーパーヒロシミサエへと急ぐ。

桜の花びらは潰れないように仁深と私の手の中にある……。昼ご飯を食べたら、ちゃんとまた、花として幸福な人生を送られるように埋葬してあげよう。

だが、そうしたところで私の踏みしめている桜の花びらは、人間の死体の代わりになるはずはない。

無論、殺したことは罪だとは思っていない。必要だった、あの時は。

全ては自分の生を価値あるモノと証明すべく。

スーパーヒロシミサエはここでは二番目くらいに広いお店だ。

その外観が近づくに連れて、仁深がはしゃぎ始めた。しまいには、
「ほっとけーき」 おちいようお。はちみつ、いっぱい、はちさん、たいへん」 たいへんすぎて、かるうし」

と微妙に黒い内容の歌を口ずさんでいた。

そんなふんわり空間を壊すマインドエラーの異常発生を、ヒューマンウォッチのアラームが知らせる。だが、そんなのに頼らずとも、勇者である私はマインドエラーやボディエラー、根拠のない殺気を簡単に読むことが可能だ。

私は産まれたその日からふるいに掛けられて、勇者という役割を仲間を殺して得たのだから。

自虐的な笑いと、戦場独特の空気が私を以前の私に引き戻す。やはり、ここが私の居場所だ。

低い声で桜魔と仁深に指示を送る。

「下がっている。ここから先はどうやら、戦場のようだ」

「解るのか？ 音」

「だいたい、解る、桜魔。闘っているのは……炎を操る魔法使いに、ターニングポインターとただの人間？ 妙な組み合わせだ」

スーパーヒロシミサエの一階の奥の方だろうと進む炎に染め上げられたマインドエラーに、殺気が消えては回復する異常な気配、それに単純な殺気……。

どうやら、炎を操る魔法使いはただ一人で闘っているらしい。だが、そいつの方が圧倒的に優勢だ。

「これでは……魔法使いにやられるな。ちっ、胸糞悪い闘い方だ、しかし……」

ターニングポインターの利用価値なんてただ、一つだ。

ターニングポインターには、マインドエラーやボディエラーを伴う攻撃は通用しない。それはこの世界にあるはずのないものを利用した攻撃だからだ。

ならば、無敵か？ と言えば、そうではない彼らも消耗する。

それまで、彼らは傷つき、再生しを繰り返しつつ、盾としての役割を受け持つ。それがターニングポインターの利用価値。

ミクミ・レタス。ターニングポインターでありながら、攻撃、回復、防御をこなす勇者の敵——四天王 輝きの少女の闘い方が脳裏にちらついた。

まさに盾の如き、戦い方をする女だった。

嫌い。

ほのかのように捨て身で誰かを救おうとする。その偽善振りが。

「止めさせてやる……。くだらない偽善を」

腰に帯刀していた聖剣 アキシオンとレーザーブレードがそこに在ることを確認する。そして、戦場へと歩み出す。

「おい、音！ 闘うのか？」

「……」

「止せ、わざわざ、痛い眼に合うことない！」

「……桜魔。私はヴォーカルじゃない。やはり、根っからの勇者様なんだよ」

「勇者は自分の意志で行動することもままならないのかよ」
「違っよ、桜魔。これは私が初めて、自分の意志で行う本当の偽善だ。」

「掌に在った桜の花びらは小さな少女の手に。」

「戦場と運命を共にする愚か者には空虚を……。」

シナリオ??? 人間は狂気を内に秘めている。

鎌を構える。

だが、一步を踏み出さねばならぬ、両足は震えてゆずの命令を聞こうとはしない。

「どうして、ゆっちゃんは……闘いたいのに」

自分の決意を口にしても身体は校舎に根を張ってしまったように動かない。

いつだってそうだ、とゆずは思う。

世界を、自分の居場所を守るためにみんな、百パーセント以上の力を振り絞って闘っていた。だが、自分はどうだ？

「小波。闘うのが嫌だった。自分も、味方も、敵も、傷ついて……ゴミのように遺体が扱われ、敵も、味方も供養する暇無く、戦争を続ける……。ただ、嫌だったんだあああああああああああああああああああ！」

やっと、動いた両足。これで闘えると闇で構築した鎌に力を込める。

ゆずの進行を止める者がいた。古瀬小波、魔法使いとしては凡人クラスでしかない少女。

その少女がゆずのランドセルを掴んでいた。

幾ら、ゆずが力を込めようともしない。ゆずは小波を静かに睨む。

おかしいなあ……。ゆっちゃんの目、おかしいよ。見えないし、とても痛い。

ゆずはそう、自分に起こった現象について、思うが……それは的確ではない。何故って？ 彼女は自分が泣いていることに気が付かなかった。

気が付いたのは、

「泣いている、魔王」

と小波に指摘されたからだ。

「ゆっちゃんは闘いの前に泣くような弱虫じゃない！」

「弱虫……。うん、アンバランス ツインタール、あんたは弱虫だ。それで良いじゃない？ ねえ、知ってる？ 人はどうしてここまで進化することが出来たのか？ って」

「何を……」

ゆずは焦っていた。こうしている間にもモンスターが金意小の児童や先生を喰い殺してゆく。

上階から聞こえた悲鳴は止まらない。怨嗟と悲劇を無尽蔵に、理不尽に撒き散らしている状況を許せない。

「ママ曰く、人は優しさを忘れなかったから」

「優しさを？」

「それは大切なこと。アンバランス……。ちっ、言にくい。ゆずのくそ優しさは闘いが終わった後に和解するのに必要なもの。それを持つてるって才能だよ？ 対して、私はね、お兄ちゃんが傷ついたら……」

小波は思い出す。自分のゆずの真逆をいく狂気の一つを。

お兄ちゃんが口を滑らせて小学校時代、女の子に囲まれてパンツやお洋服を脱がされたことがある。それはお兄ちゃんが本当に男の子か？ という疑問を彼女達が解消する為の行為だったはずだ……。

小波は思い出す。それは痛みを伴う狂った愛情。

お兄ちゃんの思い話を聞いた小波は、お兄ちゃんを虐めた少女達に激しい怒りを覚えた。怒りが収まらず、御飯を戸棚に放り投げた。そして、それでも収まらず、魔法の力を自分の愛情の為にだけに使った。狂った愛情の為にだけに使った。

ああ、今でも鮮明に思い出せる。ああ、今でもそれは間違いではなかった、と確信できる。

小波を中心に破瓜の血が地面に点々と涙のように配置されている。

意図しない絶望に満ちた快樂に溺れた少女達は小波の足下に死体のように転がっていた。全員、着ていた服は跡形もなく、引き千切られていた。

服を千切ったのは召喚によって小波に呼び出されたモンスター達だったが、彼女達の未来を奪ったのは小波の指だ。

十人の明日が……いや、彼女達が新しい命を育む意志が遠い明日にあったとしたならば、それ以上の明日の血が小波の指先を汚していた。

小波は思い出しながら、自分の指を嗅いだ。あの時の尿と汗、体液をミックスした悪臭はそこにはない。何せ、毎日、お兄ちゃんの脱ぎ立てトランクスで清めているのだから。それは純粋な優しさを忘れてしまった小波がお兄ちゃんの優しさに縋る行為。

初めは……お兄ちゃんを虐めた子達にゲンコツの一発を食らわすだけで済ませる予定だった。だが、お兄ちゃんの性器が足で踏まれ揉まれていた事実を知り、小波の計画は変わった。相応の報いをくれてやる、と。

きっと、ゆずが小波の立場にいたら、ゲンコツくらいで済ませていたのだろう。何せ、敵にさえ、情けを掛けようとしているのだから。

何度も、何度も、小波は繰り返すその狂った愛情を。だから、この場でも言える。

「お兄ちゃんが傷ついたら、相手を殺す！ お兄ちゃんにばれないように」

「……」

「だから、ゆず。お前が考えている策は却下。どうせ、無駄よ」

「そんなの……やってみなきゃ解らない！」

「その闇の鎌で正面のモンスターと、校舎内のモンスターを殺せる、と」

「違う！ ゆっちゃんに天永無想がある」

「それは本当に百パーセント、殲滅まで保つ代物？ 大きすぎる力

は一瞬で消失する。無謀な優しさは戦後しか役に立たない、覚えておけば？」

「……」

「だって、ゆずが死ねば、きつと……お兄ちゃんが傷つく。そこで見てなさい。あなたは戦場にいるべき人間じゃないし、全員はどうしたって守れない」

本当に小波が殺したのは宮之ゆずに違いなかった。だけど、少女は知っている二つの理由からそれは出来ない。

一、ゆずが死ねば、お兄ちゃんが傷つく。

二、ママは小波に内緒にしているようだが……聞いてしまった。自分が魔王が現れなかった時の大魔王のお嫁さん候補だったこと、それと同時に大魔王の守護者——ガーディストとして小波が育てられたことを。この世界が大魔王の為に培養されていることを。

ゆずを軽く、背後へと放り投げた。小波の予想を反してゆずは尻餅を突いた。

小波に守られる？ この状況が魔王様のプライドを傷つけたのかもしれない。誰も殺せない癖に、と小波は笑んだ。

その笑みは自分にはないお兄ちゃんに好かれる為の条件の一つへの憧れ。

小波は何度、思っただろう。

小波ではなく、自分は魔王 宮之ゆずの席が欲しかった、と。モンスターが校舎に入ろうとしている。

ああ、死に来た……と小波はただ、状況を理解する。

剣の如き、ベンガルソードタイガーの髭が小波の右肩を目掛けて振り下ろされる。小波はそれを甘んじて受け入れる。

「小波いいいい！」

「騒ぐな……魔王！」

そう、魔王という割には鎌を構えたまま、以前として闘う勇気のないゆずは度素人だ。

さて、問題です、と小波はベンガルソードタイガーの頬を手刀で

軽く傷つける。

強化魔法はボディエラーを強化したい部位に塗りたいことによって発生します、では、モンスターは何の集合体でしょう？ と頬の傷口から流れる血液を右手に宿らせる。

食い込むソードサーベルタイガーの髭は小波の肩の骨にヒビを入れた。既にそこに至るまで小波の肉はズタズタに引き裂かれていた。膨大な血液が傷口から失われていく。この分では利き手は使えないだろう、と小波は確信していた。

運が悪かったとも思えるが……ゆずが死ななければ、自分が死のうが、金意小学校の人間が全滅しようが関係ない。

小波にとつての勝利すべき道は今、開いた。

モンスターは……ボディエラーの集合体。ならば、ベンガルソードタイガーの血を滴らせた指を曲げ、硬く拳を創り上げ、腰を低くし――

「まずはお前を魔法の餌にする！ 強化。古瀬暗殺流 鳴動拳」めいどうけん

ベンガルソードタイガーの顔面の肉を拳によって抉り、血管を拳の威によって振動させる。振動は威力となって、モンスターの身体を駆け巡る。血管は血液を巡らせる為にあらゆる箇所へと繋がっている。それが拳の威を循環させ、やがて……ベンガルソードタイガーの身体はそれに堪えきれなくなり、爆発した。

「大魔王 威螺絢様、どうか、私の魂を死後、あなたの魂と同化させて下さい」

ベンガルソードタイガーの巨体がボディエラーへと還元されたのと同時に、小波の頭上にコウモリ型のモンスター フライイングウィングが降下しようとしている。小波の拳がそのモンスターの身体を串刺しにする。

それを待つてましたとばかりにモンスターが小波の両腕、両足、腹部、太腿へと牙を立てる。様々な箇所から血が噴き出した。痛み小波は顔を顰めるが、両者の攻撃は止まない。

ネズミ型のモンスター ネイルラットを腕にぶら下げたまま、拳

を自分の身体の肉を喰らおうと頑張っているモンスター達に次々と叩き込む。

そのかいあってか、徐々にモンスターの勢力を剥ぐが……モンスター達を倒した時には小波の身体はズタボロだった。

小波は意識を保つことに脳の能力をフル活用させる。

「くう……鳴動拳……を使ったら、今度は私の身体が粉々……ね。この様はないわ」

「小波……お前」

ゆずは理解できなかった。

小波の両腕は肌色からどす黒い血に染まり、肩に至っては骨が覗いてしまっている。呼吸を繰り返す度に、胃液が口から溢れ出る。両足は立っていることが不思議なほど、場違いな方向へと捻れてしまっている。

なのに……小波は闘う姿勢を崩そうとはしない。

どうして、小波は歴戦の英雄の如き、意志を保つのだろう。そんな小波が無意識に囁く。

「嫌われてたまるものか……嫌われない、嫌われない……。お兄ちゃんにほめてもらうんだから」

そんな小波を嘲笑うかのように、金意小学校の児童や先生の一部であったモノを彼女達の背後にある階段からぞろぞろ、降りてきたモンスターが目映った。

小波は歩こうとした。

目線が低くなる……。

身体が倒れる。

床に頭を強か、打ち付ける。そう、小波は理解した。だが、暖かい腕に支えられていた。

小波が目を離れた隙に……小波を支えたゆずの眼光が鋭く光る。温もりを通して、ゆずの力がはつきりと解る。これが凡人と非凡人の差。

その瞳は語る。

後はゆずが引き受ける、と。

あんたに出来るの？ と問いたかったが止めた。ゆずが先程まで背負っていたランドセルが開いていて、そこには大量の石が入っていた。

床に戦闘で熱った身体の熱を逃がしながら、ゆずのスカートの中に視線を向ける。オムツだった……。驚きのあまり、声が詰まりそうになる。小波のお兄ちゃんストーキング（本人は護衛だと信じている？）の情報では夜はオムツ装備だが、朝は可愛い女児パンツのはずだ。

「……あんた、予習やる気あんの？ 石ころばかり」

「安心しろ、ゆっちゃんは小波みたいな間抜けじゃない！ 強制的にゆっちゃんの勉強の本が絢ちゃんによって準備されているはずだ」

「……やっぱ、あんた……嫌い」

オムツをもう一度、確認して小波は溜息を吐いた。

魔法少女から闘いのバトンが魔王幼女へと渡った。

シナリオ??? 産まれて初めて見た他人、産まれて初めての初恋

「魔法? を知っている……。敵発見。魔法省か? 大魔王関係者の可能性大」

そう言った少女の声には覇気がなかった。

紅蓮の炎を纏っているかの如き和服から覗くほっそりとした素足。美しい少女の素足は燃え滓と化した人々の死体をモノともせず、踏みしめる。

少女が傍を通る時、どの火の粉も歓喜の声を上げる。

その声は少女の日本人形のような美しさを称えているようだった。そして、その声を発した後、火の粉は短い生涯を閉じた。

階段を少女が登る。ゆっくり、まずは一段。

「私には解りません……。死にゆく人間の感情が。だから、無駄ですよ……。命乞い」

ロボットのようにながれな日本語だからこそ、余計におかっぱ少女の一語、一語が余計にながれなだった。

「誰がするか! 何故、罪もない人間を殺した!」

俺はただ、少女に対して無尽蔵に沸き上がる怒りを感じていた。

俺、北裏秀平の父親はカメラマンだ。一緒に戦場へと行き、悲惨な光景を何度も見たことがある。まさか、その光景を日本で見るとは思わなかった。全世界、そこら中にモンスターが出現したとはいえ、日本は平和な……。

床に転がる黒い灰や焼けた死体。下から上へと立ち上ってくる死の香り。

先まで俺に逃げろ! と言ってくれた老人の顔は判別がつかない。見開かれた瞳は焼けて虹彩はなく、白いピンボールのようだ。顔は一面、朱く爛れていた。人体で一番、頑丈だと言われている歯だけ

が生前のまま、白く輝いていた。その輝きをもたらしているのはスーパーの機械的な照明だ。だが、あの少女よりもまだ、分別があるように思える。

ベンチが今は静かに燃えている。それは戦場で見たただ、燃えるだけという現象をまざまざと見せつけられた無人の村にも似ていた。その村の人々は広場に集められ、俺が来た時には死んでいた。総勢、五十人がただの魂の容れ物になっていたのだ。

ここに在るのはせいぜい、十五体だが。

「数じゃねえんだよ……ちくしょう」

低く言っただけの言葉は一階が静かになったのも原因か、階下によく響いた。二階にいる客はまだ、事態を知らずに楽しく、シヨッピングを楽しんでいた。

しかし、それも長くは続かない。

若い子ども連れの女性がそこだけ、戦場跡と化した場所を指さして、

「し、死んでるわ」

と呟いた言葉が荒波となり、静かに混乱の坩堝へとスーパーヒロシミサエの客を誘った。その波はきつと、台風の影響を受けた波よりも遙かに高い……。

様々な感情を乗せた声なんぞ知らないとかばかりにおかっぱ少女の足取りは、ピアノで優雅な旋律を弾いているかのよう……。

「……今一度、問う。今度は応えよ。衣螺絢様を回収に邪魔な障害か？ それとも衣螺絢の手の内のモノか？」

俺は応えられなかった……。絢を回収？ 大魔王を回収……だって。こいらは間違いなく、絢に危害を加えようとする存在だ。

勿論、そんなの許容できない！ と叫ぼうとした。

だが、その前に暖かいモノが俺の肩に触れた。

「参考書、十冊も買っちゃいましたよ、しゅう」

「絢？」

「ん？ しゅう、十冊は買いすぎたって言いたいんですね。甘いで

すよ。小さい頃からしつかり、とお勉強の癖を付けておかないと……ん、なんか、騒がしいですね」

やっと……気づいたか、と普段ならば、ツツコミを入れている処だろうが今はそれどころではない。

漸く、おかっぱ少女が二階へと辿り着いた。

絢の視線がおかっぱ少女へと向かう。おかっぱ少女がぎこちなく頭を下げた。

「申し訳ございません。大魔王 衣螺絢様、回収します。衣螺絢、オスではなく、メスと情報を修正」

「いやいや、メスじゃないですよ。オス、オスだから何処から、どう見てもオスです！」

いや、無理があるだろう。絢の着ている服は朝のあの騒動からずっと、金意高のブレザーとスカートのままだ。何でも保健室に女子の制服しか替えがなかったらしい。

セミロングの跳ねっ毛のある髪がトレードマークのちょっと、お胸が残念な美少女口リ顔、少女 衣螺絢ちゃん（十五才）にしか見えない。

「そうですが……ですが、些細な事。衣螺絢様の大魔王としての力、それが回収できれば、それで良い」

「大魔王？ 魔王様のさらにその上にある人の事ですね。でも……僕はそんな大それた人ではありません」

「あなたから闇の波動を感じます。闇の魔法は魔王か、大魔王しか使用することを許されていない最強の系統。それをあなたから感じます」

「嘘……。僕、運動神経ゼロだけど……」

狼狽える絢の肩に触れようとおかっぱ少女が手を伸ばす。俺がそんな事を許すはずはない。直ぐさま、おかっぱ少女と絢の間に身体ごと、割り込んだ。

びっくりする絢。

僅かに眉を顰めるおかっぱ少女。

「邪魔……人間。退かねば、排除」

「やって見ろや。俺はな、絢に危害を与える輩は——」

「ちよつと、待って。話し合いましよう。きつと、この子……」

「名前ですか、私は浦片みく」

「みくちゃんとしゅうはただ、お互いを誤解しあっているだけです。僕のことだつて誤解ですよ？」

「絢……下を覗いてみ」

俺の言葉に従つて絢は素直に下を覗く。そして、その光景が余程、目に毒だったのか、俺の背中に顔を伏せた。

背中に暖かい水をぶっかけられたような感触が広がる。絢が泣いている？

「酷いよ。もしかして、あれをみくちゃんが？」

「あれ……とは？ ああ、排除しました」

まるで生気を感じられない声は人間に向けられた声ではないようだ。みくにとつて人間とはただの物体なのかもしれない。

それは戦場で出逢つた歴戦の戦士の言葉を俺に思い出させてくれた。

「秀平。俺達みたいになるな、てめえは。俺達、戦士は戦場では人間をただの物とは思わねえ。何故か？ 解るか。余計な感情移入は死に直結するからだよ」

そう言っていた歴戦の戦士の顔は銃を撃ち敵を多く殺した日には大量に酒を呷っていた。そんな人物でも人を殺すことは何かしらの影響を受けるのだが……みくは違う。

朝、歯を磨くのような習慣をこなした、という感じにしか見えない。

そんな奴に勝てるはずはない。戦場を経験したことのある自分だからこそ、知っている。本当に危ない状況っていうのはしんと静まりかえった時に起こるものだ。

気を引き締める、と拳を構える。構えたところで出て来るのは、街のチンピラと殆ど変わらぬ素人拳法だ。

「やるんですか……。それでは戦闘に移行。その後、大魔王回収」
みくが蒼い宝石を先端に飾った杖を構える。

「スカイロッドは使用しません。省エネ」

「魔法使いつてのは魔法を使う時、それが必要じゃなかったのか？」

「……教えるぎり、ない」

少女は和服の内側から石を一つ、取り出した。そして、石に少女は語りかける。

「炎。下級火炎魔法　ライト」

石が小さな灯りに変わった。その灯りを指先に移動して、みくは俺に言う。

「これ、私の武器」

「ふ、ふざけるなあ！」

頭にきた！　あんな豆電球ほどの光が何になるって言うんだ！

俺は怒りを拳に込めてみくの頬を狙う。

「悪く思うな！　俺には絢の方が大切だあああああああ！」

「止め——」

絢が俺を制す声が背後から聞こえるが……。勢いの乗った拳はもう、止まらない。それ以前に止めるつもりは毛頭無かった。

綺麗に曲線を描いた拳はみくの頬へと吸い込まれるように決まろうとしていた。だが、みくの光を宿した指先が拳を止め、燃やした。

一瞬にして、拳が火に包まれたがすぐに消えた。拳が燃えたはずなのに痛くない？　いや、威力が低かった。

じゃあ——と考え直したところでみくの拳が俺の頬にめり込んだ。凄まじい俺を背後に追いやる力。溜まらず、蹠踉めく。倒れそうになったところを絢が支えてくれた。

「絢……」

上手く喋れない。口の中に鉄の味が広がる。

「しゅっ、唇から血が！」

「止める、お前の手が汚れるぞ。こんくらい、自分で拭える」

効かないとアピールするように切れた唇の血を乱暴に腕で拭う。

しかし、血は止まらず、白い床に血痕を作った。

俺が拳に力を入れたのと同時にみくの拳が俺へと殺到する。

所詮、女の子の拳だ。予め見えていけば、その軌道さえハッキリしていれば、避けられないことはない。

みくの拳をひらりと躲した先、炎の弾丸が俺の腹部へと丁度、当たるコースへと軌道をみくの拳によって修正された。

「謀られた!」

「遅いです……あなたの反応速度では――」

「うわあ、いてええええ」

みくが戦闘中には見えぬ、無機質な声で俺にご親切に教えてくれるが、避ける術がない。一発の炎弾は俺の腹部に当たる。

食事してから、この状況だったら……間違いなく、ぶちまけちゃいけないものをぶちまけていた。

腹を抱えて、絢の傍まで下がる。

「――躲せません。これは私の得意とする下級火炎魔法　フレイムライフル」

「ライフル?　名前、負けしてんじゃん?」

「……必要ないからです、省エネ」

その言葉に嘘はないと、みくの隙だらけのただ、こちらへと歩むだけの足運びが教えてくれている。同時にどう足掻いてもお前には勝てない、とも。

それでも、俺は足を動かした。拳を振るった。

「うああああああああああ!　死ねやああああ!」

そんな情けない叫びと共に拳を振るうが、みくにはかすりともしない。最低限の動きで躲している。躲しているという言葉さえも相応しくない余裕が彼女には感じられる。

みくが無傷なのに対して、俺は拳を振るう事にみくのフレイムライフルの餌食になる。

今日、袖を通したばかりのブレザーは無残にも数力所、破れ……そこから覗く肌は真っ青な痣と不器用な小山に変容していた。

「髑り殺すのは明日菜厘の趣味です……。だからこれで仕舞い」

「何か、何か！ やばいです。解らないですけど……。しゅう、逃げて！」

そんな絢の言葉に肯く事を忘れ、目の前の光景に俺の身体も、精神も釘付けになってしまった。

裏片みくの周囲の中空に無数の石が浮かび上がる。その石は次々と炎に変質していく。恐らくはあの一撃、一撃がフレイムライフル……。

みくの顔が炎に照らされて今まで機械のように一定だった無感情が焼かれた。そこから現れたのは鬼の如き、形相の少女。

「……殺す、殺す、殺す、殺しちゃえ……。何処で消えようと私も機械なみくも同じ。でも、私も、私はまだ、諦めない。私は、私は生きたいのかな？」

「な……」

「みんな、死ぬのにね！ 連続魔法解放 下級火炎魔法 フレイムライフル」

その甲高い叫びは無数の炎を超高速で打ち放つ合図だった……。はず。俺にはぴゅーん！ なんていう映画なんかでお馴染みの銃声しか聞こえなかった。しかも、一発だったはずだ、音からすると。

だと、いうのに！

「なんだ、これ……。ほ、ほ、ほとん……ど」

痛い……。痛いを通り越して……。意識が消えそうだ。眠気が押し寄せてくる……。

両足は辛うじて自分の体重を支えてくれたが……。やはり、炎弾には堪えきれず、時間差で折れた。両腕はとうの昔に吹き飛び、自分の胴体には付いていない。

「安心して休め……。どうせ、遅かれ早かれ……。皆、死ぬ。それは快楽殺人者のみくでも、私でも、人間でも同じ」

おかっぱを弄びつつ、みくは俺を眺めていた。同じ種を眺めるという雰囲気ではなく、蟻を眺めるといった淀みがみくの瞳には住ん

でいた。

だが、何故なんて……思っている余裕もなく、俺はただ、絢の、絢の無事を祈っていた。これだけ、傷つけば恐らく……俺は死ぬ！「しゅう！」

仰向けに倒れた俺の元に俺の両腕を抱えて、泣きそんな顔をして、俺の大好きな……俺の全てがそこに在った。

止せよ……絢。俺の血まみれの腕を抱えてんから、お前のブレザーまで血まみれじゃねえか！　なあ！

そう言葉にしたかった。

「しゅう！　嫌ですよ、死なないで！」

止せよ……絢。女の子みたいな顔が泣くと余計に女の子になってちゃってるじゃねえか！　なあ！

そう言葉にしたかった。

「しゅう！　しゅう！　大丈夫ですよ、腕くらいくつつきますよ！」

それ、ジョークか……絢。だけど、こっちの方がジョークの方が良かった。

……俺の歯、全部、折れて口に突き刺さってる。

痛いなあ。

意識が……。

絢が見守る中、秀平はゆっくりと目を閉じた。両腕欠損、片耳欠損、口内に歯が突き刺さり、出血多量……両足複雑骨折。その状態からすれば、死は確実だ。

絢は人間ではない獣のような遠吠えにも似た言葉を発しながら、泣いた。

泣いても、泣いても、涙がこぼれ落ちてくる。

北裏秀平、僕の幼なじみが居なくなる！　そう思うと、絢は何か叫ばずには居られなかった。だけど、何を叫んで良いかも解らない。よって、それは人の理解できる言葉ではない。

敢えて絢のそんな慟哭を言葉にするならば、秀平を奪わないで神

様、だろう。

無情にも、みくがこの世の真理を絢に教える。

「人はいつか、死ぬんです。死んだら、無」

「……お前え！」

みくを獣のような理性無き眼差しで絢は睨んだ。怯まぬみく。

「大魔王ともあるう種が人間なんか相手にしたら駄目。大魔王は永遠を生きる存在」

「……お前え！ お前が……」

「大魔王、その人間を直す時間を与えれば、大人しく、回収されま
すか？ 明日菜厘は大魔王が新品なのを好むはず」

直す？ 直すだって……と、絢は激しく心を揺さぶられた。その
心の動揺が怒りの感情を滅多に表へと表さない絢の怒りの導火線に
火を点けた。

絢は強化硝子に力一杯、裏拳を繰り出した。だが、女の子よりも
非力と評判な力ではびくともしなかった。

「憎たらしいよ。本当に無駄に力のある連中は、それ相応の扱い方
を知らないんですね」

「大魔王、力があるうがなかるうが、無」

「最期はみんな、死ぬって言いたいんですか？」

「……そう。それが創造主 ベアトリーチエが決めた真理」

ベアトリーチエ教。この世界では尤も、ポピュラーな宗教……。

「残酷なみくちゃんが、数々の試練を乗り越え、永劫の彼方の先の
未来を信じ続けたベアトリーチエ教の奉る一神 聖ベアトリーチエ
を信じているんですか？」

「信じるも何もあれこそが本来の真理。間違った理である魔法とは
違う」

「……」

「さあ、大魔王。お喋り終わり」

絢はみくに従うつもりは無かった。毅然とした態度を相手に伝える
べく、絢は秀平の両腕を床に起き、涙を手の甲で拭った。

「みくちゃんは僕を何処かに連れて行きたいようですけど、親友をこんなにした人間に従うほど、僕はお人好しではありません。それに、秀平をゆずか、小波ちゃんのところ連れていくのが先です」病院では無理だという事がはつきりと解る。魔法。魔法に頼るしかない！ ゆずは魔王と呼ばれた力ある幼女、小波は相当な手練れの魔法少女。

どちらも絢の言葉に即行してくれるだろう。

その為には……。

絢はただ、佇んでいるだけで周囲の空気を、人々の平常心を燃やす存在に厳しい口調で、嫌悪感を隠さず、要求する。

「そこを退け！ 親友を僕は助ける！」

「……パターン？に移行。大魔王を死なない程度に加工し、その後……回収」

動き出す裏片みく。

動けない衣螺絢。

対照的な二人の身体がすれ違った瞬間、それすら解らない絢の身体に異変が起こる。絢の右腕が綺麗に切断される。

痛い！ そんな身体の異常を伝えるシグナルが脳から破損箇所へと下る。

みくは静かに絢の背後へと降り立った。彼女が手にする獲物は炎の剣だった。

「火炎系中級魔法 フレイムブレイド。破損状況を確認……え？」
「……え？」

確かに切断されたはずの右腕が急速に光に包まれ、綾の身体へと自動的に戻った。痛みもなく、まるで切断されたのが嘘のようだ。絢とみくは驚愕する。

ありえない現象が起きたのだ。絢は自分が魔法なんか使えるはずはなく、この現象は説明つかないと思う。みくは自分の攻撃は手加減無しの一撃で、大魔王なんかに加減したらこちらが消滅なのに……、いや、手加減していないはずと思う。

「ならば、もう一度、今度は。殺す、殺す、殺す、殺す、殺す！ 私が、私が機械のみに代わり殺す！」

再び、鬼が動き出す。

みくの手につつ炎の剣の刀身が一気に膨らむ。

「回収するんじゃ、ないんですか！」

溜まらず、絢は自分の顔を守るように両腕をクロスさせ、防御。

だが、そんなのは壁にもならない。炎の剣は両腕を紙の如く、簡単に両断。剣の勢いは全く削がれず、絢の綺麗な顔を両断。

しかし、脳漿が飛び散る前に不思議な力で何も無かったことにされる。それは絢の認識やみくの認識を越えて、その現象はそこに在る。

絢は知らない。しかし、みくは知っている。その現象を、そのベアトリーチェに、栄華世界の祝福を受けた存在を。

それは一千年に一人の存在、あのベアトリーチェですら到達出来なかった領域を内包する者。自分の魔法はそれには通用しない。この世界の異物は通用しない。

……ターニングポイント！

「ターニングポイントにして、大魔王。何？ 何！ 何！ そんなふざけた存在が在って溜まるか！ 不公平だ。……同意、感情あるみに同意。私は、私は、普通の生活すら神様に、ベアトリーチェ様に頂けなかった！ 信仰していたのに！」

「みく……」

「信仰していたんだ！ 私とあの子は気が付いたらゴミ山で暮らしていた。いつか、ベアトリーチェ様が導いて下さるって！ 信じていたのにあの子を、あの子を救ってくれなかった！ だから、こんな世界……」

「……」

「壊れちゃええええええ！ どうせ、誰も彼もみんな結末は死よ」
炎の剣を消失させると、みくは連続魔法解放し、下級魔法 フレイムライフルを秀平の時以上に大量に作成した。

そんな無理が祟って、みくの両足の筋肉は悲鳴を上げる。それでも彼女には立たねばならない訳がある。

全てを恨み、全てを諦めて、全てを自殺させる。それが彼女に残った唯一の、夢。

それを知らず、衣螺絢は炎の化身の如き少女を睨む。

炎弾が一齐に絢を目指して飛来する！

それを避けられず、絢は蹠踉めく形で玩具屋へと突っ込む。正確には背中から巨大なガンダムを倒す形で店内へと入店した。

その影響でガンダムの頭部や腕が胴体から離れた。

それはまるで自分の未来を示唆しているようで、絢は恐ろしく思った。

「そんな事よりも僕が早く、しゅうを助けないといけないです」

絢の想いを現実は無残にも摘み取る。

無数の炎弾の猛攻は続き、炎弾から飛び火した炎が玩具屋へと飛び火した。店内が激しく、延焼する。

「あなたに何が解る！ 貴様は呑気に毎日、綺麗なお米が食べられる。私は、私は違った。毎日、お腹を下してた」

「うう」

躊躇していた、絢は。この炎の壁を潜らなければ、秀平を助けられない。どの道、先程みたいな不思議な現象が起こらなければ、確実に死ぬ！

「お金を稼ぐために毎日、ロリ好きの男や女に私の性器を捧げたわ。幾らになったと思ってる？ 笑っちゃうわ。一回、カップラーメン一杯分以下よ！」

絢の状況など、お構いなしに自分が如何に可哀想な子かを切々と絢にぶつけるみる。

ならば、炎に飛び込むだけだ、絢！

しかし、武器がないとみくには対抗できない。

何か、武器になる物を、と眼球を慌ただしく動かす――

リカたん人形（決してリカちゃん人形ではありません）、

ベイブレード（売れ残っているのか、パッケージが色褪せて何度も価格を下げたシール跡がくつきりと残っている）、

イナズマイレブンのレアカード（二千元以上、するカードが今や、炭と化そうとしてういる）、

レジカウンター（燃えてしまつてとても、売上金を回収できる状態ではない）、

日本刀（レジカウンターの傍の柱に立て掛けてある）

——へと視線を移動させた。

立つたは良いが、足下がふらつき、中々……思うように前へと進んでくれない。それでも、前進する。まだ、絢は希望を保って生きていたいから。

生きるなら、その方が良い。

「だ、だからって貴方は人を憎み、人を愛することすら拒絶し——」
炎に触れたながらも、日本刀を手にする。その日本刀は炎に包まれていた。その炎が刀身を通して、腕へと這い上がってくる。

腕が朱く爛れていく。爛れては、再生し、また……爛れた。痛み、痛くなくなり、痛み出した。その繰り返しが脳をある結論へと誘ってくれた。

絢はもう、理解した。何故かは知らないが、自分にはみくの魔法は効かない。

怖くない。そう、何度も言い聞かせ、みくの意表を突くべく、炎の壁を潜り向ける。身体全体が炎にやられ、ブレザーやスカートがいとも簡単に燃えた。糸が爛れた肌に貼り付いて同化していく……。

瞬時に治り、また、壊れていく身体と心を強固な意志——秀平を、親友を助ける意志で繋ぎ止める。

それはきつと、紅蓮よりも熱い！

みくの怨恨の炎よりも熱い。

渦巻け、身体全体を燃やす刀身に宿る業火。人間はすべからく、その業火に焼かれては自らの意志で再生していく。

それを忘れた人間を絢は許すつもりはなかった。

炎の壁と同化し、その内にありながらも激痛に苛まれながらも、
絢の拳は柄を握る。強く！ 強く！

「え？ ま、魔法？ 石がないのに。ベアトリーチェ！ あんたを
信じない私は、私はいらない？」

みくは知っていた。魔法に一番、必要なのはマインドエラーをコ
ントロールする魔力。その魔力は魔法を呼び、自らの魔法をコント
ロールする。

みくの目の前で不可能なはずの敵の魔法のコントロールをやって
のける者がいた。

全てがスローモーションだった。みくの心は避けられると思っ
ているのに、みくの身体は避けられないと結論づける。

全裸の少年とも、少女とも評することのできる絢が両手で日本刀
を握り締めていた。

絢の全身から放たれる数多の闇の線が、綾の全身を焼くはずの炎
を全て、刀身へと集めていく。

避けられる、避けられないの狭間に揺れるみく。

「——自分の境遇と、自分の罪を同格に扱うな。宗教を自分の行為
を容認する道具にするなあ！ 魔王 宮之ゆずのパクリ命炎剣を喰
らえ」

絢の言葉はみくの心を否定した。絢の突きはみくの身体を否定す
る前に……寸前の所で止まった。

助かった。半笑いするみくの頬に横殴りの衝撃が加わる。

「バカ野郎おおおおおおお！」

と言う絢の言葉と共に。

絢の拳で吹き飛ばされ、スカイロッドはベンチへとぶつかり、床
に転がった。

みくの頭が床に叩きつけられる前に、優しい腕がみくの頭を掬い
上げ、人間の温もりに溢れたブレザーの肌に包まれた。

初めての経験だった。邪な感情、愛のない性的感情無しに異性の
胸に埋もれていた。だからだろう、みくは腹が立った。

「や、やってくれた……。もう、どちらのみくも任務放棄。大魔王を殺す」

そんなみくの頭上を冷たい雨が降り注いだ。

男の人とは思えぬ、甲高い声が艶やかな唇から漏れていた。森の息吹とも思える性質な呼吸音と一緒に。

どちらのみくも思っていた。叶うならば、衣螺絢になりたい。

さらりとした髪のを先を辿っていくと、チャームングな外跳ねやんちや髪に出逢う。

口紅を塗っていないのにそれ以上に朱い色香を放つ唇。

日本人形のように愛嬌と美麗を同居させた目元と輪郭。

女の子よりも華奢な両肩が激しい運動の末、失った酸素を取り入れようと上下運動を繰り返す。代わりにみくの心を吸って欲しかった。幻のように……浄化された心が天へと登る光景が霞んだ視界に映った。

瞬きをする。そうしていると、優しく絢の指先が涙をさらった。

幻は消えた。その指先が持っていたはずの唯一、みくを浄化してくれる刃はそこにはなかった。

括れた腰にいつの間にか、添えていた掌をみくは自らの意志で離れた。

その括れた腰の持ち主はもう、闘うのは無しね、と笑っていた。

笑窪が可愛かった。

望まぬ子どもを堕ろし続けたみくには到底、その笑窪を習得することは叶わない。

それでも、みくは、みくは……小学生の時代を楽しめる清らかな人間になりたい。なりたかった。

でも、なれないから、みくは理想から離れた。衣螺絢から離れ、闘う為の武器を代わりに抱いた。

シナリオ??? 交錯する魂達

私が出る幕はないと、少女が日本刀での突きを寸止めするまではそう、楽観視して眺めていた。

大魔王？　のはずはないが……　どうやら少女は魔法の才を持っているらしい。おまけにターニングポイントだ。勝負の行方は少女の勝利で終着するはずだった。

笑ってしまう。いや、悪い意味で笑った訳じゃない。

だって、私の友人――ほのかの本当の気持ち、ほのかではないほのかに姿形、性格まで似た他人に気づかせてもらったのだから。

ほのかは絶望して自殺したんじゃない。私達は一人しか生き残ってはならなかった。一人しか、勇者の称号を得ることはできない。誰にでも優しく、腕も私以上に立つほのかは友人を助けるために自殺したんだ。

ほのかの優しさは時に誰かを癒し、誰かを傷つけた。

さあ、どちらだろう、と。我先に戦場では先頭に立って闘う主義だった私は遠目で少女達の抱擁を眺める。

おかつぱ頭の少女がブレザーを着た少女の手を払う。

驚いたブレザーを着た少女に対して、攻撃の意志を感じさせる鋭い殺気の籠もった双眸を向けた。

おかつぱ頭の少女の薄く見える血管が動いた。それを私は見逃さない。

一足飛びで残りの階段を越え、さらに少女達までの距離をその飛翔のみで短縮させた。

視界外にあった私は少女達にとって予期せぬ訪問者だったであろう。

「また、あんたはあの闘いを再現するのか？」

いつでも抜刀できるようにレーザーブレードと、聖剣 アキシオンの収まった鞘に手を滑らせた。視線はおかっぱ頭の少女に向けたままだ。

「あなたは……」

と、ほのかに似た少女の声。

「名乗って無かったな、兆詩音。通りすがりの聖剣使いだ。この闘い、君に代わって私が引き継ごう。危ないから下がっていて。ここはもうすぐ、こいつの血の海に埋没する」

レーザーブレードから手を離し、聖剣 アキシオンを抜く。

正面に構える。刀身に刻まれた流星群を果たして、私の対戦相手は見えているのか？ それ次第では多少、戦い方も変わってくる。

「いきなり、現れた金髪女。その刀身のない剣で私を撃滅？」

なんだ、雑魚か……。と、少々……落胆する。この刀身を微かでも見ることができたのは神の調べ ルプテンくらいなものだ。会ったことはないが神とやらにも見えるのだろう。

対戦相手の事はしばし、無視して私は背後にいるほのかに似た少女に質問する。少し戯けてね。

「少女、名は？」

「あの、あの僕は少女じゃなくて、少年！ です。あつ、僕の名前は衣螺絢です。宜しくお願いします」

「しょ、少女、嘘を吐くな！」

今は対戦中の故、絢に目を向けられないが、その容姿は少女、しかもかなりのロリ系美少女だ。羨ましい限りの細身の身体に、まだ子どものままの平坦なお尻、壊れ物のような肩、芳しい香りを放っているような黒髪、大空の恩恵を抱いたような瞳の色……、これが少年な訳がない。私は認めない。きつと、ほのかの生まれ変わりだ。

だから、私はさり気なく、絢に要求する。

「私が絢を窮地から救うことができたら、友達にならないか？」

「友達ですか？ 良いですよ、そんな条件がなくても、無性で」

「おいおい、私が絢を救わなかったらいつまでも脱せないぞ。幾ら

ターニングポインターだからってな！」

人の話の腰を折るタイミングで炎弾がこちら目掛けて飛んでくる。絢は私に対して、逃げる！ と叫ぶが……そんな気遣いは無用だ。

アキシオンで炎弾を吸収する。吸収されたマインドエラーは刀身を朱く輝かせた。炎の属性を吸収した聖剣はその鋭さを増した。これはこの聖剣の特性の一つだ。

刀身の観ること、叶わない敵はさぞ、驚いただろう。いきなり、自分の魔法が消えたのだから。

だが、驚いている暇はない！ 後ろで絢がみくを殺しちや駄目ですよ、と言っ言葉に無言で了解しつつ、駆ける。

アキシオンの柄でおかっぱ頭の少女——みくの杖を握っている手を強か、叩いた。

痛みに顔を歪めた瞬間、みくは杖を落とした。

慌てる少女には悪いが、勝負を決めさせてもらう。杖をロングブーツの踵を器用に使い、遠ざける。そして、みくにデコピンをした。「みくを、みくを殺す？」

そう言った少女は安らかな表情をしていた。凄まじい形相と無表情の二通りだったみくが。

私は……知っていたこの安らかな表情の意味を。彼らはみんな、心から——

——ああ、やっと……救われる、と思っている。

「勇者様になって……私達の生きた意味を……お願い」

ああ、これでやっと、死ねるとほのかは顔で語っていた。

「勇者！ パパちゃんとママたんをかえ……し……」

ああ、やっと、パパとママの処に行けると幼い男の子は顔で語っていた。

「くそつ、どうして……我々、魔法を使う者を倒す、勇者」

とある兵士はそれを考える必要がなくなったと顔で語ったんだ。死は救い？

「少なくとも……君達には救い——」

「少なくとも……君達には救い——」

ニット帽を被った金髪の美しい女性——兆詩音がみくを切断すべく、聖剣を振り下ろそうとしていた。

「だけど、死ぬことが償う道じゃない！ 死が全て、じゃない。僕は少なくとも、そう想い、僕のエゴで浦片みくという小学生を救いたかった。」

生こそが救いだ、というエゴで僕は叫ぶ。力の限り。

「音さん、それは違う！ みくは生きるべきです！」

「ほ、ほのか」

僕はほのかさんじゃない、と否定するのが煩わしい。

みくに近寄り、おかっぱ頭をゆっくりと撫でた。

「みくは、みく……」

「もう、自分を否定するのは止めなよ。僕のどこ、来ますか？」

「みくは、みくは……」

その声から戸惑いの色が浮かんている。唇が微かに震えている。

みくの答えを待っている。すると、彼女の瞳から光るものが溢れ出した。

真珠のような涙はみくの笑顔に艶を添えていた。

「……嬉しい。みくの居場所」

と、みくは独り言を呟いたが太陽のような笑顔が翳る。

その目先には僕の親友——北裏秀平が倒れていた。

「大丈夫です、みくちゃん。何とかしてくれる人を僕は数人、知っているんですよ」

「で、でも……」

僕とみくのやり取りを静かに見守っていた音さんが、このお人好しめ！ なんてこの後、言いそうな溜息を吐いた。

聖剣を鞘に戻さず、秀平の頬に聖剣の刀身が触れる。おもむろにロンググローブから瓶を取り出した音さんはその中身を聖剣の刀身に降り注いだ。

そして、口ずさんだ、威のある聖句を。

「ボディエー臨界点突破。聖剣に宿りし、癒しの力よ。我の加護からしばし、離れ、この者の傷を癒したまえ……」

眩しい光が秀平の身体を、聖剣 アキシオンを呑みこんでいく。

そして、秀平の両腕も。

「聖剣の力？ ですかね……」

「あの人……。少なくとも魔法、使用皆無」

光が消えると……秀平は時間が巻戻ったように五体満足で床に横たわっていた。おまけに気持ちよさそうに鼾を掻いている。呑気な奴……。

「服まで治っていますね……。どういことですか？ 音さん」

「その前に言うことがあるよ」

「あつ、ありがとうございます、音さん」

そうお礼を言い、お辞儀したかったが、みくの唇が邪魔でできない。

みくは無言でキツツキが木を突くように僕の頬を唇で突き続ける。
「うん、ちよつとした奥義。残念ながら絢には到達できない達人の達人の領域。それよりも、絢の体質……ターニング ポインターについて知っておいた方が良い」

柔らかい感触がくつついては消える。

「ターニング ポインター？」

「そう、ターニング ポインター」

柔らかい感触がくつついては消える。

「ちよつ、その前に」

柔らかい感触がくつついては消える。……みくの唇は質感がとても、柔らかい。あや、おぼえた。

つてそうじゃない！

キスをまた、試みようとするみくの両肩を咄嗟に掴み、阻止した。
「みくちゃん、嬉しいんですけど。そう言っのは好きな男の子にやるものです」

「うん、みく。純好き」

先程の笑顔は眩しかったのに何故か、無表情に戻ってしまったみく。

「え？　ありがとうございます。でも、みくの好きは家族的……ん、ん」

僕は口を開くことは許されなかったみくの唇の柔らかさと、みくの素晴らしい攻撃力に溢れたみくの体重。みくの背伸びの踏み台にされた両足が悲鳴を上げている。

僕ってやはり、おませな女の子に好かれる傾向があるらしい。

やっぱり、将来は保育園のせんせ、かな……。

ともかく、裏片みくは何かを手に入れられたようだ。次のステージへの鍵となる何かを。

そう、人生には山あり、谷ありは当たり前なのだ。

シナリオ??? 魔王

黒を基調としたゴシックロリータ衣装はゆずが攻撃の舞を舞う度に朱に染められていく。その朱はゆずの助けられなかった金意小学校の生徒や教師の生きた証だ。

モンスターが消える度にその胃の内部に在った生きた証達が……飛沫した。ゆずは堪える。今にも声にならぬ悲鳴をあげてしまいうだ。

悲壮な顔をしているゆずを珍しく心配した小波が、
「もう、ママんに買ってもらったお祝い服が台無しじゃない。まっ、小波んとしては、アンバランス ツインテールとお揃なんていやだよ」

と、弱々しく毒づく。

やはり、魔法少女でも両肩の骨が覗くほどの傷と、両足の複雑骨折では立つ瀬がないらしい。

代わりに自分と同じく、血に染まり、所々、裂けた絹から柔肌を露出させた魔王幼女が魔法少女が本来、いるべき舞台に立っている。

小波は不思議な想いを感じていた。胸が温くなる。恐怖を微塵も感じない。

これが信頼？

「ボディエラーの集合体の有象無象の衆が」と、ゆずが叫びながら消化器を放り投げる。

「魔王様に勝てると思っておるのか？ この愚か者め」

宙に浮く消化器が人の域を凌駕した俊敏なる太刀筋を無数に刻まれ、白い煙を周囲に撒き散らしてその身は四等分に飛散した。記憶
呼応魔法の応用 強化抜刀・乱れ。

一つが小波の直ぐ、横を通過した。

「うひゃあああ、こっちは……」動けないんだ、馬鹿魔王！ と小波は言いたかったのだが、それを煙幕の如き、カリ塩系薬剤が小波をも襲った。激しくせき込む。「ごほごほ、少しでもこいつを、ごほごほ、みとめ、ようお、ごほごほ、した。こなみんのばあか」

と、自分をもイライラをぶつける対象にした。

白い煙と煙の間に、戸惑うモンスター達は地図の構図と竜巻の構図の光を、細い黒リボンと子猫の縫いぐるみ付属の黒リボンを、縦巻きの髪と下げ髪を、自分の巨体をすっぽり包み込むほどの闇色の刃を、眼孔に焼き付けて消滅した。一匹も残らずに……。

「ブースト？ 千里のリング、ブースト？ 風のリング……そしてブースト？ 禁断のリング。これが魔王の力だ……」

「膝を突いて格好付けても絵にならないでしょ、あんた……」

「うるさい、小波よりはマシだ。満身創痍ではないか」

「それは……認めるわ」

「何にしても、魔王と魔法ストーカーの勝利だな」

「……」

「おい、何か、ツツコミを。いつもの古瀬小波らしくないぞ」

小波の様子を盗み見た時、何か……ある！ と感じた。真っ青な小波の顔はただ、傷を負って血を失いすぎたからではない。

「和やかムードに移行するところ、悪いけど。顔を上げて見てよ」言われた通りにゆずは即座に顔を上げて状況を認識した。

その先にモンスター達が再び、跋扈し始めていた。数は先程と変わらない。

唇を舌でそつと、撫でる。余裕だ、とゆずは感じた。

「……あれくらい、ゆっちゃんに掛かれば、イチコロだ」

「インチキ……」

「武器も純粋な戦力だ」

その武器——トウリングを開放する。

禁断のリングを表す鎌が足指に宿る。それを確認する間もなく、

戦場へと攻撃の舞を踊りに向かう。

粉微塵に足下に転がる人間の血肉を上履きが容赦なく、踏みしめていく。

何匹だろうか？ 解らぬ、モンスターを切り刻んだ。モンスターの悲鳴がゆずと小波以外には無人となった廊下を突き抜ける。そして、絶命。

ゆずは胸の中に無念を抱いて、闘った。全員、助けるつもりだった。自分にはそれを可能にする力がある。

天永無想、ラグナロクフィールド……。その二つの武具さえ使いこなせば、こんなの危機の一つにも数えられなかっただろう。

ゆずは大きく溜息を吐いた。

「魔王様はまだ、甘い事考えてんの？」

「甘いかな？ ゆっちゃんはそれでも、この世界にあんな地獄絵を持ち込みたくなかった」

「あんなね……これも世界の一つなのよ」

「そうか？ 本当にそうなのか……」

死臭漂う廊下にはかつて、輝かしい未来を紡ぐはずだった雛鳥達の囀りに満ちていたはずだ。

それが今は……。ない。確かにモンスターの脅威は闇打つ鼓動により、沈めた。トゥリングにより、能力を強化すれば、不可能ではなかった……。

それなのに自分は躊躇し……。色んなモノが傷ついた。

「最低だ！」

怒りと共に闇打つ鼓動と呼ばれる鎌で下駄箱を分断した。上半分が斜めに綺麗にずれた。

そのずれて開けた視界の奥に少女がいた。ゆずや小波と年代代くらしい少女がいた。

黒髪はゆずの握り締めている闇打つ鼓動と同義の黒を現しているかのように見える。

深い、深い夜が瞳に宿っていた。

掌に乗っていた桜の花びらをふっ—とその二つの特徴を持つ少女が吹き飛ばした。まるでそれがあなた達の命の結末よ、と告げるが如く。

「魔王様、そう、我々はその最低な力を保つ者。弱輩な存在？　を守る為に使うなんて勿体ないじゃない？　と私の主　明日鳴厘ならば、そう言うだろう」

その人物は粘着質な感に障る抑揚でわざとらしく、口を開いた。とても、ゆったりとした口調だった。

ゆず達に近づく足音が妙に生々しい。その少女は今度は自身に向けて呟く。

「でも……私は生きながらにして死んでいる。関係ないか、どうせ……みんな、死ぬ」

白いブラウスを着た上品そうな印象を受ける少女がゆつくりと、指を口へと運ぶ。

ピィ——、と甲高い口笛。

「口笛？」

そう、首を傾げるゆずは召喚を扱う者ではない。だが、ゆずの相手——古瀬小波は召喚を主として闘う者だ。

ゆずにはただの口笛だが、小波の目には凄まじい量のマインドエラーが口笛の音を応用にして、玄関から校舎外へ、学校外へ、街へと飛んでいく。

「気を付けろ、ゆず！　召喚魔法だ。とても、強力な気配を感じる」

「さあ、魔王と最強のモンスター——竜？　どちらが強いでしょうか？」

と少女がゆずに質問をする。

ゆずが答える前に校舎に劇的な変化が訪れる。それは凄まじい轟音と共に。

天井の一部を破って巨大な爪が姿を現した。空洞から、ぎらついた竜の瞳がゆず達を睨んだ。その睨め付けを受けてゆず達は石化し

たように動けなかった。

呼吸一つがとても、億劫だ……。

それでも、何かを言わなければならないと、闇打つ鼓動を握る拳に力と意志を込める。

埃と共にコンクリートの細かな欠片が墜ちてくる。

微動だせず威圧する竜、さあ……どうする？　と人当たりの良い表情で以て態度を示す少女。

「……お前の目的は何だ！」

ゆずの発言を意外と捉えたのか、首を傾げる少女。

「お前？　私にはちゃんと名前があるのよ。仁良くもり」

「……」

「怒った？　仕方ないな。竜に勝てたら目的を教えましょう」それを合図に竜は大空へと羽ばたく。予感がした。ゆずは思考する、自分を片付けるのに尤も効果的な方法は？　と。走り出すゆずとは対照的にくもりは囁く。「遅いと思うけど」

小波を両手で抱き上げて、そのまま、校舎外へと走る。

それと同時に竜の凶暴な羽ばたきの音が聞こえる。

「敵前逃亡、格好悪い。突っ込め！」

「小波は猪みたいだな。ここは敵の攻撃を回避するシーンだ、確実に」

埃と白粉が髪に絡みつくが払っている暇はない。払っていたら確実に校舎の下敷きにされる。

「ブースト？　奏者のリング」

音符の構図が足指に印される。聴覚が異常なまでに強化されて、風の移動する音までが聞こえてくる。その聴力を保ってして聞き分ける、竜の行動を。

「ゆっちゃん達の息を聞き取って校舎を上階から踏み壊し……圧死させる。単純」

下駄箱という位置からして逃げ切れる。だが、それだけでは意味がない。振り返ちにしなければ。

「ブースト？ 風のリング」

竜巻の構図に相応しく、風のように一瞬で景色を過去にしてい
その速さに堪えかねてゆずの背中に「乗車中の小波がうるさい。

「ちよつ、ちお！ 怪我人乗車中！」

「小波ん、だから大丈夫」

そう、ゆずの言う通り！ 彼女はお兄ちゃんを主に守り、ついで
にご町内も守っちゃう魔法少女 古瀬小波なのだから」

「何処かの物置作つてるとこみたいな理屈を捏ねるなああああ
！ どおおわー」

小波の叫びを完全に無視して、闇打つ鼓動を剣に見立てて、記憶
の底から魔法を呼び覚ます。それは今朝、衣螺絢に見せた宮之ゆず
が現在、使える記憶呼応魔法の中で最強を誇る威力を持つ技。

鎌が紅蓮の剣と化す。

玄関の窓硝子に飛び散ったボデイエラーの液体を右腕に満遍なく
塗りたくる。それはほんの一秒にも満たない。

「小波！ 強化魔法！ ゆっちゃんの右腕」

「ふーん、考えが読めた！ んじゃ、強化！」

右腕に冷たい感触が触れた。その瞬間、ゆずの腕力は二倍に増加
した。これではまだ、天空高く、飛んでいる竜には届かない。

「ブースト？ 戦士のリング。これで力は四倍だあああああ」

「飛べ！ 魔王」

小波の応援を背に、小波を背に乗せたまま、右手で地面を突き放
した。その力を利用して空へと舞い上がる。

「うえええええ、小波んもお。あんた、置いてけよ！」

そんな小波は無視して竜の顎へと目指して鎌を眼前へと構えた。

竜がこちらへと激しい憎悪を撒き散らしている。だが、そんな憎
悪には怯えない。

ゆずは思った。この馬鹿正直な小波といれば、何でも単純な事に
思えた。つまり、こいつを倒せばいい、以上。

小波は思った。じぶんの弱さと対峙するその高貴な姿と並べる事

を光栄に思う。そして、改めて魔王 宮之ゆずと恋のライバルである事実を嬉しく感じる。

ゆず、小波は感じていた。肌に向かい風が当たる度に高鳴る鼓動を、ギアチェンジしていく緊張感が今、はち切れる音を！

「旅は道連れ」とゆずは小波へと言葉を渡す。

「世は？」と小波は問う。

「情け！」

命炎剣が竜の下顎骨へと侵入する。

—— ウオオオオオオオオオ！

炎が肉を柔らかくする。

—— ウオオオオオオオオ！ 逆鱗の声と共に鋭い爪が襲いかかるうとしている。

「さあせるか！ ゆずは小波んの獲物だああああ！」

虚勢とも聞こえる叫び。それは虚勢ではない覚悟を決めるスイッチのようなものだ。

そのスイッチがもたらしたのは、ボディエラーをたっぷり拳に塗りたくった一撃。

一撃が竜の爪を吹き飛ばした。爪が回転し、屋上へと突き刺さった。

それを目視で確認し、爪で攻撃することを躊躇い始めた竜を確認した小波はゆずの肩を肩叩きの要領で叩いた。

「見た！ 見たあ！ これが魔法少女 古瀬小波の古瀬暗殺流 凶きよ詠拳うえいけん」

「……そんな暇ないであろう」

ゆずは命炎剣をさらに上へと進める。それへの抵抗感が……強い。ゆずと小波が墜ちるのが先か？ 竜を絶命させるのが先か？ 汗が頬を伝う……。

竜の歯を打ち砕く。上顎骨へと地獄の業火が届く。

ゆずは歯を食いしばり、力を！ 力を！ と祈る。無理なのか……

…もう、と諦め掛けた時、ゆずの拳に小波の掌が添えられた。

「ゆず！　ここまで来てあんた、諦めるの？　チャンスは――」

「最大に生かすものだろう。知っておる、魔法少女」

「なら、やることは一つでしよう？」

「もう一回、重ねて……命炎剣！」

命炎剣の炎に、命炎剣の炎が重なった。その勢いで竜の頭部は一気に炭と化す。黒い物体がグラウンドへと墜ち、その箇所が陥没した。

竜の巨体が糸の切れたマリオネットのように落下していく。

「あ……ゆず。あの落下コース、ヤバイよ！」

「何を言っているのだ！　建物なんぞ、また作り直せばいい。それまで、他の建物で勉強すればいい」

「あんたはアントワネットか！　うわあわあ、ママンに殺される。お尻ペンペンの刑」

「ほう、それは、それは。ゆっちゃんがそのシーンを睨に焼きつけてやろう。光栄に思え」

「あんたもだよ」

「な、なにいい！　おい、あれ、鳴動拳、とか言う技で木っ端微塵に粉碎できぬのか！」

「それは魔法少女小波んの力ならば！」

「本当か！」

「でも、無理」

「嘘つき」

「そう、何度も撃てないの！　必殺技なの！」

「によわああああ。学校が！」

その瞬間、魔王幼女と魔法少女の時間が凍てついた。

凄まじい粉塵を遮るべく、両腕をクロスさせるゆず。ゆずの服に顔を埋める小波。彼女らが粉塵の晴れた後に見た光景は……かつて小学校だった瓦礫の山だった。

モンスターに喰われたとはいえ、まだ……被害者の死体の一部があるかもしれないに……と思ったら、ゆずは急に虚しくなった。

人はこんなに簡単に死んでしまうのか……。

「死んだ者を哀れんでも……仕方ないのよ。まあ、尤も、あなたの大切な大魔王様もその仲間入りするかもしれないけど、ね」

「だい、だい、大魔王？ ゆっちゃんにそんな知り合い居ないぞ。そんな伝説上の人物を出すな」

大魔王。魔王の上に位置する階級。魔王は大魔王の友人であり、右腕だ。そして、必ず、大魔王と魔王の性別は異なる。それは魔王と大魔王の関係は男女の関係でもあったという事だ。だが、しかし……それは奴隷とご主人様の関係にも似ている。

大魔王の血が何処かに消失したことで……長らく絶え……それは魔法の中での存在に思えた。

その程度の知識しか、ゆずにはなかった。

大魔王に対して不快感を覚えた。今のゆずには好きな人がいた。身も心もその人に捧げたいと思っているその恋心が叫ばせる。

「嘘！ そんな大魔王なんて存在……いるはずない！」

「嘘？ 可哀想に。あなたの保護者でしょ？ 調査済み。魔法省の目から避けてつてのは難しかったけど。そういう事実なら調査できたの。本当っ、憎たらしい。魔法省 エース 古瀬小波、ストーリーカに転職したら？」

ゆずは動揺していた。ゆずの保護者に当たる人物は……この世界では衣螺絢しかない。ターニング ポインターと成り得たのは……同じ闇の魔法を使える種——大魔王だから？ だとしたら嬉しいと……ゆずは赤面した。

それを誤魔化すように寝ころんでいる古瀬小波に視線を向ける。ゆっちゃん、誰のことか解らない小波は知ってる？ と素知らぬ顔。小波の表情は見る見るうちに硬化していく。小学生らしからぬ眉間に皺を寄せた不細工顔だ。

「衣螺絢が大魔王……。ってことはお兄ちゃんに！ お兄ちゃんにあんたは危害を加えようってこと！」

「正解……と言いたいけど半分外れ。そうそう、私の目的だけ……」

「魔王を足止めして、もう一人が魔法の使えない未熟な魔王様
衣螺絢を捕獲すること。これ以上は教えられないわ。もう解るでし
よ？ 危害を加えているのよ」

気怠そつに目の前に立っているご令嬢風の黒髪の小学生は言っ
てのけた。

その態度が古瀬小波を怒らせた。

シナリオ??? 天よりも高き意志を保て！

倒壊した校舎は新生活の崩壊を意味しているような気がして、不安が募った。身体の内からじわりと広がる不安に耐えきれず、ゆっちゃんは両拳を握り締めた。

それに今、さも重要ではない事柄を話すように簡単に、黒髪の女の子——仁良くもりは何と言った。

もう一度、言ってみろ、と怒りに震える唇を何とか、御して言うとした。

「……ゆず、行け」

と、サッカーのゴールの柱に寄り掛かっている短髪の少女——古瀬小波は血を地面に吐きながら、弱々しく呼吸した。その間からこぼれ落ちた一滴の砂のような声だった。

必死に立ち上がるうと自身の血が幾重の筋となって滴る両腕を動かし、地面に触れた。触れた瞬間、顔を顰めつつも安堵の溜息を洩らした……。「まだ、行けるじゃない。魔法少女」

そんな言葉で自分を叱咤する小波の姿に……かつて、自分をその場から逃がす為に勇者軍と死闘を演じた五百人の英霊の姿が重なった。

折れているはずの両足に力を入れて、生まれたての子馬のように覚束ない小波をゆっちゃんは抱き留めた。

「小波。無茶だ！ 死ぬぞ」

「……お願い。お願い、ゆず。お兄ちゃんを助けて。わ、わたしじやああ、きつと……守れない。あんた、今度こそ、全力出しなさい

……」

「駄目だ」

「お願い！ お願い、ここは私が抑える！ これが最後の魔法少女

の闘いだ。虐められていた私に……魔法で仕返することさえできない私に光を、笑顔をくれたお兄ちゃんを助ける最後の……」

近すぎる距離にある顔と顔が吐く息と吸う息の数がゆっちゃんよりも、小波の方がずっと小刻みだ。

こんな時、癒しの少女 四天王の一人であるミクミ・レタスがいれば、この状況を打開しつつ、彼女の得意な治癒魔法で小波さえも治癒できる。ゆっちゃんにも治癒魔法は使えた。だが、それは自分の治癒力を高める程度の未熟な魔法。

必死で勉強したのに……ゆっちゃんの魔法は誰も救えない。

そう、考えている間に小波の呼吸は小刻みから、浅くなっていく。命が消えて、灯火が消えていく。

ああ、いつかのあの声とは違う。声が聞こえる。

「良いのか！ 我が子孫、ベアトリーチエの後に続く者よ。この現実を受け入れるのか！ 我は受け入れなかった。何億回であろうと僕は繰り返したその果ての地獄でも我は闘っておる。僕はそうだ。お前はどうか？ 我が子孫」

その声が脳に突き刺さった瞬間、見えないパイプを通じて、何かが流れ込んでくる。

——幼子が母に手を引かれて、街中を歩いている。それは何処にでもある光景。そんな光景から……くもむらとわ声の主 雲村永久の人生は狂い始めた。そして、創造主に出逢い、多くの命を選定する存在となった。だが、それは遠い永劫の果ての理。

幼子はずいに打ち勝った。ゆっちゃんの見てきた地獄が生ぬるいといえる程の地獄の果てに幸福を掴んだ。それでも、永久は建設途中の天高く聳える塔を背にして、闘っていた。それは神話と同等の一撃で星々を薙ぎ払う闘い。

ああ、この闘いにゆっちゃんは……

絢ちゃんは……

小波は……

いりゅは……

兆詩音は……

参戦する。遠い、遠い、

時の果てに。

未来は黒髪の少女の起こす微風程度ではどうにかならない。

それがベアトリーチェによって神託された気がした。いや、これは神託だ。

心が緊張から解放たれた。

おかっぱ頭の白い髪のアルビノの女兒はゆっちゃんの記憶の中で太陽のような微笑みを浮かべた。ジャンパースカート、薔薇の刺繍入りのオーバーニーソックス、自分の腕に填った手錠から伸びるチエーンの先にある子猫の縫いぐるみを愛おしそうにぎゅっ」としていた。

彼女こそが栄華世界の神、創造主 ベアトリーチェ。またの名を雲村永久。雲村雪と雲村永遠の兄と妹の愛の結晶。世界の敵。忌むべき存在。世界のバグ。そのバグは広がる。

それが時の果てへと、未来へと通じている。

「だがな、お前の意志、一つで未来は崩れる。僕はお前を信じる。時の果てで待つてるぞ！ 理の解放者 ゆず。うわあ、揚羽！ 僕の分のポテト、食べたあ！ 闘いの合間に喰う予定だったのに。だ、騙されんぞ、だいえつとなんぞ、僕に必要なか！ 揚羽なんてもう――」

と、巖かで後半、子どもっぽい声が遠ざかっていく……。

そうだ、自分は墮落した未来を許せない。向き合えない自分を許す理由を見いだせない。

だから、ゆっちゃんは叫ぶのだ。かつての今のベアトリーチェの如く。

「ふ……ふざけるなああああああ！ どいつもこいつも。ゆっちゃんを置いていく。そんなのもう、許容できぬ」

「好きな人くらい守らせて……ゆず！」

「みんな、みんな……ゆずが守る！」

そう、かつてのベアトリーチエのように、勇者軍から自分を救ってくれた魔王学校の生徒のように、四天王や名も知らぬ民のように

気高く、前へ。前へ。ゆっちゃんは一步を踏み出す。

恐れることはない。少なくとも未来は在る！

少なくとも心は死なない！

「ねえ、どうしてあなた達は……自分の命よりも他人の命を優先するの？ どうせ、みんな死ぬじゃない。死ぬじゃない。死ぬのは怖いのに」

何も解っていない仁良くもりが、生徒が教師に質問するように問うってきた。

だが、教える義理はない。

天高く、片手を挙げる。

視線を小波に向けて、場違いないたずら娘的微笑みを浮かべた。

キョトンとする魔法少女 小波ん。

ゆっちゃんの可愛い親友。もっと、キョトンとさせよう。その表情が不謹慎ながら楽しみで仕方ない。

謎のゆっちゃんの微笑みに一步、後退りする仁良くもり。対照的にゆっちゃんは確実に一步、敵——仁良くもりへと歩を進めた。

「貴様には解らぬ。例え、自分が死ななくても……友達を見捨てた瞬間、心が死ぬんだ！ 空っぽになるんだ！」

狼狽える仁良くもり。

もっと、狼狽えてみせろ、とゆっちゃんはさらに吼える！

「闇にたゆたう覇道の威。

世界の断りを知る外なる存在。

ゆっちゃんは欲する。

ゆっちゃんと小波んの恋愛競争を！ 邪魔な者は薙ぎ払う！ 応

えよ、魔王の杖」

すぐに魔王の杖の応えは永劫回歸空間から帰ってくる。それはゆっちゃんの翳した手の上空から黒のスポーツブラが舞い降りてくる。

その黒のスポーツブラから声が聞こえる。今なら解る、この声は衣螺絢の声。何故？

「もう、僕と出会った頃だから、色んな疑問があると思いますけど、ゆず。僕は一斉、それについて、来たる時まで語りません。さあ！僕を装着して！」

「う、うん！ 絢ちゃん！」

その二人の声さえも、暗黒の繭へと溶け込んでいく。

繭内で装着したスポーツブラは変化を遂げる。

一つは——清潔感漂う水色を基調とする布地のビスチェ。ビスチェが構築されたのを見計らうように右肩から左腰、左肩から右腰へと重厚な鎖がゆっちゃんの身体を縛る。ベビードールドレスがその鎖を隠すが、両肩が隠れていない。

そのベビードレスの背後には蔓に絡まれた少女が描かれていた。その少女はゆっちゃんと同じ年齢くらいで、その少女を縛る蔓の持ち主たる巨木は川の底に根を張っていた。この絵がただの絵でないことは解る。先程の鎖と同等の威力を持っている。ベビードレスの中央に癒し石をその身に包んだ真っ赤なりボンが構築される。まるで狙ってくれ、と言わんばかりに。

靴は構築されない。目に見えない保護膜が身体全体を覆う。その膜を覆った瞬間、自分以外の人肌を感じた。不快にはならない。それどころか、自分の半身と出逢ったような幸福感が込み上げてくる。

——ラグナロクフィールド。

もう一つは——光る弓矢を並列に固定され、光る矢を発射する口は封じられ、代わりに刃が伸びている。やがて、二つの発射口から伸びた刃は螺旋を描き、途中から二つの刃は完全に一つの刃へと融合を果たしていた。

ゆっちゃんはその兵器の持ち手を握る。

それに共鳴し、並列した光る弓矢の側面から漆黒の翼が生えた。持ち手は稼働するようになっており、剣を構えた時に不便ではない位置へと稼働させる。

——天永無想。

「さあ、ゆず。仁良くもりを動けない程度に戦力を削ごう」
「うん！」

その声を合図に永劫回歸空間は解き放たれた……。

普通は目に見えないマインドエラーが高濃度故に目視できる。それらが天永無想とラグナロクフィールドに常供給されていく。

光の帯がゆっちゃんの周囲で収束していく。全て、マインドエラーだ。

背後から驚きの声が上がる。

「何、これ。人が操れるレベルの……力なの、これ？」

小波の疑問は的を射ている。今の宮之ゆずでは魔王の杖は使いこなせない。故にタイムリミットが存在する。あれから半年ほどの歳月が流れて、成長したとはいえ……保って二分だ。

頭の中にストップ ウォッチを思い描き、それを押す。

カチツ。

同時にオービット チェーンを伸ばす。足下に矢の形の光が浮かぶ。それは運命のリング。自分の完全同位体の位置を掴むリングだ。

そのリングの力と、オービット チェーンを共鳴させる。

「オービット チェーン。絢ちゃんのどこまで伸びていけ！」

鎖は勢いよく、天空へと伸び、商店街の方へと伸びていく。

それを唾然として見送る仁良くもり。もはや、原理が意味不明、といった感じだ。

残り一分五十秒。

トゥリングを多用して闘うゆっちゃん本来の戦闘スタイルはほぼ不可能だ。か、といって命炎剣や強化抜刀では仁良くもりを塵も残さず、消滅させてしまう。

「仁良くもり、退け！ 魔王たる我の力を侮る？ とはもはや、考えてもおらんだろう？」

口調を鋭く、重く変えていく。普段の子どもっぽさが残ってしまいが……記憶の中に微かに残るベアトリーチェの口調を真似ればい

い。

しかし、仁良くもりは動じない。

ワンピースの下に隠して装備していたホルスターから、銃を手に取り、迷わず構える。

そして、寸分間もなく、発射。

回避する必要もなく、ラグナロクフィールドに銃弾は穴さえ、傷一つさえ、与えられない。

「無駄であろう。我と闘うのであれば、聖剣 アキシオンほどの威で掛かってこい」

顔を引き攣らせて、一步步後退する仁良くもりに鋭い視線を投げかけつつ、オービットチェーンに意識を向ける……。

スーパージロシミサエに入っていく鎖。人の死体……。燃えていることから、炎の魔法の使い手。これだけの威力のある魔法ならば、中級魔法？

血の気が引く思いがした……。紛れもない戦場に絢ちゃんは出逢った。

敵は何処の組織。

こちらの世界には疎い。知っている組織は魔法省……くらいなものだ。そして、魔法省が魔法少女を登録制にしていること。

では、目の前の尻餅を突いている仁良くもりは非公式の魔法少女である可能性が高い。

残り一分。

「ふむ、そう怯えるな。誰にでも失敗はある。しかしな……この僕に、このゆず様に斯様な無礼……許されると思っておるか……ないだろう」

仁良くもりはもう、応える気力がないのか、小刻みに身体を動かそうと必死になっている。

……オービット チェーン。衣螺絢捕捉。

鎖を絢ちゃんの腕に巻き付けさせる。これで心の中で会話が成り立つ。

——絢ちゃん、無事。

——無事です。何だか、解りませんがとても、腕の立つ剣士に助けられました。

——その目の前にある、鎖を握って早く！

——よく解らないですけど……はい。

絢ちゃんが鎖を握った直後、変化が訪れる。

枷が外れた気がした。

身体が軽い。絢ちゃんが側にいる気がする。違う……これは自分だ。こうなる可能性のあった自分だ。

そう、それこそが——

「完全同位体」

——だ。

残り∞。

今や、ゆっちゃんの身体を隠すほどの高濃度のマインドエラーが吹き荒れていた。

周囲の音がマインドエラーの轟音によって弱まっていく。

「次元が違う……。先までのゆずも凄いいけど、今のゆずはどうやって……勝てそうにない」

感嘆の聲が小波から微かに上がるが……呼吸がかなり、辛そうだ。血を失いすぎている。

ゆっちゃんは即座に実行する。

——絢ちゃん！ 小波が大変だ！ もっと、心と心の距離を縮めて！

——やり方は自然と解ります。イメージすれば良いんですね。心の距離が近くなるような。手を繋ぎましょう、ゆず。

——そ、そんなでは不満であろう、男として？

——だっ、抱きしめろ。ゆっちゃんを縫いぐるみたいに！

——ゆずは子どもなんですね。甘えんぼさんですね、可愛い。

——その認識が改められない限り、百パーセントの同調は有り得んと思え、絢ちゃん

——そうなんですか？

そのやり取りの後……ぎゅっと抱きしめられている感覚を感じるふと、後ろを向くと誰もいない。約束を守った、絢ちゃんが。

ならば！ 使えるはず、自分の立ち入りできなかった領域まで、魔法を。

「同調！　十パーセント確保。治癒魔法、記憶呼応魔法、翻訳魔法向上。闇魔法解放」

そう、口が唐突に情報をゆっちゃんに与えた。

魂だ。一つになった魂と魂が吼えたのだ。さあ、君の願いは叶うこれで！　と歓喜に震えている。

「上級治癒魔法　フルヒール」

淡い光がゆっちゃんの掌に出現する。その光に羽根が生えて、満身創痍の小波の胸元にすっーと溶けていく。

小波の身体が不自然に一度、震える。

それを合図にして、骨の覗いていた両肩が肉を取り戻し、少女特有の艶のある肌を取り戻した。骨折した両足も元通りに修復される。普通は患部に触れなければ、ならないのだが……と、ゆっちゃんは首を傾げた。

「ぬうあ、すごっ、アンバランス　ツインテールすごっ。一瞬つて。究極魔法級よ、これは！」

小波がその場でぴょん！　ぴょん！と兎の如く、跳ね回っている。うるさくて仕方がないが……小波のおかげで理解した。

これは一段階、レベルの押し上がった……究極魔法　エンジェルヒール。凝縮圧縮無しに周囲にある高濃度のマインドエラーのみで至った。

ならば、今の宮之ゆずは魔王の力の本分である闇魔法が使える。

絢ちゃんは無事。小波も無事！

交互に愁いはない！　試すは自分の限界。

「さあ、お仕置きの時間だ！　下位闇魔法　クレッシェンド　ダイク」

闇がゆずの拳へと集まる。その闇は人の内臓を弱らせる闇。

外側を攻撃する空気・火・土・水・エーテルの五大元素魔法の対を成す内側を攻撃する闇魔法はその無慈悲な威力から異端とされ、さらに扱える者は魔王の一族のみ。

内臓は鍛えられない。闇魔法が貴重な為、完全防御の魔法は研究されていない。則ち、絶対的威力がゆずの拳に宿っている。

下級から中級に変動しない事からして、純粋なゆづちゃんのみの方では相当な月日を経ないと……闇魔法は扱えないようだ。

落ち込んでいる場合ではない。敵を退ければ！明日はある。だが、殺す？ そんな無慈悲はゆづちゃんにはできない。

だから、可能な限りは威力を弱める。その加減も今の力ならばできる。

闇を振り抜く。

一閃の矢と化して、やつとの思いで立ち上がった仁良くもりへと決まるはずだった。

長い、長い、闘いはこの一撃で終わり、後はどうしてこんな事をしたのか？ と問い質すだけだった。

だが、壁が現れた。

いや、壁ではない。巨大な鋼鉄の盾だ。こういう物質的な魔法の盾はボディエラーを伴う攻撃を掻き消す盾——上級結界魔法 ナイトシールドくらいなものだ。そうではなく、マインドエラーとボディエラーを掻き消す能力のある絶対防御。

脳裏に一つの魔法名が過ぎる。有り得ない。しかし、紛れもなく、それは！

「禁断魔法 アイギスの盾」

と、盾を発動した人物がさも、それが何？ というように気怠げな口調で言った。

盾の陰に隠れて、姿が見えない。だが、女の子である事は声質から推理できる。

「禁断魔法……だと？ 何者だ！ その領域、じじいの領域だぞ！」

じじい……、四天王が一人、エミリルサーマしか使えない禁断魔法系統。

「魔法の才能の在る者を食べ続ければ、こういう結果が得られた。ただ、それだけよ。ちびさん。あなたも美味しそう」

盾の裏から舌なめずりが聞こえるような気がした。ぞつとする。

「超人……。だが、二百人喰らって漸く、究極魔法だ。超人の一族全てを取り込んだ母様だって禁断魔法には辿り着けなかった！」

「あら、そちらの世界では割とポピュラーなのかしら？　そうそう、私の名は明日鳴厘。この不細工の飼主よ」

「厘……。さ、ま……。」と、仲間が助けに来たにしては恐怖に震えている仁良くもり。

「安心して裏片みくの方はターニングポインターや剣の腕の立つ奴がいるから近づけないけど……。力押ししかできない魔法使い二匹しかいない戦場からあなたを連れ帰ることは可能だわ」

「ゆず！　やつちやいなさい！　アイギスの盾だが、知らないけど！　今のアンバランス　ツインテールはきっと、魔法省でママしか太刀打ちできないくらいに最強よ！」

小波の言葉はありがたい。けど、首を横に振る。

「超人……。魔法の才のある者を喰らい、強くなる者はどんなびつくり箱を持っているのか？　正直、暴けない限り、闘わない方が得策だ。敵が撤退するならば、命が助かったと思った方が良い」

悔しい。奥歯を噛み締める。

だが、ゆつちゃんは様々な戦場で学んだ。油断大敵。

「そうそう、力を手に入れたからって！　自分より強い者はいないって思い込むのは愚者。また、会いましょう、魔王様と魔法省の子犬さん」

「会いたくない！」と、ゆつちゃん。

「子犬って何よ！　ゆずより、カッコイイ扱いしなさいよ」と、叫ぶ負け犬な小波ん。

そんなゆつちゃん達を残して、厘とくもりの二人はこの場から突

然、消えてしまった。

移動魔法の禁断魔法……に違いない。

静けさが教えてくれる。結局、ゆっちゃんは誰も救えなかった。完全同位体の同調に最初から至っていれば、どうだろうか？ 結果は……。

そんなゆずの掌を掴み、走り出そうとする者がいた。魔法少女古瀬小波。

「さあ、ゆず？ 何してるの！ 魔法省に連絡して事後処理を頼む！ それが正しい魔法省所属の魔法少女よ！」

「いや、ゆっちゃん、魔法省じゃないから」

「ふーん、良いこと、思い付いちやった小波ん。あの力は……うん、そうするべき」

「おーい、また、絢ちゃんをダシにした妄想か」

「失礼ね。あれは明確な未来。お兄ちゃんとわたすいの」

「死にかけたのに相変わらず、ストーカーチックだな、魔法少女」

「あ、その事だけど、ありがとうね。おかげで救われちゃった！」

救われたか？ ならば、ゆっちゃんは一人だけだが、漸く……誰かを救えるようになったのだろう。嬉しい。

こうして、経験値を積み重ねていれば、いずれ、いりゆ達の背中に追いつける気がした。

今は小波と一緒に手を繋いで、公衆電話ボックスへと急ぐ。

「あ、財布持ってきてない！」

「安心しろ。ラ王を買うお金としてゆっちゃんは今日、五百円を持つてきておる」

「何故？ ラ王」

「ラーメンの王様。ゆっちゃんにはぴったりの食べ物だ」

「はいはい、つてか、あんた……五百円つて五百円玉？」

小波の問いにゆっちゃんは迷い無く、首を縦に振った。

「はあ。公衆電話なんだから、五百円玉は使えないのよ。魔王、マジつかえねえー」

「おい！ それを言うならば、小波は数億倍、使えないであろう」

「いいや、魔王は十億倍つかえねえー」

「小波は一万億倍、使えないであろう！」

「ざ・ん・ね・ん！ でしーたあん♪ 魔王様、そんな単位、ありませーん！」

「小波、やるのかあ——」

「良いわ。勝った方がお兄ちゃんゲット！ よ」

こうして、魔法少女と魔王幼女の闘いは——

——始まらなかった……。

駆けつけた衣螺絢により、駄目でしょ！ 喧嘩は、と怒られ、彼女達は仲良く、しゅんと頂垂れた。稲穂が頭を垂れているようだった……。

シナリオ??? 魔法省へようこそ♪ 魔王様!

鏡の如き、反射率で太陽の陽をその身に受ける高く聳える塔——
クリスタルパレス。それを衣螺絢は呆然と眺めていた。

魔王と魔法少女の子どもっぽい喧嘩を諫めて、小波に百円を渡して魔法省に連絡を付けてもらった。そこまでは無難な対応で、その場にいる絢、秀平、小波、ゆず、みくの五名は後、到着した魔法省の職員にスーパーヒロシミサエと金意小学校で起きた事件を詳細に話せば、自分達の役目は終わりと考えていた。

人生は得てして上手く廻らないものだ、とこんな達観した意見を絢自身、高校生になったばかりで言いたくはなかった。

ベンツと俗に呼ばれている黒い長細い、あれ? どうやって入り組んだ道へ進んでいくんだよ的な自動車が五十台ほど、グラウンドに駐車した。

「おい、絢! なんだ、このお嬢様仕様のお出迎えは?」

秀平が絢のスカートを引っ張りつつ、尋ねてくる。びびっているところ、悪いがスカートなんて顕然たる男子が触れるのはどうかと思われる。

一方、裏片みくは絢の前へと飛び出ると、スカイロッドを展開した。

「大魔王様の敵、みくの敵」

すっかり、衣螺絢を新たな主と認めた黒髪おかつは魔法少女は、マインドエラーをその身に寄せ集める。

その真摯な姿に絢は「あのお……」「そのお……」「暴力は……」と小さく呟くくらいしかできない。可憐なセミロングに、髪先端に外跳ねくせつ毛のある少女なんて外見なので……とても絵になる

光景だ。

小波はそのみくの懸命さに危惧を覚えた。

そう、こいつはゆずと小波の戦争に介入する気だと。それが間違
いだったとしてもここは牽制しておくべきだ。魔法少女は狡賢い！
これも戦場で生き残る為なのだ。

「って、いうか、先から気になってたんですけどお、誰？ この子
？ 魔法少女 古瀬小波の新たな障害？ だったらマジウザイン
ですけどお」

粘着質な小波の声に、背中を向けたままのみく。

小波はこの泥棒ネコお！ とぶるぶる、拳を振るわせる。フルヒ
ールによって全回復したから、いつでも魔法少女たる拳を振るえる。
力で正義を語る……それが魔法少女のジャスティス！

「ん？ 魔法省の魔法少女？ お前は魔王を守らなくて良い？」

「ってか、質問に応える。ちなみにこれ（ゆず）、めちゃ強いから
守る必要なし。上級魔法を究極魔法に変換して使うし、何あれ？」

ゆずに今度は会話のバトンが渡る。

しかし、魔王の杖や完全同位体、ターニング ポインター、大魔
王のどれがその効果に貢献したのか？ いまいち、解らない。可愛
らしく、ゆずは首を傾けて誤魔化する。

小波の質問に応えたのは、黒塗りの自動車から降りてこちらへと、
ウェディングドレスに似た豪華な服装の集団——その先頭にいる人
物だった。

「エクシード……、魔法省ではそう呼ばれています」

「ママ？」

小波にママと呼ばれる存在は古瀬津波しかない。魔法省の立場
は魔法神技官である。どうやら、津波の後ろにいる者達は皆、部下
らしい。

「エクシードは、凄まじいマインドエラーの要領による無理矢理の
飛び級って感じかな」

「では、同調すれば……究極魔法から禁断魔法へ押し上げるエクシ

「ドも可能ってことか。明日鳴厘に……ゆっちゃんが対抗できるのだな」

と、興奮するゆず。

そんなゆずを絢は訝しく思う。闘うことが嫌いだったゆずは、魔王の力を手に入れて人が変わってしまったのだろうか？

ゆずに聞こうとした。でも……聞けなかった。それは自分のエゴかもしれない。普通に学校に行って、普通に友達と遊んで、普通にお勉強なんかを頑張る。そんな人生を歩ませて良いじゃないか。

だが、そのエゴは見えない運命によって今、刈り取られた。そう、完全に。

「お迎えに上がりました、絢様、ゆず様」

津波が絢とゆずの前で跪いたのを合図に数十名の魔法少女達は同じように跪いた。

そして、決意の言葉が魂の迸りとなって虚空を木洩れ日と化す。

「我が殿原の私兵。魔法省の始まりにして、魔法省そのもの！」

「我が主 大魔王 衣螺絢様と異世界の王 魔王 宮之ゆず様に！」

「この世界の全てを与えん為に！」

その木洩れ日は、魔法省を照らす存在。大魔王への忠義。

その圧倒的な声量に驚く五人。秀平なんかは、石に躓いて危うく、転倒してしまいそうになった。

「さて、魔法省へのご案内しますので、お車に乗って下さい。絢様とゆず様——」

津波の方をどん欲な獣の如き、視線で睨む小波！ 効果は抜群だった。

「——と、はあ、小波は私のお車でクリスタルパレスへのご案内」
小波は見事、絢とのご乗車を獲得した。

小波が絢に話しかけようとした時、それよりも先に絢が津波に話しかける。

「津波さん！ 頼みがあります」

「聞きましょう、聞きましょう」

「頼みというのはですね。あの人達のしようとしている事を止めて欲しいんです」

魔法省の魔法少女数名が裏片みくの手足を取り押さえて、一人の魔法少女がみくの両腕に手錠を掛けようとしていた。

「大魔王様、気が狂いましたか？」

「一応、大魔王さんって魔法省ですごく、偉いんでしょう」

と、気軽い口調でわざとらしく、絢は言った。

「あらあら」 絢さんも言うようになったわねん。それって、殺人犯を見逃せ？ ってこと。魔法での殺人は死刑って相場が決まっているんですよ、魔王様」

「……絢、良い。みくは死を選ぶ。みくはそれだけの死をまいた」

また、みくが自分の命も、他人の命にも背を向けようとしている。絢はそんな人間が大嫌いだ。大嫌いをどうしようもなく、大好きに変えてみたくなるお人好しでもある。

故に太陽のように微笑むのだ。

「駄目ですよ、そんな逃げは。僕の下で、大魔王の下で、モンスターから、脅威から世界を守る魔法少女になってください。残りの人生をその為だけに費やしてください」

絢らしい言葉に周囲の魔法少女達はどうしたら良いのか？ 解らず、取り乱した末、自分たちの上官である古瀬津波の判断を仰ぐ。ただ、視線にその思惑を乗せて。

風が桜の花びらを引き連れて、激しいダンスを踊っている。そのダンスにシャープペンシル、教科書、消しゴムが加わる。そう、春のお祭りに無粋な客として紛れ込ませる結果を作ったのは、確かに消しゴム達の野蛮な乱痴気騒ぎをじっと、目で追っている小学生だ。おかっぱ頭のどこでもいそうな小学生だ……。魔法さえ、使えなければ……。いや……。使えたからこそ、裏片みくは救われる。

津波はそう、考えて笑った。

独りぼっちだった娘の小波に、初恋という名の鏡を与えた衣螺絢。一般人である北裏秀平をモンスターに対峙させるまでに必要な衣

螺絢。

虚勢を張る魔王だけど、まだ……小学生の幼女 宮之ゆずの心を解きほぐす衣螺絢。

どれだけ、絢さんは優しいんだ！ そう、大声で笑うのだ。笑うしかない、と津波は思い、そして、判断を下すべく、少女に試練を与える。

「随分と難しい罰ですね。絢さんにしては珍しい。さあ、選びなさい連続殺人犯 裏片みく。あなたは……」

裏方みくは突然、絢のローファアを脱がせると、足が汚れないように両膝に乗せた。上目遣いのみくに絢はドキドキした。鼓動を単調にしなければ、自分は将来、保育士になれない！ と自分を戒める絢。

そんな絢の心情なんて露知らず、露わになった足指先に顔を近づけた。そして、静かにくちづけした。それこそがみくの忠誠の証。

「……決まってます、衣螺絢様の剣となり、盾となり、人々の平和を守る」

「そう。その子を離しなさい。その子は今から魔法省 特殊部隊 ガーディスト 古瀬小波の下に預けます。一流の魔法少女の理念を小波から学びなさい！」

津波の毅然とした声がみくの背後で聞こえるが、みくの優先は全て、衣螺絢に関することへと書き換えられた。であるから、当然、絢を見守るように視線を送り続けていた。その視線一つ、一つが絢には天空から降り注いでくる雹の如く、回避不可能な痛みに感じた。しかし、みくは絢に視線を送るのを止めない。

あまつさえ、絢の方を向いているのに、津波と会話を試みている。「うん、わかった」

と、みく。これは絢に言ったのではない、津波に言ったのだ。

「ちよっ、ちよっ、ママ。小波んの所属が著しく、ぶはっ！」ある事実に気づいた古瀬小波が抗議しようと津波を言い詰める。だが、さすが、親。やはり、子供を黙らせる術は心得ていた。津波は胸の

谷間から、一切れの紙を小波の胸元へと入れた。だが、悲しいかな、胸がないので……谷間には挟まらず、上衣の裾からその紙切れが再び、みんなの前に姿を現した。皆、小波以外……泣きそうな顔になった。「何する、ママ？」

津波はこの弛緩しそうな空気を吹き飛ばすような轟音で咳をした。

——任命状

古瀬小波、本日をもって魔法省 特殊部隊 ガーディスト 所属とす。尚、この部隊は大魔王 衣螺絢様を守るためならば、全ての権限およびありとあらゆる手段を講じても処罰の対処にはならない。

そう、紙には書いてあった。

それを見てしまった絢は「僕ごときになんてことですか……」と小さく呟き身震いする。一方、小波はあれやこれやと考えているのが丸わかりなにやけ顔。魔法少女＋ストーカーの属性を持つ強力な変態少女が武力を手に入れた瞬間だった。

大事そうに小波は胸元ではなく、ランドセルに収納した。

「今のが任命状。魔王様が現れなかったら、大魔王の血を次の世代に残す意味で古瀬小波はその母体として選ばれるはずだったけど、魔王様が現れたから、小波は大魔王様を守る最後の剣になるのよん」「ちよつ、ちよつ、ゆずが現れなきゃって！ ゆず、お兄ちゃんのお嫁さん候補。ママ、質問です！ ゆずを殺して魔王様はいませーんでしたってことには……」

小波んピンチ！ だが、小波んは小波んなので悪い方向にポジティブだ。

そんな小波んに正義の鉄槌が下された。ママンの拳。

「あいたあうう、冗談なのにいん」

さすがの打たれ強い小波でも、現役最強の魔法少女（読者の皆様、あんたって少女なんか呼称されるほど、若いっけなんて言ったらぶち殺しまーす♪ ばーい、魔法少女な古瀬津波より、愛しい読者様へ）？ の拳は堪えきれない。地面に突っ伏して、頭を抱え、泣く

小波ん。

そんな小波のお尻を、

「なるか！」

と叫びと共に容赦なく蹴るゆず。ゆずは先ほどまで小波に親友としての情を感じていたのだ。これからは正々堂々と絢を取り合う仲、好敵手と書いてライバルになろうと思っていた。

……ぶち壊しだ！

「ゆっちゃんは小波に殺される前に、くつぐりの刑にして返り討ちだ！」

魔王幼女と魔法少女が仲良く、なれる日は来るのだろうか。

そして、女の子みたいな男の娘な衣螺絢は二人の少女の他に、託児所 友達百人できるかな？ のようじょたちが将来、お嬢さんに迎え入れたいと密かに激闘を繰り広げているのに気づけるのか？

「ん、やっぱり、僕は好かれてますね。僕って天職はやはり、保育士だと思うんですよ、ねえ、ねえ、そう思いますよね？」

「……そりゃあ、あんまりだろう」

「ん、あんまりって。さあ、車に乗りましょう」

秀平は打算抜きで動ける絢だからこそ、自分が守りたい！ 守りたい！ と思い続けていることを再確認した。

そして——力が足りないことを自覚した。

「力が足りねえ、あいつと……絢と一緒にいるには。くそが……」
と、呟いた。

すぐそこに在るのに、駆ける度に風の精霊の微笑に触れて、横にゆらゆら揺れる黒髪。その髪と髪の間合間に除く処女のような真っ白いうなじ。ほっそりとしたけど、健康的なやせた身体。

すぐそこに在るのに、届かない初恋……衣螺絢。そんな彼女がふと、振り返り、どうしましたか？ って言いそうな笑顔で秀平の心に囁いた。

天使の囁きに心がホットミルクを飲んだ時のように暖かくなった。だから、秀平は何でもないと嘘を繕える。絢の為ならば。

クリスタルパレスは驚くことに旧首都 東京にその芸術品と見紛う身体を居住させていた。旧都市。何故、旧か？ それは絢自身、歴史で習ったことなのであまり、実感がない。かつてはクリスタルパレスがあつた場所には東京駅という人が一日、何万人と集まる巨大なターミナルステーションが建っていた。

「そんなに珍しいのん？ 東京が」

「はい、あんな話、信じられませんよ」

絢は真珠のように透き通った階段を登っていたが立ち止まり、広がる景色を観察した。

創造と破壊と称すべきような構図。秋葉原と呼ばれる街の周辺は比較的原型を留めており、今も栄えている。

一方では、ボディーエラーやマインドエラーの濃度が酷すぎて今も立ち入りが禁止された地区がある。それらの異端の力を扱える者のみしか、生きることのできない不毛の土地。瓦礫の山が無数に広がる。荒廃した景色。

二年前の七月十日、最初にモンスターが現れた地が金意市だったのだが、最初に街として大打撃を受けたのは……二年前の七月十二日の東京で起きた一億体のモンスター襲来——真夏のクリスマスプレゼント。

拳を握りしめる。

クリスマスプレゼントだって？ 神様なんだろう、全員救えよ！ そう絢は叫びたかった。いや、絢にそういう気持ち植え付けているのは、廢墟に漂う三万人の犠牲者の救われぬ魂なのかもしれない。

拳を誰かが包み込んだ。ゆずだった。ゆずの顔は悲壮感漂う小学生とは思えないものだった。

辛気くさくなってしまった空気を払い落とすように、津波が若々しく微笑んだ。高校生と偽証しても百パーセント、ばれないのではないか？

「創造主　ベアトリーチェ様が一億体のモンスターとたった一人で戦い、無傷で勝利したって歴史？」

「だって、モンスターですよ？　魔法やボディエラーを付属しない技では大してダメージを与えられない相手ですよ？」

ああ、本物の神様が出現したとなれば、そんな事象さえも超えるのだろうと、絢は自分の言葉を裏切る思考を胸の奥に抱えていた。

ベアトリーチェ教、現在、宗教と呼ばれるジャンルはそこに集約された。本物の神様の姿を地上の民が見ただけで今まで在った全ての宗教がオママゴトになったのだ。それこそが神の威。

「栄華世界はベア様の理ことわりの基に在るから、モンスターという異質の存在でさえ、逆らえない。良いですか？　絢様」

そこで言葉を切って、全員に睨みをきかせる津波。だが、津波は基本的に小波を成長させた容姿なので何処か、元気っ娘の気が纏わり付いて離れない。実質、ぜんぜん怖くない。

少しわざとらしく間を置いて津波は再度、口を開く。

「ベアトリーチェ様の敵に回ってはいけません。それだけが大魔王様が唯一、守らなければならない絶対ルールです」

「嘘でしょう？　教科書の航空写真で見たベア様って——」

神であるベアトリーチェが公開することを公式に許した写真は数点、存在している。その中で、絢が気に入っているのは、髪型は薄茶色の長髪とふんわりとしたお嬢様笑顔の少女——那世李緒（絢の母親　ルビー・サーマに瓜二つ）が脇に手を入れて、ベアトリーチェ（昔の衣螺絢に似ている。瓜二つではない）を抱え上げている構図の写真。二人とも、とても幸せそうだった。

思わず、かあさん、と絢は呟きそうになる。その写真を心に思い浮かべる度に。

いけない。自分を必死に律する。その果てに口からこぼれ落ちた言葉が、

「ただのようじょ」

というベア様の容姿に関する感想。

白いおかつぱ頭で、ゆずと同じくらい小さくて、生意気そうな笑顔。そんなのを幼女と言わずして何と呼ぶ。

「いいえ、ただのようじよではないのです」 うわっ、ようじよつよい。魔法省のベア様研究では、以下の事が判明しています。ベア様が何かをお眩きになった瞬間、全モンスターが停止。後はベア様の一方的な暴力。それと同時に東京に住むほとんどの人間が雲村永遠、雲村雪、那世李緒と名乗る少年少女によって退避させられています。ベア様や彼らの周囲には無数の揚羽蝶が飛来していたそうですよ」

僕は神様という存在が信じられなくなった。全モンスターが停止したのならば、誰の攻撃の余波で三万人という犠牲者が出た？ 他でもない神 ベアトリーチェの仕業だ。

神ならば、何故！ 何故！ 全員、助けなかった！

その力があるはずだ。

目をぎゅっと瞑る。ベアトリーチェがこの世界を創造してくれなかったらきつと、僕はきつと、この暗黒で一人ぼっちだった。そんなすごいことができるのに……何故。

誰かが階段を下ってくる。

耳元に懐かしいレモンティーの香りの混じった吐息。優しい……優しい母の声。

「戦いに犠牲はつきもの、なのです。 あーちゃん」

「母さん」

「めっ、あーちゃん、教えたでしょ？ 私を呼ぶ時は、リー母様ですよ」

あ、あれ？ この人、隠す気？ ゼロなのでは？ リーは李緒の李？ 幼い頃からの疑問があっけなく、解けた。

ゆつたりと微笑むルビー・サーマこと、母は真っ白い甘口リと呼ばれる衣装を身に纏った姿で僕を抱きしめてくれていた。

「……圧倒的な力を感じる！ これが神様に近い存在」と震え上が

る魔王 宮之ゆず。

「ち、違います、私はルビー・サーマ。ハリウッドでは失踪扱い、小二くらいだった息子を残して何処かへ行っちゃう困ったルビー・サーマ!」

ぎゅつと、抱きしめる両手に力が加わる。それほど、否定しているところ、悪いですけど、リーは李緒の李?

「小波んを鍛えてください! お兄ちゃんのママン」と土下座する魔法少女 古瀬小波。

「私、ただの女優ですから、弱いですよ」

抱擁を解き、困ったなあ〜と苦笑するリーは李緒の李なんでしょう? 常人。

「嘘付いてる。マインドエラーやボディエラーとは異なる強い力を感じる。無理のない正常な力」

スカイロッドを構えて、臨戦態勢な裏片みく。石を李緒に向けて投石しようとしたところを焰の鎖が石を抱きしめてそのまま、母の手中へと運ばれた。

「火遊びされては困ります、認めましょう」そうこう、言っている間に焰の鎖はただの焰へと変わった。決して消える事のないかのように掌の上で踊る焰。「ふふつ。私と戦う必要なんてないです。もちろん、ベアちゃんとあなた方が戦う道理はないですよ。この聖炎^{ひじりえん}のリオが証人ですよ」

そこには僕の知らない母がいた。

ベアトリーチェと共に在る母がいた。

薄暗い部屋に両側に配置された無数の獅子像の口から、仄かな光が漏れていた。その光は揺らぐこともなく、そこに在り続けている。触れてみたいと惑わせてしまう魔性の炎。

「絢ちゃん、それは下級火炎魔法 ライトだ。触ると熱いぞ」
ゆずの手が絢の指先に触れた。ゆずの薄いブラウンの光彩の白光が神秘的に、絢の蒼い瞳に映る。

ゆずの瞳は幼い頃、大切にしていたビー玉のような眩さを放っていた。幼子にとってはそれが唯一無二のものだった。成長した今でも……僕は唯一無二のものを保っている。自分の変わらない習性に絢は苦笑した。

釣られて、ゆずも吊り目を絢に向けたまま、大人びたお嬢ちゃんえくぼを作った。

「あのおー、良い雰囲気になってるとこ、悪いんですけどお。後がつつかえてるんですう。小波ん、的には早く進めなんです、お兄ちゃん」

「ごめんね、小波ちゃん。歩き疲れちゃったのかな」絢は疲れたあーと身体全体で表している小波をおんぶする為に屈んだ。「ほら、乗りなよ。まだ、歩くみたいだし」

まだ、歩くというのは推測だが、李緒と絢の子ども時代について語る津波を先頭に未だ、鏡のように磨かれた大理石の床しか、特徴のない長い廊下を歩いている。思い出したように扉が左右に疎らにあるのが……それらは見向きもされない。

というか、何で知ってんの？ リー母様、小学二年の夏以来、直接会っていないのに……と疑問に思っていた絢の背中を――

「うわぁ！ 暖かい湯たんぽみたい……」

と呟いて感想を言ってしまう程のぬくもりが背中全体に伝う。その熱は小波という小さな魔法少女が一生懸命、生きている証だ。

これも唯一無二の大切なもの。

「うはあ、小波ん。今なら死んでも構わない」

「駄目です、小波ちゃん。僕は僕が殺させない。今はターニングポイントとしての特性でこの世界の法則から外れた力は効かないなんて能力しか、ありませんが……いずれは僕がゆず、小波ちゃん、それに——」
「絢はスカイロッドを両手で握りしめて、周囲の警戒を怠らない小さな騎士に目を向ける。「みくちゃんを守りますよ」

「ん、違う。みくが絢様、守る。それ、大原則」

それこそが全てだと、みくは絢のスカートの裾をぎゅっと、握りしめた。正直、歩きづらいが、唯一無二の大切なものだ。これも。

「僕は……随分、昔よりも欲張りになりましたね」

「はあ？ お前が欲張り？ 何言ってるんだ。そんだったら、世界中の人間が欲張りにならねえ」と勘定が合わないぜ」

「了、大げさですよ」

「だってよ、お前、スーパールのチラシの裏でメモ帳作って前に持ち歩いていただろう？」

「ん、でも、誰か解らないけど、僕にメモ長をプレゼントしてくれただ、ほらこれ！ 今も使ってるんですよ、可愛いでしょ！」

通学鞆から、絢は兎型のメモ帳を取り出した。それは小学生の幼女達が好みそうな兎が表紙のメモ帳。

はつきり言ってるきゅーと、だった。

「気味悪いだろう？ いてえなあ、何するんだよ、小波！」

小波に横から、肩を殴る強襲を受けるが所詮、ボディエラー抜きの小波の拳は小学生そのものの威力しかない。了は少し顔を顰めただけで、話を続ける。

「だって、絢の机の中にラブレターと一緒に入っていたんだろう？ 告白しておいて、彼氏になって下さいだとか、デートしましょつ、とか次のアクションねえーし。まるでそんなの必要ないって感じじ

やねえ」

「そんなまさか。善意ですよ、善意。僕がいつも、子ども達と一緒に町内の清掃をしているから、神様からのプレゼント」

そんな日常的な会話が非日常的なクリスタルパレス内部でできるそれは産まれてからすぐに親友となった北裏秀平とだから可能なのだろう。この優しい男もやはり、絢にとって唯一無二なのだ。

世界には絢の無くしたくないものが溢れている。きっと、みんなの無くしたくないものも溢れている。

だから、世界は世界として成り立つ。

みんながそれぞれの唯一無二を守っているから。

>こなみんのイカレタ脳みそ内部♪<

にゅふふっ、お兄ちゃんが小波んがあげたメモ帳を使ってくれた。お兄ちゃんには知らないだろうけど、そのメモ帳には秘密があるのだ！ なっ、何とその手帳を肌身離さず、お兄ちゃんが持っているだけで……こなみんとお兄ちゃん是一緒にいれる♪

手帳の表紙の中に、小波んの爪が入れてあるのら。

本当はもっと、凄いものを入れたかったけど、バレたら、ママンに教育的指導のお尻ペンペンが施行される。いやいや、お兄ちゃんが大魔王様だつて発覚した以上、それ以上の教育的指導があ！ あゝ危ねえ……入れなくて良かったピィ——（こなみんの脳みそ

さえ、文章化を拒絶するあだるとっ！ な内容の為、自粛）なんて、は、はずかしい……にゃん♪ にゃふふっん。

……あ、温かい。お兄ちゃんの背中。

ね、眠っちゃおう。良いよね？ 良いよね？ もう、ゴールしても良いよね？

……

……

……ぐう。

いつの間にか、僕の耳元には小波のささやかな寝息が聞こえてくる。何処か、安らぎを与えてくれるのは、小動物のような柔らかそうな顔がすぐ近くに在ると想像させてくれるからだろう。

僕は少なくとも、目的の場所まで到着するまで小波を起こさないと決めた。

どんな夢を見ているのだろう、小さな魔法少女さんは？

無数の天窓から注ぐ陽光に照らされて、檀の高い王座のような一席が輝いている。その椅子は背もたれが深く、読書をするには最適だ。

そう、衣螺絢が暢気な感想を心に描いていたのはわずか数秒。

津波がさあ、どうぞ！　と言うかのように目配せと、手の動きでそのお誕生日席よりも恥ずかしい席に座れと絢を促す。

「い、いやあ。僕はですね、目立つのって嫌いですし、遠慮しないなあ。みんなと同じあちらの席が良いです」

絢はお殿様席から数歩、離れた会議室なんかでよく使用される長テーブルを指した。椅子は書斎で使われるようなオシャレチェアだ。そこに座っていたウェディングドレス仕様の女性達は絢に指を指されたと勘違いして、身体をぴくつと一瞬、宙に浮かせた。心なしか、顔に皆、緊張感を漂わせている。貧乏揺すりまで始める人も。

「あ、すいません。ぼ、僕、あなた方を指さした訳ではありません」
「そうそう、うちのあーちゃんのしつけは完璧です」

絢の両肩から両腕を回して、頬を絢の右肩に擦りつける那世李緒ゆずと小波があつ、と低く羨ましそうな声を漏らす、これは母の特権だ。だが、その特権がいつも、息子が良いように解釈するとは限らない。

「離れてください。リー母様！　僕は子どもではありませんから」
その言葉だけならば、李緒も笑って、「まあ、母離れですか。でも、わたくしはまだ、子離れしたくありませんよ」、と柔和な微笑に託して絢の耳元まで届いただろう。

しかし、絢は普段の優しい少年からは想像できない拒絶の一言を発する。

「僕はもう、リー母様の知る小学二年生の男の子ではありませんから僕は――」

「絢！ お前、それは！」

慌てて絢の口を塞ぐ秀平と絢の前にすらりとした美女がたった。

その美女は前髪を揃えて、後ろ髪の先端を淡い青色のビー玉で左右に結わえたいわゆるツインテールと、雪大福のように形の良い胸、強い意志を秘めた黒瞳が特徴的だった。そして、髪の色は誰かを連想させる。

若い人なのに白い髪？ はて、何処かで……。

「こんにちは、李緒の娘さん。お母さんが悲しむようなこと、言ったら駄目だぞ」

その声は幼さを残した甘さたつぷりな香りを醸し出していた。

幼い！ 解った。

絢は秀平の掌をくすぐることによって逃れてすぐさま、美女に話しかける。

「ベアトリーチェ様？」

「ぶーぶー、ちよつと惜しいかなあ。正解はベアちゃんくもむらとわのママこと、雲村永遠くもむらとわ。ベアちゃんくもむらとわのもう一つのお名前も雲村永久くもむらとわ」

「何で名前が二つも？」

「スノウ・エデン、イヴ・エデンは約束しました。君が目覚めることがあったら、僕らは結ばれて……ベアトリーチェという名の子どもを授かるう。目覚めないのであれば、僕はこの世界を作り替えてまでも世界の理を超越するよ愛する妹よ」永遠の語る言葉は何処か切ない小説の一場面を朗読しているように思えた。言葉の裏の意味を探そうとしていた絢は見知らぬ感触に気づかなかった。絢の唇に蝶が止まっていた、永遠の指という名称の。「ねえ、知ってる？

純粋な願いは何処までも人をないがしろにした達成で満たそうとしているんだよ。それが現時点での君の質問に対する答え」蝶は絢の

唇からゆつくりとなぞるように離れていった。「わーちゃんの息子さんだからサービス」

「それは明日鳴厘みたいに？」

明日鳴厘。その名前はすらつと絢の口から紡ぎ出でた。超人の力を持ちながら、大魔王の家系のみが使える究極魔法を超える究極魔法 ソイル・サイクルを手に入れようとする少女。

そんな明日鳴厘の心には……純粋な願いが宿っているように思えた。だが、その願いは永遠の言う通り、他人さえも害する。

「ふふっ、そう。魔法省の調べでは超人？ らしいわね。さらに超人の力を増す為に自分やモンスター達を強化している。超人になる製法を一番、ご存じなのはゆずちゃんなんですよ？」

「その通りだ」

「そう。でしたら彼らの強固さも知っていますね、今のあなた方ではパーセントの勝ち目もないでしょう」

痛烈な永遠の言葉に絶望の声も出せないゆず。

その隙に永遠は絢の頬に口づけをする。

「わーちゃん！ もしかして、あーちゃんラブですか！」

「半分は李緒ちゃんだからつい、ね」

両手をつなぎ合わせてぴょん、ぴょん、と跳ねる李緒と永遠。

それを呆然と眺めていた絢の膝に強烈な蹴りが入る。綺麗に決まり、もの凄く痛い、子どもの蹴りに痛がったという風評を立てられたくない。我慢する絢。

「それよりも、絢ちゃん、座れ。その後、ゆっちゃん達も着席する。なあ、こーなみん」

蹴りを食らわせただけではなく、ゆずは絢が嫌がっていたお殿様席への着席を促す。しかも、小波とまで結託しようとする。

小波がゆずと手を組むわけがない。事、僕関連では何故か？ その確率が高い。

だが、絢の予想を反して、小波は妖艶に微笑んだ。

「お兄ちゃん、悲しいけど、年増のキッスでも乙女の心は気づくの

ん」

「小波ちゃん、後で李緒と永遠とベア様とママンから、ちょっとお話が。お尻がいつも以上に壊滅的なダメージを受けると思っけど、将来のS的生活に備えて頑張れ」

「頑張れない」

「逃げられない」

「によ、によああああ」小波、全力でダッシュ！「しかし、小波んは鬼母からは逃げられない」

はい、小波んの言う通り、ママンの熱い抱擁。

その光景を哀れと思いつつ、絢はむっとした顔のゆずに視線を合わせた。

「さあ、座れ。絢ちゃん。ゆっちゃんも幾ら、と」きつと、禁断の言葉を言おうとしていたのだろうパルスのな。ゆずの良心が咎めたのだろう。それをかみ殺して、口をまた、開く。「し、仕方ない。ゆっちゃんも絢ちゃんと同じ席に座ろう。これで恥ずかしさ半減」

「ありがとう、ゆず」

ゆずの両脇を持ち上げて、お殿様席へと歩を進める。

ツインテールが頬に触り、こそばゆい。

ぬ、ぬいぐるみ！ と絢とゆず以外の人々はゆずが絢によって運ばれていくのをそう、評していた。

「そっといえば、殿原って？」

と、絢は津波に聞いた。金意小学校でその名が津波達、魔法省の魔法少女から挙がっていたからだ。

「殿原胡桃。それが私の本当の名前」殿原、那世、雲村。殿原胡

桃は世界の秩序を。那世李緒は表の世界を。雲村永遠は裏の世界を制す。それは全てはベアちゃんお気に入り、絢ちゃんの世界征服の為に」

「うえ？ そんなの止してよ」

「無理ですよ、もう、征服の後の世界ですから。ちなみに今日、ク

リスタルパレスに大魔王様をお迎えするに当たって、全国主要の企業等に絢様の顔写真を送りましたよ。この人が大魔王だよってね」

「僕の生活がどんどん、崩れていくよ、なんでだろう」

「そういう星の下に産まれたんだよ、お兄ちゃん」とちゃっかり、絢の右膝に着席の小波。

「そう、そう、王者は産まれながらにして王者なのだ！」とご満悦なゆず。

「二人とも、膝の上から退いて」

「大魔王ってそんなに偉いんなら、ゆっちゃん良いこと思いついた！」

「奇遇だねん、アンバランス ツインテール」

「「せーの！」」

「「一夫多妻制にしようぜ！」」

「バンド組もうぜっ！ 的なノリで言わないでください」

結果、永遠の「美少女ゲームみたいでわくわくするね。李緒！」

↓李緒の「うちの子を勝手に美少女ゲームの主人公に仕手あげ……」

わーちゃんの願いならば……：そうですね、考えなくも」↓津波の「

ハーレムエンドは好きな男の子、この場合、好きな男の娘と結ばれてみんな、幸せになるんだから良いと思うのん」の三コンボで絢は一夫多妻制を導入せざるを得なかった。

導入しないと、小波と一緒にお尻が壊滅的なダメージになるような気がした……。

ごめん、小波。僕は君ほど、お尻の強度は高くないんです。一人で受けて下さい。

後日談。古瀬小波のお部屋にて。

——だいすきなあやへ。

あのね、あのね、あや。

みほはね、みほはね、あいすくりーむよりも、ままよりも、あや

すき！ あやすき。

みほはあやとこいびとさんになりたい。

おへんじ、きかせてね。

まほうしょうりつ　くりすたるばれすまほうがっこう　いちねん
ごくみ　かなきみほより。――

「死ね、いちねんごくみ　かなき　みほおおおおお！」

と、ゆずが拙い字で書かれたおてがみを獣の如き手さばきで切り裂いた！

「小波ん、ゆっちゃんの方は仕分け作業終わったぞ」

そう、これでゆずが受け持つ三歳～十歳までの幼女のおてがみは処分済みだ。

――可愛い、可愛い男の娘　衣螺絢ちゃんへ！

絢ちゃんのお胸を舐め、舐めしたい。

お尻も、髪も、頬も、舐め、舐めしたい。

もう、この熱い心は止まらないよ！　ああ、止まらない。

どうしてくれるんだい？　絢たん。

もう、これは僕ら、突き合うしかないね！

会社員　蓮井廉太

郎――

「誤字なのよね、誤字なの！　変態なのよ！　蓮井廉太郎、二十六

はすいれんたろう

歳！」

と、小波が汚い字で書かれた汚物を獣の如き手さばきで切り裂いた！

「あつ、ゆず……。チリトリ用意しておいて正解だったねん。今日は大量だ」

そう、これで小波が受け持つ十七歳～三十歳の汚物による汚物は処分済みだ。

今日も魔王幼女　宮之ゆずと、魔法少女　古瀬小波はお兄ちゃん
とついでにご町内の平和（最近、お兄ちゃんと交際や結婚を迫る奴
らと戦う為、休業中……）を守る！

だが、そんな彼女達も新しい小学校への転入が決まり、今日から大忙しだ。何しろ、旧都市 東京にある魔法省立 クリスタルパレス魔法学校への転入が決まったのだから。

さあ、今日も良い一日を！ 過ごそう！ と幼女な神様が応援しているような太陽が世界を温もりで満たす。その温もりの意味をみんなが理解できますように。

シナリオ??? 神々の領域

暗闇とは、目を瞑った状態に似ている。目視できる範囲には、静しかない。真の暗闇には、動は存在しない……。

レースアップブーツに触れる感触が確かに、自分が地下へと下っているのだと教えてくれている。

そのレースアップブーツの持ち主の姿は異様だった。腰には純金で作られた剣帯を装備し、金色に輝く剣——神剣 ベアトリーチェ、銀色に艶めく剣——理剣^{りけん} 永劫^{えいこう}を剣帯へと。フードを目深に被った意味もなく、彼女が彼女たる特徴である白銀の髪がさらりと朱色の瞳へと近づこうとする。その度に小学生と間違われかねない身長に似合った甲高い声で、

「僕はこんな事、本当はしたくないんだ」

と苛立ちを白銀の髪を払いのけるのに向ける。

そんな袖無しジャンパースカートの少女を少女の腕に鎖によつて繋がれた子猫のぬいぐるみはどう思っているのだろうか？

少なくとも、

「ベアちゃん、やっぱ、隠密活動仕様じゃないね！ 揚羽はそんな仕様ないよ。めっちゃ、近接戦闘仕様！ ずばばん！」

と元気に喋りまくる少女の両肩に止まる紫色に輝く揚羽蝶の羽根をその身に宿した一糸纏わぬこびと少女とは違う反応を示すだろう。調整世界の神 ベアトリーチェはその少女の言葉には耳を貸さない。後、何分、時を止めたまま、この世界に留まることが可能だろうか？ 多く見積もっても、三十分が限界だ。上位に位置する理の解放者では世界がその存在を抱き続けるのはほぼ、不可能だ。世界が理の解放者を許容できる時を過ぎれば、世界は理の解放者の力によつて壊滅する。

その為、常にベアトリーチェを含む上位の理の解放者は世界の外——歪曲次元空間を住处としていた。

「でも、ベアにはだーいすきな雪に、みみるとある、娘の^{みお}、そして……揚羽ちゃんがいるから寂しくないんだもん、もん！」

「僕の思考に土足で入って来ないで！ 揚羽」

「親友だから、大丈夫！」

「う、し、し、しんゆう、かああ……うん、うん、親友は良い言葉だ。良いだろう、ベア様はとても寛大だ。親友の戯れ如き、意に介さぬ」

親友という言葉にベアトリーチェはかなり、弱い。親友「揚羽の法則はもう、一億年経っても変わらない。」

「しかし、この光景ではその戯れに乗る気にはなれない」

階段を下った先には煌々と明かりが灯されていた。

機械音と、甲高い子ども達の絶叫。

ベルトコンベアに乗せられて、両手、両足を縛られた五歳、十六歳までの子ども達が何も纏っていない状態で運ばれてくる様は何処かの工場を連想させる。だが、これは生きている人間だ。ベアトリーチェはそのやり口をよく、知っている。そう、この残酷なやり口は！

ベアトリーチェの力が解放されていく。それはベアトリーチェが願うだけで解放される範囲に在る力——タイム ダウンの発現だった。

機械音と、甲高い子ども達の絶叫が止んだ。彼らの動作は停止している……。

ベアトリーチェと揚羽は頷く。二人とも考えていることは同じようだ。

「この世界の神の権利を行使する、世界よ。我が剣 ベアトリーチェに集え、集え！ 我が声に従え、愚民ども」

神剣 ベアトリーチェを握りしめ、虚空を一太刀する。

その一太刀で子ども達の自由を奪っていた戒めの縄が消失した。
神には誰も逆らえない。

ベアトリーチェこそが舞台でいうところのデウス エクス マキ
ナを起こす嵐。

その嵐を止められる役者はいない。神という上位に対抗するには、
全てが役不足だ。

故に結末は神の勝利だ、常に。その勝利を人は奇跡と呼ぶ。

さあ、奇跡をこらん、あれ！

金色に輝くベアトリーチェに揚羽蝶——揚羽が同化し、ベアトリ
ーチェの背に羽根が生えた。その羽根はこの世の汚れを一切、受け
付けない純粋な白だ。

ベアトリーチェの体躯が空間からかき消えては、人では不可能な
位置へと再度、現れる。

ベアトリーチェが通った後は……ベルトコンベアの残骸が暗い闇
を舞う。残骸が音を立てる事を許されない塵へと分解されていく。

これこそが、神の手加減。

これこそが、ベアトリーチェが自らの世界ですら、活動を制限さ
れる理由となつた世界との完全融合。その名もフェアリーフォーム。
塵は唐突に現れたマグマによって消滅した。

タイムダウンの効果で動けぬ、子ども達は風によって宙に浮いた。
さながら、見えない乗り物だ。その乗り物の一つ、一つにベアトリ
ーチェの視点が宿っている。今や、彼女の視点は小説の技法——神
の視点と同意。

風の一つ、一つはクリスタルパレスへと飛んでいく事だろう。

揚羽の特性、飛翔能力を十全に使いこなし、さらに地下へと目指
す。目指しているだけで神の救いと破壊は眼下で行われる。

意志のある者がいたのなら、その誰の介在も許さない力に恐怖
のあまり、失禁してしまうに違いない。邪な思考を持つ者さえ、こ
んな力を欲しないだろう。これは力の粋からはみ出した脅威なのだ

から。

故に……ベアトリーチェは容赦しない。自分の大嫌いな奴には。幼子はいつまでも子どもらしい無邪気な横暴さを華奢な体躯に秘めて時を過ごしていた。

調理室らしき小部屋を発見する。

その小部屋には死肉の悪臭が漂っていた。わざと風でシャツトダウンしようとはしなかった。ベアトリーチェの鼻孔にその匂いが届く度に……彼らは神に訴えるのだ。

——映像が脳内に浮かぶ。

七歳くらいの少女は二つ、年の離れた妹の命を守る為に自ら、明日鳴厘の前に立ちふさがった。

……明日鳴厘。ジェーンの後継者。

明日鳴厘は少女の勇気をほくそ笑む。そして、ナイフを少女の前に落とした。

「あら、ナイフを落としてしまったわ、いけない、いけない」

少女——汀羽根^{なぎさはね}はぶるぶると震える身体を両腕で支えつつ、銀色に輝く武器を胡乱な瞳で眺めていた。取ろうか、取るまいか？——瞬、迷う。

妹の明美^{あけみ}が羽根の身体にひつつく。ナイフを取って人の事を傷つけちゃ駄目！　と言うかのように。妹は良い子だ。身代金目的に誘拐されなければ、そして、その誘拐犯が目的を達せず、人の肉を求めていた明日鳴厘に引き取らなければ……未来は輝いていたはずだ。妹と自分と同じ金意小学校に入学し、そこらは楽しい楽しい小学生ライフが広がっているはずだった。それを！

羽根は妹を突き飛ばし、ナイフを握った。そのまま、厘へと突進していく。

厘に刃が近づく。

想像した。自分の握りしめるナイフが衣を裂いて……柔らかな肉へと沈んでいく様を。

ナイフを持つ手が緩む。

その手にピアニストのように長い指が絡む。そして、羽根の耳元でその指の持ち主である厘は囁いた。

「こつちよ、こつち」

厘の導きによって、厘の腹部へとナイフが沈んだ。

「あ……あ……」

その狂気を向ける厘へ、羽根は言葉をぶつけることさえ、できず……座り込んだ。

廃ビルの冷たい床に蟻が一匹、我が物顔で歩いていた。その蟻を厘のブーツが踏みつぶした。その事さえ、厘は気づかず、嬉しそうに微笑んだ。

ああ、殺される。そう、確信した。

「痛い、痛い。ああ、まだ、この感情が在る。私は大丈夫なんだ」
厘がそう言った後、羽根は手足を縛り付けられて……床に転がされた。

明美の身体が解体されていく。

「あら、綺麗な足、私に下さいな」

「うあがああああああ！ おねえちゃん」

「ふふっ、楽しい。傷つく時ってこんな顔してるんだあ」

「ああ、ああ……」

泡を吹いて、明美はこちらを見ている。助けて、と顔を歪ませている。その顔が真っ赤に染まった。

「あら、ごめんなさい。おねえちゃんとお話中だったのかなあ……。でも、もうお話できないね」

明美の両耳が無くなっていた。

「ああ、神様、どうか……。助けて！ 神なんていない……」

映像はそこで途切れた。――

「……すまぬ。だが……明美とやら、僕が助けよう。妹との日々を」
「ベアちゃん、駄目！」

>理、解放

時間管理システムにリンク

過去軸一二三一二四四四四 限定解放

ベアトリーチ

工転送不可能

永劫回

帰空間 展開

対象者 汀羽根、汀明美

放て！

…… 囲い込み成功。

永劫回歸空間により、こちらの時間軸八九二八二三八八へと、

汀羽根、汀明美転送可能……<

「ベアちゃん！ これ以上、フェアリーフォームの力を使うのは！」

「解ってる。だけど、僕は全てを救いたい。例え、僕が望んだこの世界に僕自身がいらなくなっても」

「ベアちゃん……。私はいつも、一緒だよ。ベアちゃんと」

「頼りにしてる、揚羽」

「空間を切り裂け！ 理剣 永劫。特殊スキル解放 空間破り」

理剣 永劫の一撃が空間を切り裂いた。切り裂いた箇所から微かに見えたのは、階段だった長い長い階段だ。その階段のある空間から黒い大きなシャボン玉が飛び出してきた。

空間は修復される。

黒いシャボン玉を切り裂く。中から出てきたのは傷つく前の汀羽根、汀明美だった。

「ベアちゃん、三十分の世界滞在時間を……二十九分 三十秒に訂正。ごめん」

「揚羽のせいではない。それがこの世界でのルールだ。禁断魔法とやらよりも神 ベアトリーチの方が数億倍、危険なのだよ。神殺しを成し遂げた本来、神になることすら、許されぬバグだ。全ての実験世界を破壊するバグ」

「怒るよ、ベアちゃん」

「失言が……過ぎたようだ。どうも、揚羽の言葉には僕は弱い」
「親友だからね」

「この子達は本来、全ての記憶を消去して親元に返す手はずになっているが……まだ、明日鳴厘の野望が潰えていない」

仲良く手を繋いで眠る姉妹。羽根をベアトリーチェは自分の背中に乗せようとした。だが、なかなか……乗せられない。何故？

「何故？ って顔してるけど、ベアちゃんの方が小さいよ？ 物理的に無理」

「イヴイヴと見た映画では主人公が助けた人間を背中に背負い、両腕でもう一人を抱きかかえていた。僕にできないわけないだろう」

揚羽はひらひらと飛び、ベアトリーチェを観察する。どう見ても、生意気な小学一年生の幼女にしか、見えない。

「……幼女が血だらけながらも格闘シーンを乗り越えて、そんなダンディーな助け方した挙げ句に親指をくいつと立てる！ 仲間に向かって。なに、その特殊な人向け展開」

「僕は幼女じゃない！ れでいいだ」

「はいはい、世の中のようによは九割方、そう言います」

「何処の調べだ？」

「揚羽ちゃん脳内委員会の調べ」

「仕分けされそうな委員会だな」

他の被害者達も救済したかったが、どうやら……本当に手遅れのようだ。もう、ベアトリーチェですら、声を聞くことはできない。

声から空間を割り出して……という手段が取れない。

きっと、彼らは自然へと還元されたことだろう。そして、新たな生を受ける。そのシステムはベアトリーチェの意志には左右されない。

意志の在る者に左右されれば、きっと、世界は歪んでしまっただろう。

今回は、声を聞いて助けずには入られなかった。何処までも幼子

であることを止められない神様。それが今のベアトリーチェの位置だった。

「ベアちゃん、ともあれ、これで奴らの食料はストップできたね」

「ああ、禁断魔法よりも……超人という存在は危険だ。ある特定の能力を持つ者を食らうとその能力が捕食者に受け継がれる。丸々ではないし、微量なものだが……雪が言っていた。努力はいつか、報われるものだってな」

「報われない為につてことだね」

「そういうこと。後は神様の仕事じゃない。人間の仕事だ」
ベアトリーチェは白子猫の縫いぐるみの耳を甘噛みした。

シナリオ??? 予感と、絶対運命

魔法省を訪れてから翌週、魔法省立 クリスタルパレス魔法学校へ登校すべく、ゆず達が取ろうとしている手段は空から行く、という非常識なものだった。

それに対して、絢は、

「冗談ですよ。うちは納豆を一粒、一粒、残さず食べるのを家訓にしているくらい、貧乏なんですよ。両親いないですし！」 絢の母親 ルビー・サーマこと、那世李緒さんは生きています。但し、息子の衣螺絢ちゃん（男の娘さん）が長い間、母親にシカトを喰らっていた為、絢さんは拗ねております、萌えですね！ 古瀬津波・談。

と朝っぱらから喚いては、今更ながら東京まで行くにはどの手段もお金が掛かることに気づいたのである。

お金があれば、愛さえ買えるなんてちょーポジティブな言葉があるが、その反対は絶望しかあるまい。

絢の青春の憤りを隣で聞いていた津波は勝手に調理して食べていた目玉焼きをちゃぶ台に静かに置き、笑顔でさりと人でなしな台詞を吐く。

「大丈夫よ、絢ちゃんは李緒の息子！ 絢ちゃんの本当のpapan はね、ベアちゃんのpapaなの、あれ？ 知らなかった、ごめんね、どうした、どうした、男の娘！ 元気がないぞ。ふぁいとぉ、おー」 絢の脱力した日干しの干物のような片腕を無理矢理、動かし、俺はやるぞ！ ごらぁあああ！ のポーズ。「そういうことはベアちゃんとはママ違いの姉弟だねん。ベア姉たまは、神様！ 絢ちゃんは男の娘。あつ、絢ちゃんは大魔王でこの世界の支配者！ その二人の権力さえあれば、ジャンボジェットの一機や二機。楽勝

で強奪だあ！」

しかし、絢はそんな津波の言葉は左耳から入り、右耳に通過していく。いわゆるこの駅では止まりません状態だった。

絢の口が動いている。でも、声が聞こえない。大好きな絢の事を知りたいのはようじょとして自然な心の動き。ゆずと小波は絢の膝の上に乗っかり、耳を絢の口元に近づけた。

「これは現実なんです……。否定しちゃ駄目だ、生きる、絢。お前は虎のように強くなれ。鷺のように空高く、舞え！　そして、神様の如き……。そんざい？　あれ？　神様って僕のお姉ちゃんじゃあああああ！　うつわあああああ……」

女装したら世界一である少年の心が現実に追いつかないのを尻目に、小波の発現「空から行こう」は本人が細かく、ゆずの保護者衣螺絢と小波の保護者　古瀬津波に説明したことにより、一気に問題解決となった。

小波は自分の召喚した鷺達の足に掴まって、東京まで一飛びしようとの事だった。

その案に誰もが乗った。絢はタダなのは良いことです、と頷いていた。

鷺の足を両手でぎゅっと、掴み、下は極力見ないように努力した。どうも、初めて利用した鷺の不安定感にはなれない。ゆずは欠伸をしつつ、眠たげに目を擦っている魔法少女　古瀬小波を眺めた。

「何？　ゆず。こなみんの美しさに惚れた？　だったら、お兄ちゃん下さいな」

「李緒が一夫多妻法案を政界にこり押しして、たったの一時間の審議だけで通過したから、ゆっちゃん達はいつでも絢ちゃんのモノになれるのだ。今更、争うことに理があるか？　小波」

「魔王様は欲がないのお。それでよく、魔王と名乗れたものだね、イツヒヒ」

小波が何故か、毒リンゴを持ってそうなお婆様笑いをした。正直、

似合いすぎていた。

だが、小波とゆずの服装はいまいち、昔話の雰囲気には馴染めな
いだろう。魔法学校は服装自由なのだが……絢の曰く、年頃の女の
子の正しき服装であるセーラー服を絢の提案で着ている。地味な紺
色が太陽に照らされてより強調される。

「欲か。ゆっちゃんはいつか、調整世界の人々と暮らしたい」

叶わない未来だと思っていたが、自分には力が在る。その力を育
てていけば、人の生命の根本さえも扱える魔法を生み出すことは可
能ではないのか？

ゆずはその想いを捨てられない。

それは魔王の杖を僅かながらも使いこなせてから、徐々に膨れあ
がる想い。

「……無理だよ」

冷たく小波がゆずを言葉で突き飛ばした。その声は怒りさえ滲ん
でいた。

朝の人々の営みを観ながら、小波はゆずに諭す。それはとても、
優しく……親友想いの声。

「ゆず、治癒魔法の限界を知っている？ 治癒の禁断魔法 エンジ
エルヒール・オールでさえ、強大な運命をねじ曲げる治癒は行えな
い。死という運命を覆すにはその死を与える人物よりも超越した力
を持つていないといけない」

そう、絶対運命だとしたら、その世界の神の力さえも超えなくて
はならない。

「そんな……のおる訳ないか」

ため息混じりの息は更なる天へと駆けていく。

「いるよん。たった一人だけ、私たちは知ってるよ」

悪戯混じりのいつもの小波顔でゆずに顔を向ける。

早う言え！ と首を動かし、ゆずは抗議する。

「ベアトリーチェ。この世界の神」

「でもさ、ベア様がそれを許すと思う？ 一人二人の話じゃないよ」

「小波、ゆっちゃんは確信している。ラグナロク フィールドさえあれば、天永無想さえあれば、禁断魔法以上の力を手に入れられる」
自分が言った慢心がいつか、事実になると確信している。

バベルシステム。今、いる世界で限界の力を利用可能にするシステム。それさえ、自由に使えれば、ベアトリーチェとさえ、遜色のない戦いを演じられるだろう。

「危険な考えだよ」

その呟きはゆずの慢心の先にある結末を見抜いているようだった。そんな真面目な話や、五十メートルを何秒で走れるか？（二人とも真剣勝負をする気はなく、互いに妨害工作で対抗）等の話をしているうちに東京の上空まで到達した。

クリスタルパレスの背後にある木造の建物群が魔法省立 クリスタルパレス魔法学校だ。

クリスタルパレスの尖塔の中空に白いおかつぱ頭の少女がいた気がした。

「誰だろう？」

ゆずがもう一度、確認すると、そこにいるはずの少女はいなくて、そよ風だけがそこには存在していた。

あれ？ と頭を捻り、些細なことだと微笑む。

「小波」

「何よ？」

「ありがとう」

「珍しいなあ、こなみに礼なんて」

「小波が善人な事をしなかったからだ。その機会が無かったんだ！ ゆっちゃんを無礼っぽく脚色するな」

「小波ん、善人だよ」

「来る日もストーカー、来る日もストーカー」

「恋する少女はみーんな、ストーカーなんだゾ」

そう言って小波は開けた草地へと両足を着ける。

ゆずは驚の足を離し、綺麗に着地した。

さあ、楽しい楽しい魔法学校での一日の始まり、始まり。

アルビノの少女は微笑んだ。

永遠に初めて買って貰ったジャンパースカート、お気に入りの子猫の縫いぐるみ。

それらを伴い、お空に浮かびながら朝食を楽しむ。それがアルビノの少女の日課の一つ。

本来ならば、少女の母親　雲村永遠もこの場にいるはずだったが、何でも那世李緒を連れ立って、息子の服を買いに行くとか。

だが、息子なのにフリルが正義！　とか、リボンが黒かな？　白かな？　とは一体、どういうことなのだろう？

後で少女は父親の雲村雪に聞いておこうと心のメモ帳に書き留めた。

口元に卵焼きの欠片がくつついてるのを気にせずに、宙に浮いているトレーから牛乳に手を伸ばし、一気に飲み干す。

げっぷう。

「何故、背が伸びない。僕は牛乳を毎日、一パック飲んでいるんだぞ。僕は甘いのが食べない主義なんだ」

そういう主義を主張しているのだが……両親にバランスの良い食事を勧められ、従う少女はやはり、小さい背丈に合った可愛らしさの持ち主だ。

ほら、今だって頬をハムスターのように膨らませている。

中々、消化仕切れないのはトマトだ。嫌いだという訳ではないのだが、好きという訳でもない。そういうのが得てして、たちが悪い。乱暴な風が吹き荒れた。

「あ、あうう」

驚いたベアトリーチェは手にしていたプチチョコレートケーキを落としてしまった。

小さくなるプチチョコレートケーキ。

消えるプチチョコレートケーキ。

ばいばい、ベアちゃんと寂しそうに別れを告げたプチチョコレー
トケーキ。

何故？ 急激な向かい風が吹いたのか？

答えはその風を起こす程のスピードで通り過ぎていった鷲に掴ま
ったツインテールの少女にある。

あれは誰だ？

うん、知ってるぞ！ あれは母親違いの弟 衣螺絢の将来の嫁で
はないか！

ベアトリーチェは頭の中で自分の階級の位置を変える。

新たに出てきた弟の嫁候補は当然、自分よりも遙か、下の位置に
在る。今、そうした。

まるで犬の階級決めみたいな行為なのだが、ベアトリーチェは気
づいていない。

「少しお灸を据える必要がありそうだな、近いうちに」

食べ物の恨みはとて、怖い。

そう、とても……怖い。

シナリオ??? 灯火の命

暗い病室は本当に嫌な風景だ。

ため息にそんな想いが装填されているようだった。言葉にしくとも、兆詩音の表情は暗い。

握りしめた聖剣 アキシオンの眩い輝きが個室を照らしている。その光が音にとっては希望だった。その光でベッドに横たわり、穏やかな寝息を立てている坊主男を救うはずだった。

聖剣と同じ光が坊主男——兆詩桜魔の全身を輝かせている。掛け布団さえも金色に微かに色づいていた。

「何故…… どうして、聖剣の力でも癒せないの？」
解っていた。予感していた。

昨日、桜魔が路上ライブの途中で唐突に倒れた。観客の一人が素早く、スーツのポケットから携帯電話を取り出すと、すぐに耳をあて、救急車を呼んでくれた。その間にも桜魔は口から血を吐いていた。

「……薬を！ 薬を！ 音！ あれ、効くんだよお、くつ、ヤブが！ 俺はまだ、あの薬さえあれば……まだ」

呻きながらも桜魔が声にした薬は確かに、ギターケースの隅に何錠か、小瓶に入れてある。だけど、音は知っていた。そんな薬は効果がなく、桜魔の担当医がもう、君に効く薬はこの世にないんだとね…… 不思議なこともあるもんだ、と述べていたように本当は効果がない。

桜魔が生かされている力は本来、この世界にはないもの。エラーマスター様によって創造された聖剣 アキシオンの特殊能力 エナジーヒール。それこそが桜魔の本当の薬だ。

それを知らない桜魔は必死にギターケースまで這おうとする。

唇に付着した血を手の甲で拭き取る。五指へと薄黒い血液が流れる。爪先から、アスファルトの凹みの隙間に血液が溜まった。

それを見届けるように、息を整えていた桜魔が再び、腕を前へと動かす。小枝のような腕が動いたたびに耳元で、錆びた鉄の軋むような濁音が聞えるような気がした。

音はそれを聞くのに堪えかねて耳を両手で塞ぐ。けれど、濁音は防げない。

「桜魔、無駄だよ。その薬、本当は効かないんだ」

「何だって……嘘、付くなよ……」

アスファルトを爪で引き裂く。勿論、人間の力では引き裂けはできない。爪の先が割れる。

這う度に、紅い手跡がアスファルトに印刷された。

桜魔の呼吸が空気を熱せさせているのだろうか？ 全身から汗が絶え間なく噴き出る。あつ、私が桜魔を止めなければ、と熱気に飲まれていた両足を音は動かし始める。

「桜魔！ 救急車が到着するまで静かに待ってて！」

腰を曲げ掴んだ桜魔の肩骨は少しでも力を入れれば、砕けそうな程……皮と骨しかなかった。いつの間に……とショックで口を開けたままの音へ、後方へと押しやる強い衝撃が加わる。

まさか、と桜魔の方を視る。その瞬間にも音は後方へと倒れかけしていく。

桜魔の両腕が小刻みに震えていた。その手は澄み切った星々を指さしていた。

今にも宇宙へと還りそうな寒気と夜が……やせ細った両腕へと絡みついている。その腕を再び、自分の場所へと！ 現在の勇者ではない自分の場所へと、闘いをやっ……放棄できる自分の場所へと！ と支えてくれたライブを見に来た観客の両腕を振り切り、桜魔へと歩を進める。早くしないと、連れてかれる。自分の届かない星空へ。

「駄目だ。やつら、医者が俺の……げぼっ」

桜魔は音を睨み付けた。その間にも……片手で唇を覆う指と指の間から、血管を血が通るように規則正しく、零れていく。

もう、隠している余裕はない、と決定的な一言を……。しかし、と音は首を振る。

嫌われたくない。やっと、手に入れた初恋。親友が味わえなかった時の欠片。それを手放せない。

灰色だったアスファルトが死の予告に染まる。そう、感じた。だから、音は叫んだ。それは本能だ。

好きだからだ！

「桜魔！ 桜魔！ 今、聖剣で癒すから！」

端々の血管が見えるまで、桜魔の目玉は見開かれた。

「な、何だって……」片手で覆うのを止めた唇は濁った濃い血で口紅が引かれていた。「それじゃあ、俺は……今まで……」掠れた声は生暖かい風と共に音の恋心を貫いた。「お前が、音がいたから、ギターを弾き続け」それは恋が成就する可能性と悲恋に終わる可能性を同時に含んでいた。「ちくしょう……俺、死ぬのか。本当は嫌な、なんだ。あ、ああ、ああああああああああああああああああああああああああ……ウヴオあ」声にならない声。「ちくしょう。俺、俺」言葉が見つからないんだね、と音は柔らかく微笑む。唇は湿っていた。眼が痛い。痛い。「ガキン頃から、ああ、ずっと……」もう、良い……と音の唇は微かに震える。細胞一つ一つが声を出せ、と命令を下す。「自分で」桜魔は息を吐く。周囲のライブを見に来てくれた観客はその息の行方を静かに、厳粛に見守る。「あり続けて……」

と、ここできるようく、桜魔は顔を上げて、音の涙を見つめた。

「それは効かないって言っているでしょ！」

恋する少女の、音の声はあまりにも自分の理想とは反覆していた。それはまさに戦場における聞き分けのない部下を叱咤する勇者の高圧的な声だった。しかし、表情は恋人を心配する少女。

遠くから……サイレンの音が聞こえた。

しかし、そのサイレンは夜の闇を全て、照らすには脆弱過ぎた。

「ターニングポインター君。見張った甲斐があったというものだ」
やはり、衣螺絢はスーパーヒーロシミサエ周辺に住んでいた。この前と違い、ブレーザーとズボンだが、そんな些細な事は気にしてはいられない。どうしても、バベルシステムの恩恵が必要だ。あれならば、神の理を破れる。

衣螺絢は焦げたコンクリート壁や、瓦礫の山と化したスーパーヒーロシミサエを眺めていた。

「あなたは？ この前の」と、振り返り、衣螺絢は女の子のような愛想の良い笑みを唇に含む。「この前はどうも、ありがとう」――

鋭い刃が絢の首を襲う。彼には見えていない。しまった……彼が動けば、と音は考えたが、そんなのでもいい。必要だ。神の理を破る力が。

「教える！ これ程の期間があった。君はもう、魔王と接触しているはずだ」

「……あなたは一体、何ですか？ いきなり、人に剣を向けてくるなんて！」

「ほう、これを見れる？ 君は大魔王か……」
「え」

驚く衣螺絢。何故？ という顔をしているが、音は教師ではない。よって、どうでもいい。桜魔を回復させる力だけが今の音の心を占めている。

「大魔王君、君は調整世界の法律では魔王のものだ、と。知ってるか？」

「ええ、以前……ゆずが冗談で……。といいますか、僕は衣螺絢というちゃんとした名前が」

「ターニングポインターだろうと、この剣は容赦しない」

「何の用ですか？」

「私を魔王のいる場所まで連れていけ！ 私は勇者 兆詩音。そして、この剣は聖剣 アキシオン」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1325x/>

魔王幼女 宮之ゆず

2011年10月28日02時14分発行